

# 庄内

諏訪神社

奉納

願主

伊地知新七

大正四年一月二十八日

第11号

庄内の昔を語る会





庄内諏訪神社社殿

表紙写真説明

庄内諏訪神社

この社は、都城島津家の初代北郷資忠が文和四年（一三五五）に創建したと伝えられています。

資忠は戦功によって足利尊氏から北郷三〇〇町（庄内・西岳・山田など）を拝領しこの地に入部しますが、薩摩を出発する日、尊崇していた鹿兒島の諏訪神社に参詣しました。

その時一つの鎌が社頭より飛び来たり着物の袖に入りました。資忠はその鎌を奉持して、ここに諏訪神社を建立しました。以来この神社は都城島津領内の鎮守様として、歴代領主の尊崇も厚く祭礼も盛大に行われてきました。明治三十五年には、お軍神にあった村社鹿島神社を合祀して村社としました。

社殿はそれ迄現在の階段下にありましたが、大正十三年現在地に総檜造りの社殿を新築遷座を行い現在に至っています。

ご祭神は天忍穗耳命、建御雷神、事代主神、建御名方神の四神で五穀豊饒、心願成就、商売繁盛、縁結び等多くの御利益があるとされています。

（徳郎）



# 卷頭言

庄内の昔を語る会 会長 野海 正治

去る四月十五日、都城市制施行七十五周年記念式典にあたり、市政功労者として市内各層の個人・団体の方々の表彰がおこなわれました。その折、私たち「庄内の昔を語る会」も、地域文化の振興に寄与したとして映えある賞を受けました。この身に余る受賞も、会員の皆様の熱心な努力、有縁の方々の温かいご支援、ご協力の賜と深く感謝申しあげます。

昭和六十二年、語る会は発足してから十三年、機関誌の発行も今回で十一号を数えます。祖先の築きあげた郷土の尊い文化遺産を、先人の足跡を後世に伝える重責を思い、この受賞を期に、更に一層の努力をと覚悟を新にする次第です。

庄内新郷立由緒を認められた前田政右衛門翁（東区前田政典氏の祖父、明治二十八年三代村長）はその手記の冒頭に次のように述べておられます。

大正十三年二月認ム

「余ハ本年六十七歳トナリ庄内新郷立ノ活歴史ヲ述べ得ル資格アリ余ノ竹馬ノ友ハ頽齡トナリ先輩ハ己ニ遠ク彼世ニ逝ク感慨無量ノ情轉タ禁スルコト能ハス若夫レ余等ト同一同輩ノ人ニシテ悉ク現世ヲ辞去スルニ於テハ新郷立ノ由緒何人カ能ク之レヲ教ヘンヤ本稿ヲ草スル動機全ク茲ニアリ」

今自分が筆を執らねば誰か後世に郷土の歴史を伝えるか、この信念と情熱。しかも「一片ノ材料半帖ノ記録ナク遠ク六十有餘年ノ記憶ヲ文章ノ骨子トシテ記述セリ」とあるように、卓越した記憶力、豊かな表現力でまとめられた手記は、今なお郷土の人々の貴重な資料として生きています。

平成十一年十月吉日



# 目次

## 巻頭言

## 特別寄稿

庄内に勤務して	庄内地区市民センター所長	八木正人	1
庄内の印象	庄内駐在所	伊東茂雄	3

## 歴史編

庄内の馬頭観音(続き)	東区	坂元徳郎	5
火山灰に埋もれたムラ	東区 都城市教育委員会文化課	横山哲英	17
近世の安永諏訪神社祭礼について	鷹尾 都城市史編纂室	山下真一	21
乙房地区の変化をたどる	乙房 都城市史編纂室	武田浩明	24
庄内土地改良区の概要	平田 庄内土地改良区理事長	和田輝男	30
千草の霧島講	千草	志々目光郎	33

## 庄内町情報

宮崎「庄内会」から	庄内会会長	肥後兼行	35
学校便り			

### 庄内小学校

.....	教頭	後藤良雄	37
-------	----	------	----

### 菓子野小学校

.....	教頭	緒方和幸	39
-------	----	------	----

### 乙房小学校

.....	教頭	大浦文夫	41
-------	----	------	----

### 庄内小学校の戦前戦後の日誌発見

.....	宮崎日日新聞記事より		43
-------	------------	--	----

### 乙房保育園

.....	主任保育士	刀坂純子	44
-------	-------	------	----

### 菓子野保育園

.....	主任保育士	大田範子	45
-------	-------	------	----

## 文芸編





短歌

芦屋市 北條ミワ ..... 47

俳句

町区山元マス子 祝吉町 宮田安子 西区 蒲生とし子  
東区内野かね 平田 和田盛行 菓子野 長岡昭光  
平田平田ミチ

随筆

庄内の人(2) ..... 鷹尾 得能哲夫 ..... 49

関之尾と私 ..... 関之尾 入江秀子 ..... 54

『風の記憶』 ..... 前庄内地区公民館主事 花房徹 ..... 56

私の中の方言 ..... 大宮市 馬籠京子 ..... 57

手伝い ..... 川崎 前畑文利 ..... 60

30年ぶりの再会 ..... 千草 鎌田 巖 ..... 61

子や孫に語り伝える話

安永の坂道物語(一) ..... 妻ヶ丘町 瀬戸山 計佐儀 ..... 64

町制施行三十周年記念祝賀会 ..... 西区 清水省三 ..... 69

庄内製綱工場(マオラン工場)のこと ..... 東区 鎌田 学 ..... 71

昭和初期の嫁入りとその生活 ..... 東区 黒木 ツミ ..... 74

黒木ツミさんのこと ..... 編集部 帖佐 ミヤ ..... 76

菓子野の里寺 ..... 菓子野 菓子野 清弘 ..... 77

西南戦争のなかの関之尾の戦い ..... 関之尾 末原 兼光 ..... 78

十六歳で赤紙(召集令状) ..... 平塚町 山元 正三郎 ..... 83

終戦直後の庄内の電気事情 ..... 姫城町 湯前 隆一 ..... 85



奉納、浦安の舞	西	清水	たつ子	88
私の子供時代	都北町	長	峯 泰太郎	89
庄内地区の婦人会活動	町	宇	野 ユキエ	92
農協での若き日の思い出	東	山	元 哲朗	95
庄内ことば雑感	町	山	元 昭平	97
母の思い出	宮崎	田	川 清一	101
草創期の庄内中学校野球部のこと	宮	坂	元 庸	103
小学校の思い出	鷹	吉	牟 礼 フヂ	106
昔の十五夜まつり	西	和	田 義秋	108
夏休みの思い出	東	東	幸 哉	109
思い出(その四)	都	花	村 節	111
私の子供の頃、聞いた話	宮	長	友 壮 二	115
子は親の背を見て育つ(その二)	小	山	口 武 郎	116
あの頃(1)	妻ヶ丘	古	川 益 雄	119
ここ一年間の歩み(10号編集から11号編集までの間)				
ここ一年間の歩み		事	務 局	122
「文化貢献賞」を受賞		事	務 局	122
史跡探訪―北薩路をたずねて	東	帖	佐 ミヤ	124
志布志の史跡探訪の記	町	山	下 謙 二 郎	127
編集後記				130
平成十一年度 会員名簿				131

表紙題字 (故)大河内 浩 爾  
表紙写真 庄内諏訪神社参道



# 特別寄稿

## 庄内に勤務して

庄内地区市民センター所長 八木 正人

(北原町出身)

私が庄内に勤務したのは今回で二回目です。

最初の勤務は平成四年でした。その時は所長補佐と言う職務の関係から外回りの機会が少なく、従って地域の皆さんとの交流も希薄で、しかも僅か一年間の勤務でしたから庄内を知るには余りにも短かすぎました。しかしこの短期間の勤めの中で接した庄内の人達はとて礼儀正しく優しい人ばかりで「庄内はすばらしい所だ」と強い印象を受けたものでした。

そして、再び庄内に勤務を命ぜられて、嬉しさを胸に秘めながら赴任したのが平成九年の四月でした。あれから二年半、所長と言う重責を負いながら、庄内の皆さんにお世話になっていきますが庄内はやっぱりすばらしい所です。

職務上地域の巡回はもとより多くの会合に列席したり集落の皆さんと直接お話しする機会が大変に多くなりましたが、庄内の人達は礼儀正しく言葉使いも丁寧で大変優しいと言うことを実感しています。

この事は昔から庄内が備えている自然や歴史や風土、即ち庄内の土地柄に因るものではないかと思えます。

庄内には関之尾の滝、甌穴群を始め月野原、戦場原の台地等高千穂の峰を背景とする雄大な景観があります。そして庄内の中心を東西に貫流する庄内川は庄内の住民に悠久の昔から絶える事無く水を恵んでいます。

また庄内には多くの史跡が存在し大切に保存されています。庄内古墳を始め都城島津家草創期の領主墓や安永城跡、庄内の乱の戦跡稚児ざくら、そしてかくれ念佛洞や由緒ある神社寺院、狭い地域にこれほどの有名史跡が集中している所は珍しいと思います。

なお明治二年三島通庸公がこの地に地頭館を構えて庄内を都城盆地の行政の中心地にすべく「まちづくり」を断行しました。これが現在の庄内の町並みの基礎になっていると聞いています。が、これこそ今盛んに提唱されている「まちづくり」のさきだけでなくあると考えられます。

概略このような環境が、庄内の人達に祖先を敬い郷土を愛す

る心を育み、また庄内人であることの誇りと気質と人情を自然と醸成して来たのではないかと思います。

行政に対しても非常に協力的で有り難く感謝しています。

私の仕事の一つに、公民館長さんや各種団体から出される地域の苦情や要望事項を現地調査し関係課に繋ぐ役目があります。

庄内に溶け込んだ私としては要望実現の誠意をもって努めているつもりですが市の財政事情もあり、皆さんの要望の全てを満たす事が出来ず申し訳無く思っています。しかし市としては台風災害の復旧や市道の維持管理等は優先して実施する方針に変わりはありませんし、少しでも地域の人達に喜んでもらえる施策に取り組んでいるところです。また近頃要望の強かった城山公園に設置してある昔風のサイレン時報がミュージックチャイム時報へ変更された事と安永城跡の一部整備と遊歩道の整備が実現したことは特筆して置きたいと思います。

今、庄内の皆さんは公民館を拠点として新しく住みよい地域造りに取り組んでおられます。この活動は決して短兵急には参りませんがきっと成功されるものと確信致します。私共庄内地区市民センター職員も地域住民の一人となって精一杯努力し悔いの残らない勤めを果たしたいと思っています。

最後になりましたが、庄内の皆さんが今後とも「健康で明るい楽しい地域づくり」に邁進されますよう祈念し筆を擱おきます。





# 庄内の印象

都城警察署 庄内駐在所 伊東茂雄

(宮崎市出身)

私は今春三月の異動により庄内駐在所の勤務となりましたが、少しずつ地域の実情について理解できるようになりました。

この庄内町は本当に奥の深い文化と伝統と歴史を大切に保持し、又地域の皆さんがこの街を誇りとしていることを巡回連絡を通じて肌で感じました。

日々、皆さんと接するたびに「よかとこだなー」といった印象をうけましたが、その中で私の心が動かされる事柄が有りました。それは豊かな自然と、素晴らしい経験を持っている地域住民、そして恵まれた豊かな土地など三つの「利」を備えている街の構成です。関之尾滝から流れる清らかな水、大地を潤し高々とそびえる銘木、豊富な知識を持った人々、青く高く透き通った青空、これらの条件がととのった地域は数少ないと感心しました。

しかしながら、この街も時代の流れにかたず高齢化の社会が

訪れています。高齢者夫婦、独居老人が、他の地域と比べて多いように感じています。

そして、寂しい事に空き家、空き地、荒れた田畑、荒れた山々が少し目だつようです。この実情は地域の皆さんが一番理解していることだと思えます。

美しい石垣に囲まれた人家が外からの光に閉ざされてひっそりと沈みかえっている光景は、このままにしておくのは大変もったいないと感じています。

NHK朝のドラマ「すずらん」で猫又食堂のおかみさんが物の大切さをうったえた言葉を覚えていますがその言葉は「あーあーもったいない、もったいない」という名言です。

私は、ただこの地域をまわってNHKのすずらんを思い出しながら心の中で「このままでは、もったいない」と叫んでいます。

## ※私の感じた庄内地域の特色

### 1、豊かな人情

初対面の私に対して「何処から来たかね、お茶を飲まんね。」と、優しくおもいやる人情は本当に有り難いものですね。

都市化が進む中で地域間のつながりが薄れていく街が多くなっていますが、いまだ庄内人情を頑固に守っているおば

あちゃんがいることに大変感銘をうけました。

## 2、特技者の存在

趣味を越える特技者がこの街には沢山いるなーと感心させられたのが第一印象です。その道のプロがいるのも興味あることです。

農業者の特長……若者を中心とした専門の大規模農業をしている人に驚いていますが庄内米、野菜、酪農家、牛、馬、にわとり等の農業従事者がその道のプロとして頑張っているのも印象的でした。

## 3、文化の街

昔を偲ぶ石垣に囲まれた家々、庭石の美しさ等その伝統につつまれた庄内の文化により、多くの知識人、学者及び社会的有能な人々をこの庄内の街から送り出していることに驚いています。このような事が会話の途中で自然とつたわりますが、この伝統を是非までもって貰いたいと思います。

## ※若者の街への復活

庄内地域を活性化させる若者が定住しないことは淋しいものです。子供の楽しい笑い声は人々を明るくしてくれまし元氣を取り戻してくれるエキスです。

私はこの庄内地区をまわって驚いたことがありました。そ

れはひとり住まいのお年寄りが多いことですが、その他に空き家等をそのままにしていることです。

少し手入れして安く貸してやったり、モダンなアパートなどを建てて若者が住みやすい環境にするのも一つの方法かも知れません。

## ※おじいちゃん、おばあちゃんの知恵と経験の復活

元氣の良い人、少々病気がちで元氣でない人、皆で助け合いまだまだ若い者には負けない氣迫を取り戻す生活の知恵をお互いに出し合いましょう。そして若者に伝統と生活の知恵、人生の経験を伝えてほしいと思います。

おばあちゃんから優しく声を掛けてもらえることは、他所から来た人には一生忘れられない人生の思い出となり、自分もその人の様になりたいと心にひめることと思います。

私はこの街を「庄内人情、庄内人情」と叫んでいます。また数カ月の間に沢山のことを学んでいます。欲の深い私ですがこれからも益々伝統と文化と生活の知恵並びに人の情けを学んでいきたいと思っています。

最後に私は庄内駐在所に勤務して皆さんと身近に触れ合うことができることを感謝しつつ何かお役に立てればと願っています。今後共、一層ご協力のほどお願いします。



# 歴史編

## 史跡探訪（その十一）

### 庄内の馬頭観音（続き）

東区 坂元 徳郎

前号では馬頭観音についてその概要に触れ早速関之尾と川崎のバトカン三カ所を探訪しましたが 引き続き庄内に散在するバトカンを探訪します。稿頭の番号は創刊号からの探訪ヶ所番号です。

#### 六十 上平田の馬頭観音

上平田宮農研修館の敷地内に近代的な小さなコンクリート造りのお堂がありますが扉の中には極彩色の馬頭観音の石像が鎮まっています。

このバトカンは元ここより西方五百メートル位の畑の中にありましたが道路拡張工事の支障になり昭和五十一年現在地に移され祠堂も新築されました。中の観音像はこの時川崎出身の石工浜田藤五氏が新しく彫刻寄贈されたものです。



上平田の馬頭観音

祠堂脇の御影石の記念碑には次のように刻字されています。

正面 移転改築記念碑 昭和五十一年七月十八日建立  
裏面 福留善市 福留八重吉 蔵満清秀氏の發起により昭和四十四年四月馬頭観音建立 馬頭観音堂老朽化により昭和五十一年七月十八日上平田遊園地に移転祭典す

総工費 四八五〇〇円

発起人 福留善市 支部長 和田一男 会計 和田義則

役員 福永武夫 黒島逸雄 麻生正一 武輪栄吉 花吉秀盛  
花吉泰美

昔のバトカン祭りは春秋二回集落の有畜農家が総出で牛馬の

鎮魂供養や健康繁殖を願って盛大に行い農家合同の慰労の日にもなっていました。がここに移転してからは旧来のバトカン祭りは行わず地区の鎮守様として七月十八日を祭礼日と定め花火を打ち上げいわゆる「ロッカッドウ」に変貌しました。

(和田盛行さんの話を基に)

### 六十一 中平田の馬頭観音

平田自治公民館の南脇、こんもりした杉の太木に囲まれたコンクリート造りの祠堂があります。中に鎮座する三十センチ位の木座像は憤怒相の馬頭観音像ではなくにこやかな菩薩像です。仏様に鳥居は珍奇ですが神仏混交時代の遺風でしょうか。

祠堂の中に「昭和四十九年七月改築 総工費参拾七万円 建設者須賀賢宣 中平田戸数八拾四戸」の棟札があります。こここのバトカンも上平田と同じく旧来のバトカン祭りは行わず七月十八日に中平田集落の「ロッカッドウ」を行っ



中平田の馬頭観音

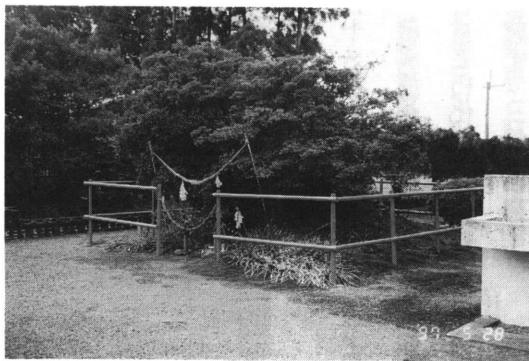
ています。

(和田盛行さんの話を基に)

### 六十二 下平田の馬頭観音

営農研修館と納骨堂（白光堂）の在る敷地脇に直径三メートル位のツツジで覆われたこんもりした土盛りがそれです。

土盛りの上に石柱らしきものが見えますがツツジの根に巻き込まれて姿を没しています。二十年位前までここに大きな桜の木がありました。それが枯れてしまいました。その後、ツツジが植えられました。昔は春と秋の彼岸にバトカン祭りをしていました。近頃は毎年七月十三日を祭礼日と定め下平田の「ロッカッドウ」として花火を打ち上げ盛大に挙行しています。地区の頭取が司祭で地区壮年会が祭りの運営をしています。



下平田の馬頭観音

### 六十三 農協の馬頭観音



庄内川の右岸平田橋のたもとの都城農協庄内支所農産センター敷地内、畜産広場に立っています。

コンクリートの台座に「畜魂碑」と刻まれた立派な自然石がどっしりと座っています。

建立の経緯については碑文を転載します。

『この地で先覚者達が畜産を以て農業を起さんと志し、たゆみない努力と幾多の困難を克服され農業を営んで来た過程が今日南九州随一の畜産地帯として着々その地歩を固め進展し続けている。私たちが温故知新今日農業の厳しさを再確認し畜産主軸農業で生きようと志している地区内畜産農家がここに庄内畜産連絡協議会を発足させ今後  
に幾多苦難の道があろうとも  
益々地域畜産を発展させると  
ともに畜産農家は協力和合の  
力でお互いの農家経済の繁栄  
を希求しここに畜魂碑を建立  
しこの地の畜産農家が協調し  
益々飛躍するよう願うもので  
ある。昭和五十五年八月二十  
八日』



農協の馬頭観音

毎年三月には庄内の畜産農家が全員参集して農協主催による畜産祭りが盛大に挙行されています。

#### 六十四 乙房の馬頭観音

乙房神社は妙見様をはじめ地区内に散在していたいわれの有る石塔を一カ所に集めこれらを祭神として祀った神社であります(本誌9号に詳記) そのご祭神の一つに馬頭観音があります。この馬頭観音石塔は元鉄道踏み切りの所の妙見神社の境内にありましたが乙房神社建立の時妙見神社と共に現在地に移されたものです。祭礼は七月十一日で「乙房神社ログガッドウ」として執り行われます。



乙房の馬頭観音

#### 六十五 宮島の馬頭観音

宮島公民館の敷地内にある中央権現社(本誌二号に詳記)に

合祀されています。元現在地より三〇〇メートル南方の山中にあったものを中央権現社第一遷座（明治三十四年）の時その脇に移された小さな土盛りの上に石が置かれていました。

なお当時は中央権現社とは別にバトカン独自の鳥居も立っていました。ところが昭和二十四年中央権現社と馬頭観音は同時に宮島公民館敷地内に遷されましたが、この時件の馬頭観音は中央権現社に合祀され現在は形としては残っていません。

元々中央権現もこの地方では「バトカン」と称していましたので、当時この馬頭観音を中央権現社に合祀することについては何の躊躇もなかったものと思われまます。

祭礼日は昔から四月八日（お釈迦様の誕生日）に決まっております。この日は厳肅な祭礼の中で牛馬の鎮魂供養、家内安全、五穀豊饒、無病息災等が祈願された後公民館において若者主催による伝統の敬老会が賑々しく挙行されています。昔は近郷近在からも多くの人がお参りに来ていましたが近



宮島の馬頭観音

年は宮島区の鎮守祭として伝統を守り継いでいます。

なお元の「バトカン」跡には二十年代の中頃まで供養の松が聳えていましたが松食虫によって枯死しました。また宮島公園下付近を現在でも「皮ハッパ」と称しているのは当時の名残でしょう。  
（今村 勇さんの話）

#### 六十六 千草の馬頭観音

千草の大きな三差路から小道を西に上った上ん馬場の一角にあります。朱塗りの鉄製鳥居には「千草畜産振興会 平成二年七月十八日」の銘があります。

榊の大木に覆われた境内の中央部の小さな土盛りの上に「馬頭観音」と刻まれた石塔が立っています。

この馬頭観音は昭和三十年代の始め頃創られたものです。がそれまで千草の集落には鎮守様が無く集落全員が集まってお祭りをする機会が有りませんでした。



千草の馬頭観音

そこで有志の発案によって、当時この場所にあった由緒不明の五つの塚を纏めて一つにしその上に「馬頭観音」の石塔を立てて千草の守り神にしたのがこのバトカンです。

その後毎年七月十八日（近年は七月の第三日曜日）を祭礼日と定め、境内に於いて諏訪神社の宮司による諸々の祈願祭を行った後引き続いて公民館広場に於いて盛大なロッガッドウを行っています。このロッガッドウは高齢者を招待して敬老会を兼ねているのが特徴で各班からの演芸、カラオケ大会、そして花火大会と集落総出の大イベントとなっています。

なお祭礼に先立って畜産農家の人達は昔の牛馬の墓場（通称クヌギ山）にお参りする習慣が残っています。

また現在地より北方五百メートル位の場所に「皮はっ場」と称する所がありました。が耕地整理によって地形が平坦になった現在では確認することは出来ません。（長友久二さんの話）

### 六十七 菓子野の馬頭観音

庄内古墳手前の広場にあります。四坪位の簡単な小屋の隅に朱塗りの鳥居に守られた石塔が建っています。正面に「馬頭観音、昭和五十一年八月吉日、菓子野部落畜産振興会」と彫り込んであります。

菓子野地区では昔長岡茶園の南方の天神瀬戸にあった「地

神サア」を公民館の所に移設し天神様を祭神とする菅原神社を創建しましたが、

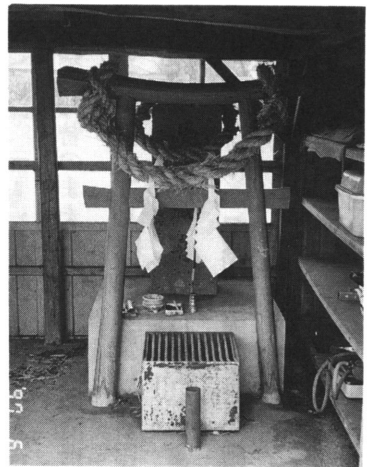
その時馬頭観音や、田のカンサーも一緒に合祀しました。従って菅原神社のお祭りは当然バトカンのお祭りでもあった訳です。

ところが畜産熱が盛んであった昭和五十一年、畜産農家の有志が相図ってバトカン様を菅原神社から分離独立させ、墓地の整理で広場になった現在地に移しました。石塔はこの時新設したものです。

現在、菓子野地区畜産農家二十一戸で管理していますが九月二十三日の彼岸の中日は牛馬の供養や繁殖を祈願した後公民館で盛大なバトカン祭りを挙げています。（菓子野清弘さんの話）

### 六十八 今屋の馬頭観音

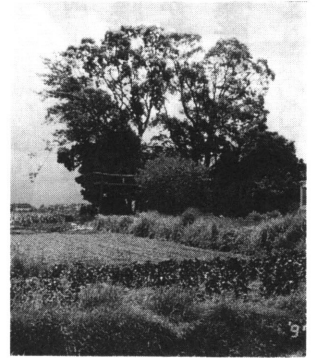
集落の北方上の原の畠の中、山田に通ずる県道脇にこんもり



菓子野の馬頭観音



とした林があります。道路から見える赤い鳥居は平成五年に今屋の畜産振興会が建てたものです。昔この辺は丘状になっていてオタコサア（霧島山）遥拝所として人々の集まる場所でした。現在は平地になっていますが由緒ありげな大木が数本密生しています。馬頭観音の小さな石塔は大木の根本に巻き込まれ注意しないと見えません。なお昔はこの場所に牛馬を埋葬していました。



今屋の馬頭観音

戦前から八月十八日を祭礼日と定め今屋区民総出でここに集まり供養のバトカン祭りを行っていましたが焼酎の勢いで喧嘩が絶えなかったので戦後は現場での祭礼を止め各班それぞれで実施するようになりました。この祭りを現在は「春祈念」と言っておりですがこれが昔のバトカン祭りであることを知る人も少なくなりました。

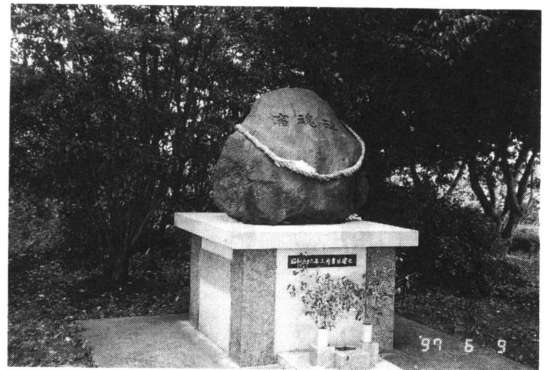
（土屋文夫さんの話）

## 六十九 稚児ざくらの馬頭観音

稚児ざくら公園の敷地内にあります。コンクリートの台石の上に「畜魂碑」と彫られた大きな自然石が座っています。台座

には「氏子熊原光善外34名の氏名と昭和56年3月吉日」と刻まれています。

元は現在地より北方五〇〇メートル、山際の小高い所にありましたが昭和五十六年耕地整理によりそこが畑になりましたので現在地に新しく建立したものです。碑の周辺に植えられている桜の木と山グ



稚児ざくらの馬頭観音

ミの木は元の場所から氏子が荷馬車で運んだものです。移転当時の氏子は宮路、安永、元町、天神の馬場中の牛馬飼育者で構成され、春彼岸の三月十八日に祈念行事を行って来ましたが、年々飼育者も減少し近年は宮路、元町の飼育者わずか八人になりました。然しバトカン祭りは昔のままのやり方で周辺清掃後幣を捧げて皆で祈念の飲み方を続けています。会費は五百円です。また年一回の祈念行事を最近は春秋の二回行っています。

（大川原美利さんの話）

## 七十 妙見坂の馬頭観音

東区オミケン坂（妙見坂）を上り詰めた右脇にあります。

どっしりしたコンクリート台座の上には「畜魂碑、昭和五十五年三月十八日建之」と彫られた自然石が座っています。台座には「馬頭観音 紀元二五七七年 大正六年三月十八日建設」と彫られた石柱が埋め込まれています。この埋め込まれた石柱は最初の場所に立っていた石塔です。また台座には「寄付者黒木光夫外二七名の氏名 施工者村田三男」と彫られた石板が埋め込まれています。

この馬頭観音は二回程移設されており当初は現在地より三百メートル位北側、現在の長岡茶園の辺りの亀沢家の所有山林に在りました。そこは小高い岡になっておりここに聳え立つ供養の松は遠く山之口からも望まれたと言います。

境内には三基の馬頭観音石塔が立ち並んでいましたが昭和の中頃このの一つを梶井馬場と北郷馬場の馬場中所有として分離移設しました。そこは現在地より百メートル位



妙見坂の馬頭観音

北方の道路脇で参道を登ると五畝歩位の広場があり周りにはさくらの木が五六本植えられ見晴らしの良い小高い所でした。

その頃のバトカン祭りは盛んなもので春秋二回の彼岸の中日に梶井馬場と北郷馬場の農家の人達が参集して供養行事を済ませた後ここにゴザを敷いて飲めや歌えの賑やかなナオライをしたものでした。

その後昭和五十一年の耕地整理事業でこのバトカンは再び移設の止むなきに至り現在地に鎮座しているものです。

現在は集落の有畜農家もわずか五戸となり春秋二回彼岸の中日に清掃をするだけの行事に変わっています。

なお牛馬の墓地は金石城の脇シンクッ（新口）の谷に在りこには近辺の集落からも斃獣を持ち込んでいました。

（島田晶一さんの話）

#### 七十一 亀沢家の馬頭観音

東区亀沢家の屋敷林に二基の石塔が在ります。

一基は文政五年□□十五日 奉造立 亀沢和多兵衛と刻んだ衣冠束帯の武士の座像、一基は大正六年 牛馬神 亀沢真澄建立と刻んだ石塔です。

このバトカンは元センジョバイの亀沢家の所有林に在り年末

には亀沢家から花香を執っていました。

ここは相当に古くから在ったものの様で旅人の視標になる大きな供養の松があり遠く山之口方面からも望まれたそうです。

この木を伐採したコビッドン（樵）は変死したと言う話が伝わっています。

昭和四十年頃この

辺の区画整理事業が始まり土地改良区から移転の要請があり自宅屋敷林に移設したものです。

祭礼は十一月二十六日氏神祭りとして家族で行っています。

（亀沢テツさんの話）

## 七十二 早馬神社

東区諏訪原にあります。現在は家が密集していてそれ程でも



亀沢家の馬頭観音

ありませんが昔は見晴らしが良く神社には格好の丘でした。しっかりした鳥居とコンクリート製の社殿は明らかに「神社」であります。皆さんが「バトカン」としてお祭りをしていきますので、敢えて馬頭観音の部に掲載しました。ご神体は馬に跨がった衣冠束帯の神様の木彫像です。

辞書によりますと早馬とは鎌倉時代から南北朝時代に於いて通信連絡のための急使、または急使の乗る馬の事を言いますが、それを葬り供養を続けているうちに馬の守護神として信仰されるようになったとあり現在では牛馬の繁盛鎮魂を司る神様として各地に祀られています。

此処の社殿には「明治二十七年十二月二十五日 諏訪原相中」と書かれた木札がありますが社殿は近年になって建て替えられたものです。なお現在の鳥居は五年位前に氏子が寄進したものです。

昔から三月十

八日と九月十八

日には諏訪原集

落五十戸位の氏

子が総出でお祭

りをしています



早馬神社の馬頭観音

たが今では僅か五戸になった牛馬の飼育農家(畜産振興会)の代表が幣を捧げるのみで祈念の飲み方はしなくなりました。

こんな事が有りました。昭和三十年頃のバトカン祭りの日に氏子一同神社の清掃を済ませた後高原の霞権現に向き、そこで例の祈念行事であるノンカタをしました所その後急に馬が怪我をしたり病気になったりする異変が続きました。これはキツトないがしろにされた早馬神社の祟りであつたらうと今でも語られています。

また昭和三十二年の頃、以前からこの境内にあつた「田のカンサー」を自分たちのものであると西岳の山中の人達が返還を要求して来ました。諏訪原では仕方なく慣習に従つてお礼の米俵を馬車に積んでテコシャンセンで送つて行つた事がありました。

諏訪原では「田のカンサー」がないと困るので早速次の「田のカンサー」を山田の池の原から連れて来ましたがこれは直ぐバレてしまつて取り返されてしまいました。その後此処には「田のカンサー」は有りません。(山田勝郎氏の話)

### 七十三 西区前ん馬場の馬頭観音

町の十字路下に湧水を引いた水の綺麗な池があります。この

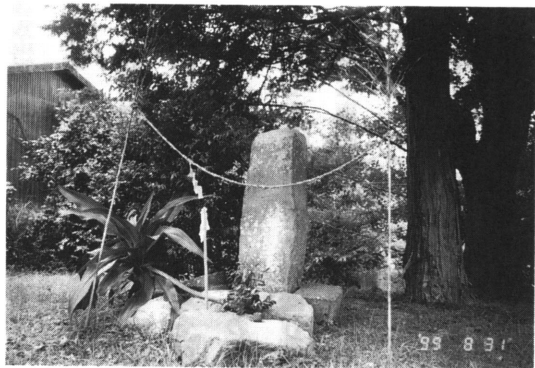
池を人々は「汾陽どんの池」

と言っています。この池の脇の小高い所に大きな自然石のバトカンの石塔が立っています。梵字の下に「立岩大明神文化十〇年丑九月吉日 二本松中」と彫られており地域の人達はこれを「バトカン」或いは「立岩どん」と言っています。

庄内の古い文献に二本松と称する地名がありますから、この辺の事かも知れません。

戦前は鳥居が立つて神社然としていましたがそれでも地区の農家では「バトカン」としてお祭りをしていました。近年になって牛馬の飼育農家はほとんど無くなり何時の頃からかこのバトカンは西区前ん馬場の鎮守様として祀るようになりました。毎月前ん馬場の東班と西班が交替で清掃を行い、七月十八日は昔程ではありませんが石塔の回りにしめ縄を張りツロを下げてロツガッドを続けています。

戦前はこの辺を「今村ん馬場」と言っていましたでしたが時の清水



西区前ん馬場の馬頭観音



清次町長から地名に個人の名を使ったらいけないと言われその後「前ん馬場」と称するようになりました。

また、この土地は写真背後の「汾陽どんの池」の一部であったものを、汾陽家から社領として寄贈されたものです。

(今村良男さん(九五才)の話)

#### 七十四 南洲神社広場の馬頭観音

南洲神社お祭り広場の一隅の一段高い所にあります。

五〇センチ位の古い石碑には「牧園馬頭観音 大正四年□□  
神田西相中」の銘があります。

以前は荘内荘上の清水フクさん宅の屋敷林の中に在りました。此処は見晴らしのよい場所です。五畝歩位の広場が在り周囲には桜の木が植えてありました。此処のバトカンは西區上神田の東、西、稲荷の班で管理し供養の祭礼も盛んにやっていました。昭和五十五年に現在地に移転してからは



南洲神社の馬頭観音

現在の有畜農家八戸で管理しています。祭礼も八月十八日の一回で神官さんにお祓いをして貰いその足で高原の霞権現にお参りに行き帰ってから当番の家で田植え上がりの慰労も兼ねてナオライをする事にしています。

バトカンに移転する時はカトツドン(加治祈禱師)を頼んでお祭りをして貰いましたが其の時こんな事がありました。

当時馬場中の班長をしていた私が「マト」になることになりました。「マト」とは移転の際に一時的にバトカン様が乗り移る人の事だそうです。

カトツドンは先ず「バトカン様が怪我をするといけないから」と私に爪を切らせて手を前に差し出すように命じました。カトツドンは半紙を細く三角に折って先を尖らせ「怪我をするといけない」と言って尖った先端を折り曲げました。そして私に「熱くなったら手を引きなさい」と言って呪文を唱えながらその紙を私の指先に近づけました。ところが不思議や不思議私の手はだんだん熱くなりたまらず引っこめてしまいました。回りの人達もビックリしていましたが不思議な事の中で移転を済ませました。

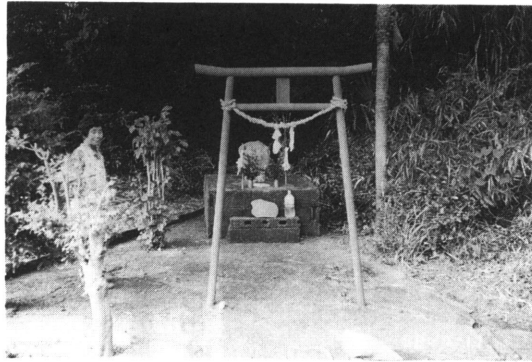
また現在のお祭り広場は墓場でしたが全ての霊を合祀して「合祀碑」を建立しています。移転の時カトツドンのご託宣に

よりバトカンの碑はこの合祀碑より高く据えました。

(乙守善雄さんの話)

### 七十五 ゲンツドの馬頭観音

ゲンツドの広い畠の東端、雑木林を切り開いてバトカンがお祀りしてあります。近年改築されたブロック積みの台座の上にこけ蒸した自然石が座っています。正面には「大日如来天保十四年五月」側面には「湯谷相中」と刻まれています。



ゲンツドの馬頭観音

これはもと湯谷の道路脇の杉林の中にあり東神田のバトカンとしてお祀りしていましたが昭和十九年四月東神田が東班と西班に別れた時西班はシンクヨのバトカンを、東班は従来のこのバトカンを祀るようになりました。その後昭和三十年頃湯谷道路の拡張工事にひっかかり、その時現在地に移されたものです。

祭礼は昔から四月十八日と七月十八日で現在も東班二十戸全

員で幣を切り、しめ縄を張りキチンとお祭りを続けています。

(丸山重春さんの話)

### 七十六 上ん段の馬頭観音

関之尾に通ずる県道脇宮竹倉庫前のこんもりした小高い岡の上にあります。

道路からよじ登るようになって行きますと三つの塚様の築土の上に榊の古木が茂り幣が立てられしめ縄が巡らしてあります。石塔は見当たりませんので昔から榊の木をご神体としていたものでしょうか。周囲には桜の老木が数本あり春には遠くからも望まれます。

昔は東神田地区四十戸総出のお祭りがありテコ、シャンセン、唄踊りととても賑やかなものでしたが昭和十九年頃地区が東と西に別れ現在は西の班十七戸によってお祀りしています。

祭礼は従来通り四月十八日と七月十八日の二回で周辺を



上ん段の馬頭観音

清掃した後高原の霞権現にお参りしたり温泉に行ったり西班牙の楽しい祈念行事になっています。

またこのバトカンは「シンクヨ（新供養）」とも言っていますが、これは東神田が東と西に別れた時、西班牙がゲントッド（当時湯谷にあった）のバトカンを（本体として分霊し現在地に祀ったのではないでしょうか。  
（宝満貞夫さんの話）

### 七十七 観音原の馬頭観音

昔の西岳往還観音原のダラダラ坂を上り詰めた所から右折二百メートル程の小道の奥のこんもりとした雑木の繁みの中に祀

られています。昔はこの小道の両側にはクヌギの木が植えられクヌギの参道と呼ばれていました。繁みの入り口にこけ蒸した石灯籠そして奥まった所に四十センチ四方の石室がありその両脇に石塔が立っています。右側の一基には

「大日如来 明治四十四年十一月二十三日」左側の一基に



妙見坂の馬頭観音

は「発起者 西区長猪股信吾 十三名の委員の氏名 明治四十四年十一月二十三日」と刻まれています。

以前は農家では必ず牛馬を飼育しておりましたのでバトカン祭りも盛大なものでしたが現在は馬場中二十一戸の内飼育農家はわずか一戸になりバトカンの管理も滞りがちになりました。

そこで近年になってからは馬場中の祈念行事として全員で管理するようになり春秋の彼岸の中日は当番を決めて清掃を行います。ニシメ持ち寄りで牛馬の供養と五穀豊饒家内安全等を祈願しています。  
（和田義秋さんの話）

### あとがき

昔から地域の人達が祀り続けている馬頭観音を一通り駆け足で探訪しました。

実は当該バトカンにまつわる言い伝えや昔の祭りの態様等の記録に重きを置きたかったのですが昔を語る古老も少なくなり事志と違い薄っぺらな探訪に終わってしまいました。

ただ昔から、庄内では各集落毎にバトカンがお祀りしてありそれが時代とともに多少の形は変わったとしても昔ながらのお祭りを絶やす事なく続けていたことは大発見でした。

なおこの底の浅い探訪記録を基に、探訪漏れやこれに関連す

る話でも有りましたら是非お聞かせ下さるようお願い致します。  
最後になりましたが、快く取材に応じて下さった多くの皆さんに心からお礼を申し上げます。

## 火山灰に埋もれたムラ

### 〈関之尾町・伊勢谷第一遺跡〉

東区 横山 哲英

(都城市教育委員会文化課)

#### 【はじめに】

遺跡をはじめとする文化財は、先人達の足跡を知る唯一の手掛かりであるとともに、私たち国民にとって共有の財産であります。ところが、開発優先の現代社会においては、こうした貴重な資料が十分に保護され、現状のまま後世に伝えられているわけではありません。とくに、地中に残る埋蔵文化財は、その性格上、現状保存することが難しいため、開発を行う前に発掘

調査を実施して写真や図面などで記録保存し、後世にその情報を正しく伝えるよう法律(文化財保護法)で定められています。

現在、日本国内においては、こうした遺跡発掘調査が毎年一万件以上行なわれており、都城市内でもさまざまな開発に伴って、年間十件前後の調査が実施されています。近年では、佐賀の吉野ヶ里遺跡や青森の三内丸山遺跡のように、史跡公園として整備・公開される遺跡も増えてきましたが、大部分の遺跡はこうした発掘調査終了後に破壊されるのが現状です。しかし、各地域ごとに異なる習慣や風土があるように、歴史にもさまざまな地域色が認められます。狭い国土の中に遺跡を無数に残すことは困難ですが、吉野ヶ里遺跡などの日本史解明に重要な遺跡だけでなく、地域を特徴づける代表的な遺跡を一つでも多くモニユメント(記念碑)として保存・整備し、目に見える形で未来へ伝えることは、けっして無益なことではありません。そして、これらの文化財から先人達の歩んできた道程を



伊勢谷第1遺跡遠景(関之尾の滝方向を望む)



正しく理解し、未来に向っていく上での糧としていくことが、現代に生きる私達が負うべき責務だと考えられます。

さて、今回は都城を含む南九州の人々にとって密接な関係がある、火山災害の影響を受けた遺跡をご紹介します。日本列島の中でもとくに多くの火山災害の歴史を持つ南九州の先人達が、自然との過酷な闘いの中でいかに生き延びてきたか、少しでもご理解いただければ幸いです。

### 【伊勢谷第一遺跡の発掘調査】

今回取り上げた伊勢谷第一遺跡は、火山性丘陵地である母智丘の西南部、都城市関之尾町字伊勢谷に所在しています。同遺跡に隣接している丸山遺跡（現在の母智丘カントリークラブ）

でも、昭和四十九年に発掘調査が実施されており、縄文時代早期（今から約七千年前）頃の土器などが発見されています。

### 伊勢谷第一遺跡の

調査は、市の母智丘・

関之尾公園緑地整備

事業に伴って、都城

市教育委員会が平成



伊勢谷第1遺跡・第1次調査区全景  
（縄文後期～古代の遺構群）

九年十一月から着手し、現在第三次調査（平成十一年五月～平成十一年十月）を実施しているところです。なお、ここで報告する第一次調査は、平成九年十一月から平成十年三月にかけて行った、取付市道及び駐車場部分（約三千平方メートル）を対象とする発掘の成果です。

### 【近世・古代の資料】

今回の調査では、三つの火山灰層（桜島起源の文明軽石層・今から約五百年前、霧島起源の御池軽石層・今から約四千二百年前、鬼界カルデラ起源のアカホヤ火山灰層・今から約六千三百年前）を境にした、四時期（近世、古代、縄文時代後期後半～晩期、縄文時代中期）の遺構・遺物を確認しています。

まず、近世（今から約三百年前頃）の段階では、道路や溝の跡などに伴って、薩摩焼や伊万里系の磁器などが出土しています。掘立柱建物跡は確認されておらず、出土陶磁器も少ないことに加え、土中からイネのプラントオパール（植物微化石）が検出されているため、この時期には、集落ではなく畑地などの耕作地が広がっていたと想像されます。古代（今から約千年前頃）についても、須恵器を伴う柱穴が若干検出されただけでしたので、集落の可能性は低いと考えていましたが、その後行われた第三次調査で、古代の遺構・遺物が多数出土していること

から、第一次調査区域の北西部一帯に古代の集落が存在していたことが明らかになりました。

### 【縄文時代後期後半～晩期のムラ】

都城盆地から高崎・高原にかけての広い地域に分布している黄白色の軽石、いわゆるボラ層は、縄文時代中期頃（今から約四千二百年前）に霧島の御池を火口とする噴火が起こったときに降った軽石層（御池軽石層）です。とくに、縄文時代の主たる生業である狩猟・採集活動を支えた森林は、この火山災害によってかなりのダメージを受けたと思われる、この地での狩猟・採集が困難になった当時の人々は、非常に大きな被害を受けたと想像されます。そのため、この軽石の堆積後しばらくは、当地における人々の生活の痕跡（遺跡）は途絶えてしまいます。

伊勢谷第一遺跡においても、この噴火から千年以上を経た縄文時代後期後半～晩期（今から約二千八百年前）頃になって、ようやく人々の暮らしが再開されたようです。今回の第三次調査では、竪穴住居や石器製作の工房的役割を果たしていたと考えられる小型の住居などが、この時期の土器や石器とともに発見されており、調査区南側一帯にムラが広がっていたと予想されます。また、この時代の土を調べると、周囲にクスノキなどの照葉樹が分布していた様子が認められることから、この時期

になってようやく御池の噴火で焼失した森林が回復し、狩猟・採集活動に適した環境が整ったと考えられます。

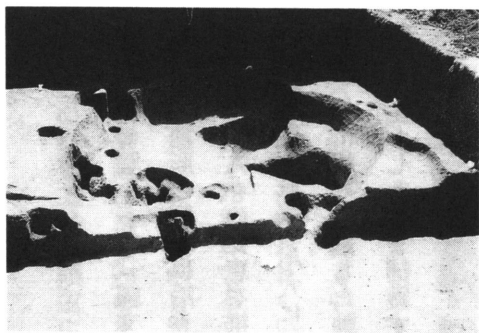
### 【火山灰に埋もれたムラ】

都城市内で発掘調査が行われるようになってまだ二十年足らずですが、これまで御池軽石層の直下には遺跡がほとんど存在しないと考えられていました。ところが、この調査を行った平成九年度に、早水町の池ノ友遺跡と伊勢谷第一遺跡において、御池軽石層直下の生活址がたて続けに発見されました。

早水池に隣接した池ノ友遺跡は弥生時代と中世を主とする遺跡ですが、御池軽石層に掘りこまれた中世の溝の底から偶然に焼け石や土器が出土し、御池軽石層直下にも遺構が残っている



御池軽石に埋もれた竪穴住居の検出状況



御池軽石に埋もれた竪穴住居の完掘状況

ことが明らかになりました。調査の結果、竪穴住居跡などが発見されなかったため、定住生活を行っていた可能性は低いと思われるますが、焼土（火を燃やした跡）や多数の土器片などから、キャンプサイトの痕跡ではないかと考えられています。

一方、伊勢谷第一遺跡では、調査区の壁面を精査していた際、御池軽石層直下に筋状の炭化材が残っているのに気付き、その部分を拡張して調査したところ、竪穴住居一軒を検出することができました。この住居は、廃屋になってしばらく経った段階で御池の噴火が起こり、残っていた建築資材（家屋の屋根材や柱材など）は焼け、浅く埋まっていた住居の窪みに軽石や火山灰が流れ込んだと考えられます。

ちなみに、これまでに発見された日本国内最古の火山被災集落は、古墳時代後期（今から約千三百年前）頃の榛名山の噴火で埋没した群馬県の黒井峯遺跡です。今回伊勢谷第一遺跡で発見された竪穴住居は、黒井峯遺跡のように、生活していた時に被災したわけではないため、今のところ日本最古の火山被災集落ということはできません。しかし、この住居を捨てた人々が新たに作り住んだ集落が近くに存在する可能性は高く、日本版のポンペイともいえる黒井峯遺跡よりもさらに二千九百年以上古い、まさに日本最古の火山被災集落がこの都城盆地のどこか

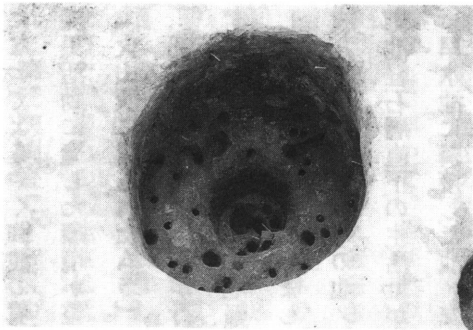
で発見される日も近いと確信しています。

### 【狩猟活動の痕跡】

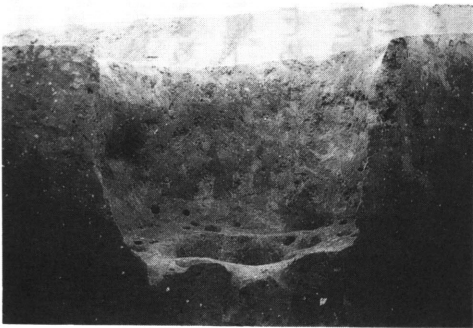
この御池軽石に埋もれた住居のさらに下の層からは、縄文時代中期の陥し穴が十基発見されています。地形の傾斜に沿うような穴の並びは、獣道を熟知していた当時の人々の知恵を推し量ることができません。また、陥し穴の底に残る無数の小穴には、割いた竹などを突き刺して「しがらみ」状に組み、落ちた動物を穴から上がれないようにすることで、生かしたまま捕獲することを可能にしていたようです。

### 【おわりに】

今回紹介した伊勢谷第一遺跡をはじめ、都城盆地には国内で



縄文時代中期の陥し穴完掘状況



陥し穴を半裁した状況

も有数の遺跡がいくつも所在しています。また、この庄内も中世に盆地統一を果たした都城島津氏（北郷氏）の拠点として、由緒ある土地柄であります。しかし、こうした歴史的環境に恵まれていた反面、現在の生活を優先するあまり、文化財にとつては逆風の時代が続いています。「現在は過去の積み重ねの上に存在し、現在もまた未来へ向けた道程の一部にすぎない」とを改めて認識するとともに、過去の資産をいかにより良い形で次世代へと橋渡しできるか、二十一世紀が目前となった現在、真剣に考える時期に来ているのではないのでしょうか。

## 近世の安永諏訪神社 祭礼について

鷹尾（町区出身） 山下 真一

（都城市史編纂室）

一

庄内町の諏訪神社は、江戸時代までは都城領主北郷氏（都城

島津氏）にとって最も重要視されていた神社の一つでした。

神社の由来は、都城島津家の始祖北郷資忠が鹿児島諏訪神社に参詣したときに、鎌が飛んできて資忠の袖に入った。それに感激した資忠はその鎌を持ち帰って御神体として諏訪神社を創建したと伝えられています。<sup>①</sup>この由来は都城の諏訪神社は鹿児島諏訪神社の分神であることを示しています。このことは「鹿児島諏訪御分身安永諏訪」と記された史料があることから確認できるでしょう。<sup>②</sup>福島金治氏によると、諏訪神社は鹿児島神社であり、軍事組織としての地頭集中性によって拡散していく島津氏家臣団を統合する機能を果たしていたとされます。<sup>③</sup>つまり、都城安永（庄内町）の諏訪神社は、鹿児島諏訪神社の分神であり、それは島津宗家へ統合される象徴であったのです。

現在、諏訪神社では七月二十八日に六月灯が行われていますが、江戸時代までは旧暦の同日に「諏訪祭礼」が行われていました。<sup>④</sup>この祭りは領主主導の祭りであり、天文二十四年（一五五五）の「御諏訪御祭礼之事」によれば、七月十六日に領主から祭礼実施を仰せ渡されています。<sup>⑤</sup>そして、その準備には領内のあらゆる身分の人々があたっていました。この祭礼では、領主による直接参詣も行われていたのです。



本稿では、天明元年（一七八一）に行われた祭礼の様子を見ながら、祭礼の持った意味について考えてみたいと思います。<sup>6)</sup>

## 二

諏訪神社祭礼は例年七月二十八日に行われていますが、領主の直接参詣が行われる場合、天文二十四年（一五三五）、寛永三年（一六二六）は七月十六日に諸役人に通知されています。天明元年には四月十五日にはすでに通知されていました。これは領主の直接参詣が、貞享三年（一六八六）以来九十五年ぶりということもあって、その式のあり方を調べる必要があったからだと思います。

諏訪祭礼にあたっては、当時の都城領主島津久倫や祭りに関わる人たちに対して、四月十五日以降穢れに触れないようにと伝えられています。それは、「諏訪服忌人之事」という史料で明らかです。ここには「服」すなわち喪に服する期間は、「忌」すなわち穢れを忌む忌引き日数とは別に数えること以下、十五条に及んで規定されています。これらは、死や血の汚れを避けようというもので、諏訪神社を清浄な場として設定してその權威を高めているといえます。

さて、具体的に祭礼の準備に取りかかるのは七月十三日から

です。このとき安永の正祝子が都城の普請方に訪れて、鍛冶屋に注連卸を行います。そしてその後各門農民によって、領主の通る道筋の整備や、祭りの会場となる諏訪神社境内の棧敷等の会場設営などが行われています。なお、棧敷は領主用、武士用、農民用といったように身分によって分けて設置されているのが特徴です。

## 三

七月二十八日の祭礼当日は、早朝に領主参詣の通路筋を安永居住の社人が清めます。朝六つ時に領主は諏訪神社に向けて出発します。その行列は総勢約二六〇人を数え、さながら行軍を思わせます。これは大名行列と類似していますが、その中には神馬の口引を宮丸村・木之前村人が行い、鉄砲一〇挺持ちを本町、弓一〇挺持ちを三重町、槍一〇本持ちを後町の町人が行うといったように、武士以外の百姓・町人が加わっていました。この行列で安永の諏訪神社まで進んでいきます。その道筋は、祭礼前に道普請によって整備、清められており、この大行列を道筋の人々は見るとは見せられることになるのです。また御幡が奉納されますが、その願文には「国家豊饒」「武運長久」「天下泰平」「君臣快樂」「保内安全」と書かれています。

領主が神社に到着する頃、鳥居の内では領主御一門の者が待ち受け、領主の御棧敷を安永衆中三〇人が袴着用で警護します。社頭で舞楽などが行われ、やがて領主が御棧敷に入り、その正面に座ります。ここで門農民による相撲が行われますが、勝者には布二反が下賜されることになっています。このあと、流鏝馬が行われ、最後にあげ馬が行われていました。流鏝馬終了後、地頭の酌で番頭・近習役などの武士役人に、また二、三ヶ所で御小姓役の酌でその他の祭礼参加者全員に酒が振る舞われるのです。棧敷ではお菓子が振る舞われ、以上で祭礼は終了します。

#### 四

だいたいこのような形で祭礼は行われていましたが、これらはどういった意味を持っていたのでしょうか。先にも見たように安永諏訪神社は鹿児島諏訪神社の分神であることが明確にされており、鹿児島へ統合される象徴でした。都城にとって領主が「御社参」といえば安永諏訪神社のことであり、都城の鎮守としての役割を持っていたものと思われれます。したがって、領主が安永諏訪神社に参詣することは、そのことによって領内の安泰を図るとともに、同時に鹿児島へ統合されることになったともいえます。

諏訪神社祭礼は領主主導の祭りでした。それは領主と領民の出会いの場であり、その準備の過程や行列、棧敷のあり方は領主の権威・威厳を示し、さらに領内の秩序の視覚化がなされたといえます。つまり、人々は領主の行列の中に農民・町人が組み込まれていること等を見て、自分たちが都城島津家の支配する都城領の一員であることを再認識させられたと思われます。また領主の参詣は、領主が領民の代表として領内の安全や自らの武運長久を祈るものでした。祭りそのものは相撲・流鏝馬・酒の下賜によって、領主と領民が一緒に楽しみ、一体感を生じさせ、領内統治の役割を果たしていたと考えられます。安永諏訪神社祭礼は、近世の領民の心意的な支配装置として機能していたといえるでしょう。

#### 註

- (1) 『三国名勝図会』巻四(青潮社、一九八二年)。
- (2) 『荘内地理志』巻二五(都城市立図書館所蔵謄写本)。
- (3) 福島金治『戦国大名島津氏の領国形成』(吉川弘文館、一九八八年)二二九頁。
- (4) 『宮崎県史 史料編』中世二、都城島津家文書九。
- (5) 同右。
- (6) 以下、拙稿「都城島津氏と諏訪神社祭礼」(『宮崎県地域史研究』九・一〇合併号、一九九七年)による。

# 乙房地区の変化をたどる

## ― 変わる景観と地名 ―

十三年九月。

### 二 地図から景観を読む

まずは次に示した五枚の地図を見比べてください。これらの地図は、それぞれ①明治二十一年、②大正三年、③昭和十年、④昭和四十四年、⑤平成五年のものです。

それぞれの地図から、当時の乙房地区の景観を読み取ることができうえ、これらを比較することによって乙房地区の景観の変化を探ることができます。

①の地図は、第六師団参謀部が作成したのですが、当時の河川や道路の様子がよくわかります。おそらく、江戸時代の景観とあまり変わっていないのではないのでしょうか。

②の地図からは、次のようなことがわかります。

- ・ 鉄道（吉都線）が開通していたこと。
  - ・ 吉都線と県道御池・都城線が交差していたこと。
  - ・ 小学校がすでに現在地にあったこと。
- また、③の地図からは、

- ・ 県道財部・庄内・三股線が開通していたこと。
- ・ 乙房橋が架けられていたこと。

などが読み取れます。

### 一 はじめに

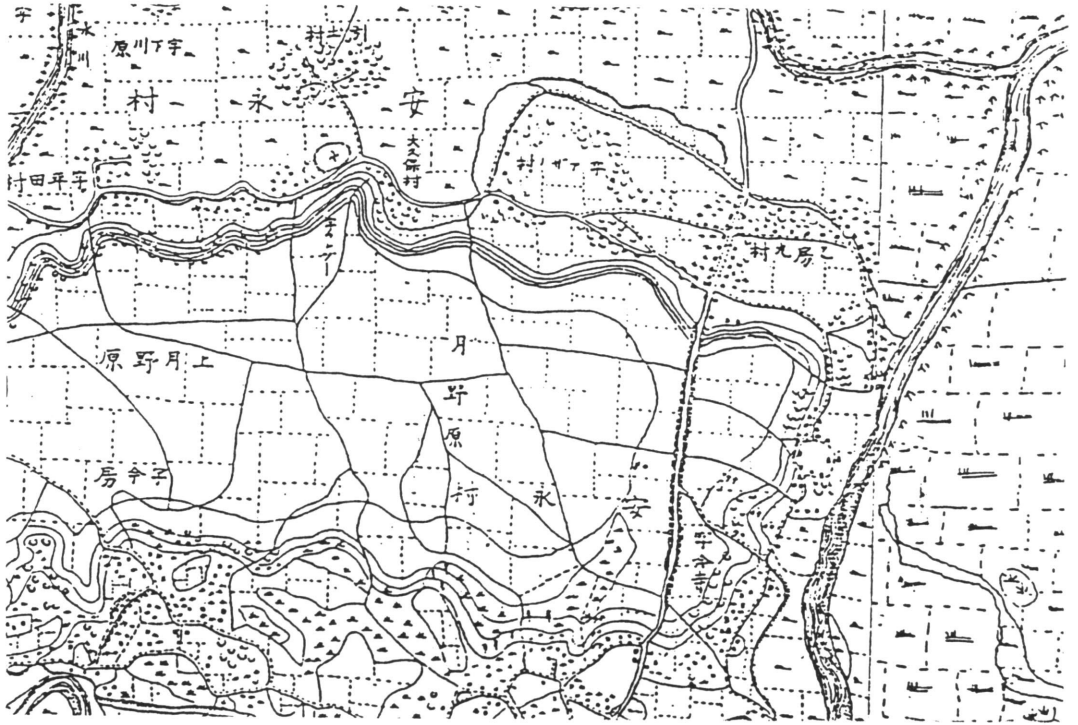
私たちが目にする景観は、自然条件の変化や人間の自然への働きかけ、人間生活の利便性追求などにより、少しずつ変化しています。<sup>(1)</sup> 今後もそれは変わることなく、少しずつ、時には大きく（たとえば、志布志高規格道路建設などによって）変化していくことでしょう。

そこで本稿では、乙房地区（ここでは、おもに乙房小学校区を対象にしています。）の景観がどのように変化してきたかを見ていき、併せて江戸時代の史料から、過去の歴史を知るうえで重要な役割をする地名の紹介を試みたいと思います。

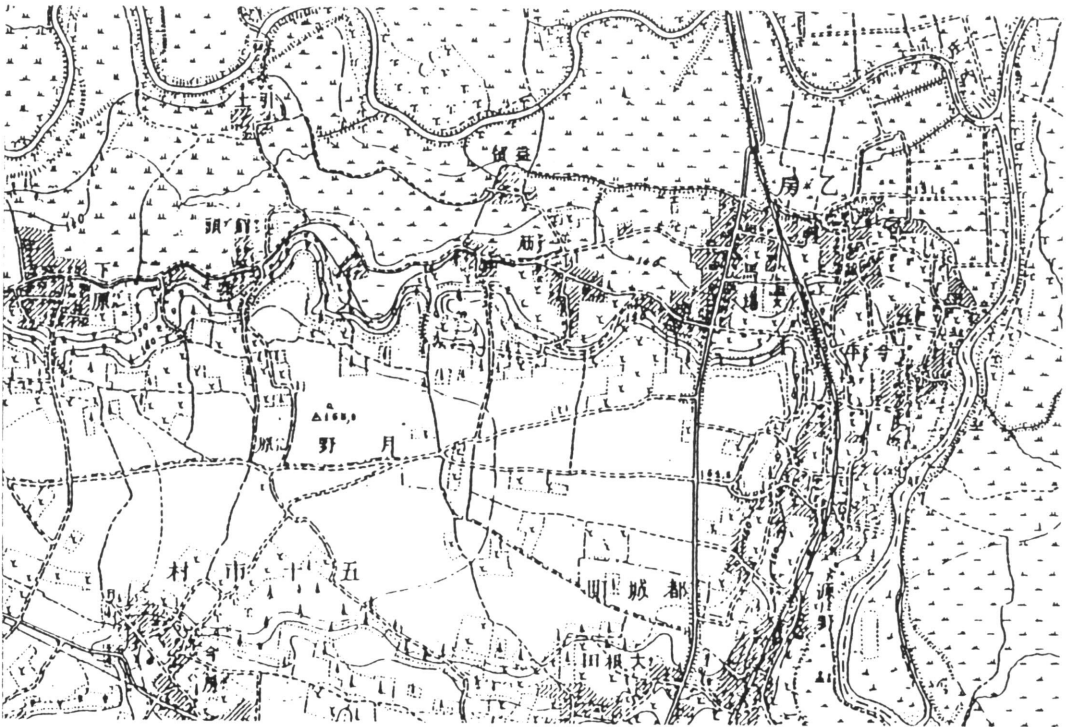
註

(1) 日下雅義「河内平野の変化をたどる―歴史地理の方法」

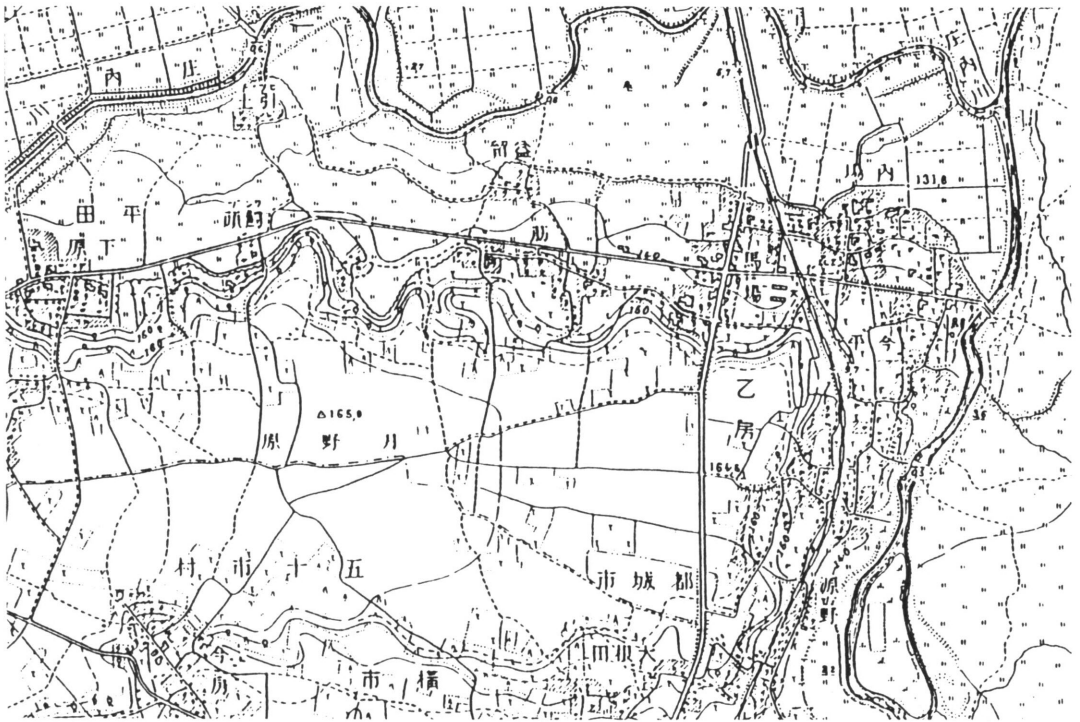
〔歴史の読み方2 都市と景観の読み方〕朝日新聞社 昭和六



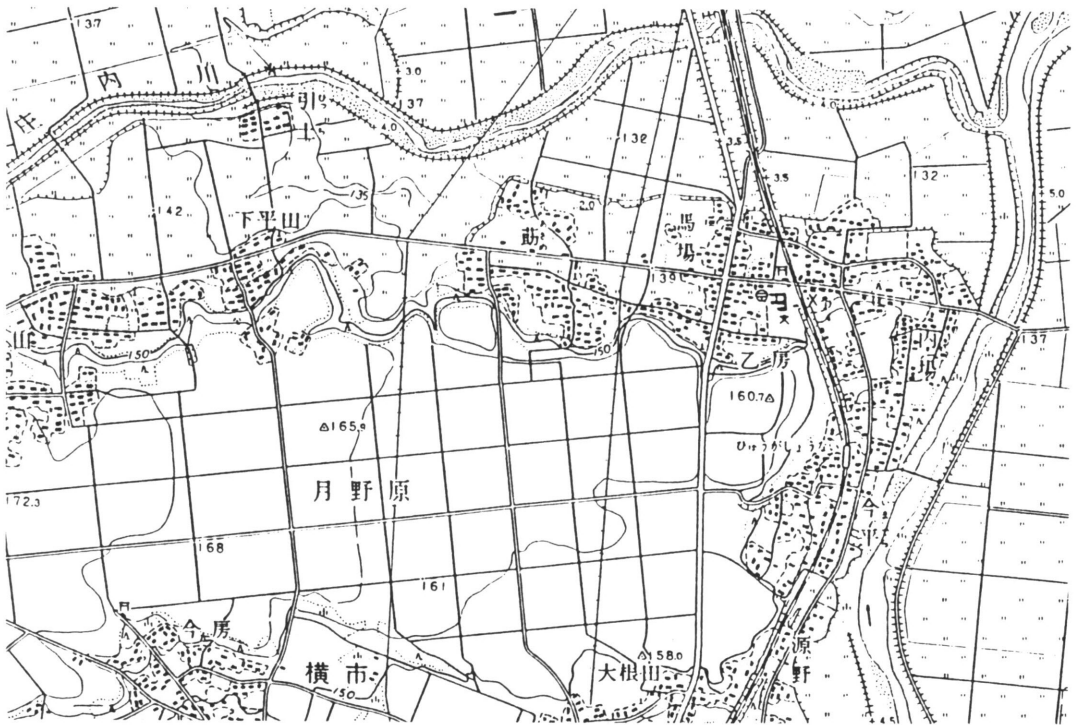
地図①



地図② (2万5千分1地形図「庄内」の一部)

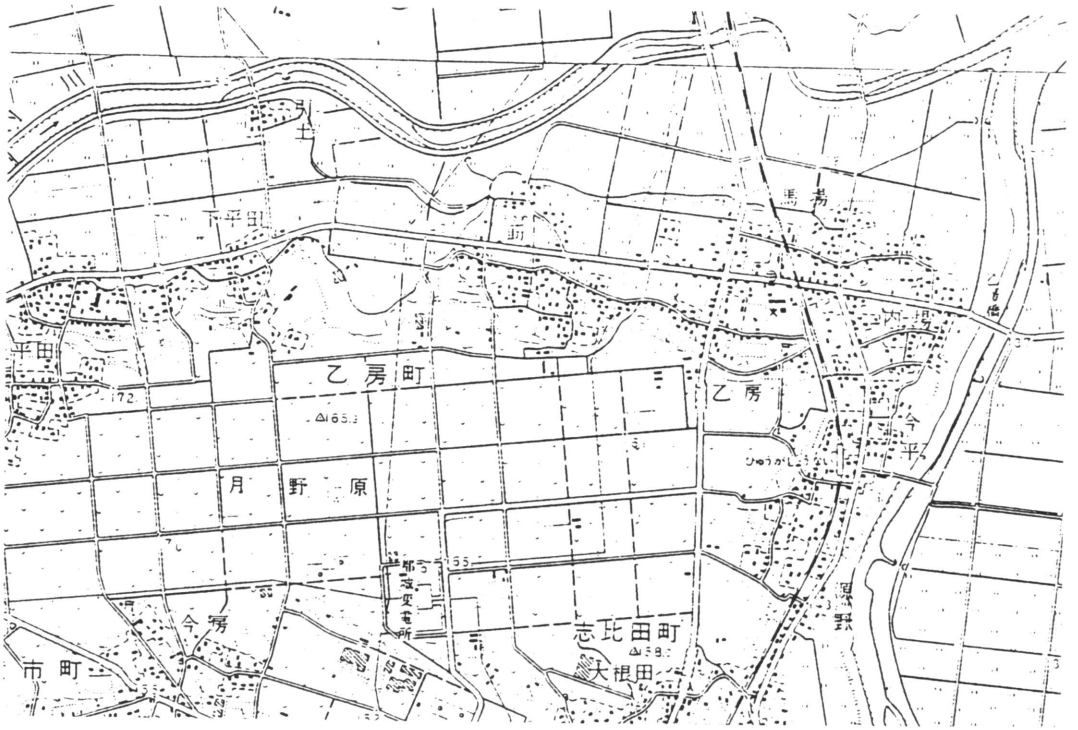


地図③ (地図②に同じ)



地図④ (地図②に同じ)





地図⑤ (2万5千分1「都城市管内図」の一部)

さらに、④の地図には日向庄内駅が記されており、⑤の地図からは乙房神社が現在地に移動していることがわかります。

まだまだたくさんの変化があると思いますが、あとは読者の皆さん自身で見つけて楽しんでください。

以上のように、過去の景観を知るうえで地図がたいへん貴重であることを理解していただけたかと思います。また、地図のほかにも、写真や古文獻なども景観を復元する重要な情報になるので処分せずに保存して、後世に伝えてほしいものです。

### 三 乙房の字(あざ)

『荘内地理志』巻七十七に、南前河内村の田畠あざ名が次のように記されています。

南前河内村	一 王子川原	一 引土川原	一 金石川原
一 満永川原	一 正牟田	一 沖田	一 平田
一 源納	一 今平	一 下水流	一 中嶋
一 頭無	一 新町寺	一 新町	一 上和田
一 立野	一 上月野原	一 下月野原	一 下原
一 後原	一 釘村	一 広峯	一 木之下
一 橋之口	一 小松ヶ尾山	一 乙房丸	一 馬込山
一 川畑	一 勘		

また、天保二年（一八三一）の「諸村門名調帳控」<sup>①</sup>に、  
一前河内村

王子門 本平田門 福永門

上和田門 和田門 今平田門

新町門 続山門 蔵満門

徳留門 満永門

右地名を平田と相唱申候、

大久保門 小久保門 益留門

右地名を大久保と相唱申候、

徳丸門

右引土と相唱、引土と申字御座候、

助ヶ久保門 定増門

右地名を助と相唱申候、

乙房丸門 中島門 中吉門

馬籠門 月野門 立野門

権現地門 吉永門 来住門

〔朱書〕  
〔本〕  
宮之元門

右地名を乙房丸と相唱申候、

（後略）

とあります。

これらのうち、数多くの地名が現在も使用されていますが、すでに消え失せたものもあるようです。また田畠の字は、ほ場整備事業などでその正確な位置はわからなくなっていると思われる。昭和六十年に作成された旧字図（地図⑥）は、その復元を試みたものですが、使用地図が新しいために正確な位置を示しているか疑問が残ります。しかし、近世の史料にはない字名などが見られ、貴重な資料と言えます。

今後は、できるだけ古い地図に字の正確な位置、およびその区画を記録することが急務であると思われる。

註

（1）重永卓爾編纂校訂『都城島津家資料 第二巻』（都城市立図書館 一九八八年三月）所収。

#### 四 おわりに

以上、地図を比較して乙房地区の変化を探ったり、近世の史料に記された乙房地区の地名を紹介してみました。

特に地名は、先人の生活状況、あるいは土地の実状、その土地の歴史を表現していることが多く、これらを保存・伝承することは他の文化財と同様に必要不可欠なことであります。<sup>①</sup>

さらには、人々が口伝として引き継いできた通称名や小字の<sup>②</sup>



地図⑥ (都城市教育委員会作成「旧宇園」の一部)

中に残る小区画地名(小分け名)等を、地域の年配者を対象に聞き取り調査をすることも重要な作業であります。

そして、調査によって得られた地名の起源や語源の研究をすることで、郷土の歴史の探求への一助になればと考えます。

最後に、他の地区でも同様な調査が行なわれることを期待するとともに、資史料の情報提供をお願いして、小稿を終わりたいと思います。

註

(1) 田中浩・近藤滋「小字地名地図の作成について」(『日本歴史』第五四七号 一九九三年)。

(2) たとえば、星髪屋(稲元理容)の東側辺りを「オミケン」と呼んでいることが挙げられます。



# 庄内土地改良区の概要

平田 和田 輝 男

(庄内土地改良区理事長)

庄内土地改良区は都市市(旧庄内町、野々美谷町、夏尾町)と山田町大字中霧島地区が受益地となっております。

昭和二十四年土地改良法の制定により昔の庄内町普通水利組合が廃止になり庄内土地改良区を昭和二十六年八月十三日に設立し、その後昭和四十三年三月に夏尾町の馬渡土地改良区が合併しました。

## 一、組合員、役員 総代の状況

- (一) 組合員、一、九五八名
- (二) 役員(理事、監事)



## (三) 総代

選挙区	選挙区域	総代数	備考
第一区	都市市 乙房町	一二	総代選挙は土地改良法により県又は市の選挙管理委員会のもとに行われます。
第二区	関之尾町	六	
第三区	庄内町	一〇	
第四区	菓子野町	一〇	
第五区	野々美谷町	五	
第六区	夏尾町	三	
第七区	山田町 大字中霧島	四	
計		五〇	

市町別	地区別	定数		備考
		理事	監事	
都市市	乙房町	三	一	理事、監事の選任は定款により総代が総代会で選任することになっていきます。(任期は四年)
"	関之尾町	二	一	
"	庄内町	三	一	
"	菓子野町	三	一	
"	野々美谷町	二	一	
"	夏尾町	一	一	
山田町	山田町	二	一	
計		一六	三	

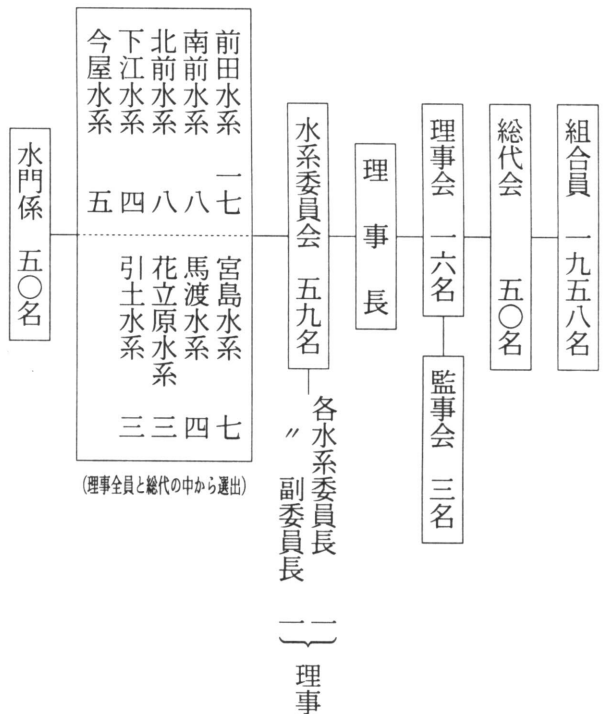
二、管理施設の状況

水系名	覆へクタル	水路延長m	水門ヶ所	取入河川	取入堰	備考
前田	二三〇・二	七、〇四五	一三	庄内川	関之尾	
南前	一八〇・九	七、二〇〇	一一	庄内川	関之尾	
北前	六六〇	五、一〇〇	一五	庄内川	関之尾	
下江	六一・九	三、六五〇	五	庄内川	平田	
今屋	五四〇	二、五〇〇	二	庄内川	平田	
宮島	五一〇	三、五五〇	六	庄内川	平田	
馬渡	七〇	三、二〇七	〇	丸谷川	竹之元	サイフォンヶ所 水管橋一ヶ所
花立原	六・四	一、〇〇〇	二	小田川	花立原	
引土	二・六	五五〇	一	西谷川	長岡	
計	六六〇・〇	三三、八〇二	五五			

三、施設の維持管理状況

土地改良区には九水系ありますが各水系毎に水系委員会を組織して維持管理をしています。組織は下記のとおりです。

庄内土地改良区組織図



水路の清掃を組合員の出役により年二回、五月と七月に実施します。また三水系（南前、北前（西区）、宮島）については落水後十月から翌五月まで、防火用水と集落内の家庭雑排水の汚物浄化を兼ねて通水をしております。

四、土地改良区の事業状況

豊かで魅力ある農業、農村を築くために、生産の基盤整備と生活環境の整備を推進して、組合員の利益を増進するために左



記の事業を実施しています。

(一) 役員、総代の研修

(二) 用排水路、各施設の維持管理

(三) 用排水路、各施設の補修と改修

(四) は場整備、農道整備、農地保全、農業集落排水

### 五、土地改良事業の実施状況

昭和六十三年より平成十年度まで(十一年間)に左記の事業を実施しました。

事業名	事業費(千円)	国庫補助千円	市補助千円	地元負担千円
団体宮 用水路整備事業	一五三、八〇〇	一一、五〇五	七、六九〇	三四、六〇五
土地改良施設 維持管理適正化事業	六〇、八三三	三六、四九三	六、〇八二	一八、二四八
県単独土地改良事業	一一、二〇〇	三、八六〇	七、八四〇	五〇〇
新農業構造改善事業	一〇五、七七五	七〇、〇一八	三五、七七七	〇
団体宮農地保全事業	六七、八〇〇	四九、一五五	一八、六四五	〇
県宮農地保全事業	三九六、〇〇〇	三九六、〇〇〇	〇	〇
県宮用水路整備事業	一八七、〇〇〇	一四九、六〇〇	三七、四〇〇	〇
畜産環境整備事業	一、八七五	一、二四一	六三四	〇
市単独事業	三〇、三九一	〇	三〇、三九一	〇
土地改良区単独事業	九五、三五三	〇	〇	九五、三五三
計	一、二一〇、二七	八一七、八七二 (七三・六%)	一四四、四三九 (一二%)	一四八、七〇六 (一二・四%)

### 六、歴代の理事長

代別	理事長名	任期	期間	兼職
初	東 清文	昭和二十六年八月—二十八年一月	二年五ヶ月	第七・九・十代 荘内町長
二	有田 三義	昭和二十八年二月—三十一年八月	二年六ヶ月	第五・八代 荘内町長
三	梅ヶ谷健一	昭和三十一年十一月—四十二年十月	九年十一ヶ月	第二代荘内町 議会議長
四	横山 新一	昭和四十二年十一月—四十四年五月	二年六ヶ月	
五	日高 真夫	昭和四十四年六月—六十二年十月	十八年四ヶ月	

以上で庄内土地改良区の紹介を終わりますが、有史以来今日まで先人たちが大地に刻んできました血と汗の結晶であります土地改良事業の成果を二十一世紀に引継ぎ、自然と調和した美しい、ふるさとと、豊かでゆとりある社会をつくるのが現在私達に求められている責務ではないかと思っております。



# 千草の霧島講

千草 志々目 光 郎

文献によると「講」は、信仰を同じくする者の集団と経済的な相互扶助を目的とする集団とがある。

しかし、経済的な講も宗教的な講を基礎として成立したものが多い。

宗教的講には、伊勢神宮を中心にした伊勢講と神道から発生した氏神講、田の神講、水神講と呼ばれるものがあり、一方仏教的講には浄土真宗の報恩講、念仏講など数多くある。

経済的、社交的な講には労力を貸し合う「もやい講」、屋根をふき替えるための「かや講」、ふとんを買うための「ふとん講」に至るまで、その機能や性格も雑多であるが、いずれも農民の協力と娯楽（寄合、おしゃべり、共同飲食）が主な目的であると記されている。

ところで、千草に伝わる霧島講は、宗教的な「ざんげ講」と言われるものであろう。

その由緒書きを見ると、その昔（想像するところ幕末か明治

の初め頃であろう）、千草の農民と平田の上の原農民との間に田んぼに水を引くかんがい用水の争いから大げんかとなり、死人が出る騒動があったのが起りのようである。

死人のあった小道（現在の千草公民館の東、岩佐家墓地の前）一面に、深夜シラスがまかれており、それが白木綿の帯のように、区民には奇妙に写ったようである。

信仰心の強い昔の農民たちのことであるので、通ると罰が当たると、関係者一同が相談して「念仏像」を建て霊を鎮め、お祓いをしたのが講の始まりと考えられる。

その時、この世の中で一番強い神様、おたこさん（霧島山）をとって霧島講と名付け、毎年一回、旧暦11月18日を決め、相集うことを約束したのが、志々目一族、黒田、白杵、鎌田家の人々である。

大正末期頃であろうか、いつの間にかこの講もおろそかにされはじめ、数年間、絶えていた。

ところが、その頃誰が言うともなく霧島講に火の玉（悪霊）が飛ぶとのうわさがたち、驚きあわてた関係者一同は鎮魂の碑（霧島神社）を建て、祈念の桜の木を植えた（大正7年9月2日）

祭祇者には次の13名が刻記されている。

志々目彦二（川越巖氏祖父） 志々目篤美（光郎祖父）

志々目弥一郎（忍氏祖父） 志々目光義（達夫氏祖父）

黒田経盛（故早苗氏の父） 藤山方蔵（勇二氏祖父）

白杵義盛（しのぶ氏義祖父） 佐藤甚五郎（敏弘氏祖父）

池田募（元、県議） 蒲生一（博司氏祖父）

蒲生侍（秀明氏祖父） 長田喜之助（ヨシ氏義父）

その後、この霧島講は子や孫へ継承され現在に至っている。

ここにその記録の一部を紹介すると、（藤山勇二氏所蔵）

昭和7年 志々目コト宅 昭和8年 白杵義盛宅

昭和9年 藤山才蔵宅 昭和10年 藤山紋四郎宅

昭和11年 黒田経盛宅 昭和12年 黒田経清宅

昭和13年 鎌田正市宅 昭和14年 鎌田巖宅

昭和15年 深川藤市宅 昭和16年 志々目正義宅

昭和17年 池田募宅 昭和18年 佐藤武敏宅

昭和19年 蒲生一宅 昭和20年 蒲生利幸宅

昭和21年 長田喜之助宅 昭和22年 坂元巽宅

昭和23年 川崎常太郎宅 昭和24年 志々目光治宅

昭和25年 志々目正晃宅 昭和26年 志々目憲明宅

昭和63年参加者

白杵和美、白杵しのぶ、藤山勇二、蒲生秀明、鎌田幸男

鎌田巖、志々目達夫、蒲生利弘、川崎敏則、志々目のぶ

志々目光郎、志々目晃、志々目義弘

平成8年1月7日（志々目光郎宅）

座主、心得の事確認

一、座主は煮しめ一パック（二戸につき）、吸物と酢物はなし、焼酎一升とお茶を準備する。

一、会員は白米一升持参する。

一、毎年、旧暦11月18日実施する。ただし座主の都合により前日に引き寄せてもいい。

より前日に引き寄せてもいい。



霧島神社近景

# 庄内町情報

## 宮崎「庄内会」から

庄内会会長 肥後兼行

(関之尾出身)

平成十一年度の宮崎在住者庄内会総会は去る三月の定例日に無事終了いたしました。ここに当日の記念写真をお送りし、一言、お礼のご挨拶を申し上げます。

今年もまた総会には「庄内の昔を語る会」から坂元徳郎さん、山元昭平さん、萩原忠子さん、帖佐ミヤさん達のご出席で華を添えていただき、また過分なるご芳志まで頂戴し有り難うございました。今後の総会には、「ふるさと庄内」と我々会員との交流を深めるため、より多くの方々への参加を期待しているところでです。

わが「庄内会」も、世代の断層や望郷感覚の格差など先行き

に多少の懸念はありますが、今年の総会の盛り上がりは、過去最高のものではなかったかと後日の語り種になるほどで、賛同者のある限り今後も永続することに致します。

この度、「庄内の昔を語る会」では都城市制施行七十五周年記念事業の文化部門で、地域文化向上貢献団体として栄えある特別表彰の栄誉を得られ、改めてご慶祝申し上げます。会の発足以来発刊された第十号迄の「庄内」誌に私達が知り得なかった数々の庄内の歴史や文化や風俗等の貴重な資料を発掘し掲載されました。その功績への表彰は時宜を得た快挙であり、我々、旧町民の誇りでもあると思えてなりません。

ひと頃、「庄内誌第十号」で終巻とかの噂を耳にし心惜しく思っていました。第十一号以降も続刊との報に接し安堵致しました。とは言っても大変な事業であり、関係される皆様方のご苦勞に深甚の敬意を表し、さらなるご活躍をご期待申し上げます。

一般の、この受賞祝賀会には我が宮崎「庄内会」にもお声がかかり、私と福永事務局長が出席し、格別なご歓待にあずかり誠に有り難うございました。席上では懐かしい皆様方と久しぶりにお会いし、思い出話は尽きず、時の経つのが惜しいくらいでした。

昨今は政治、経済、  
 社会情勢など先行き不  
 安に腹立たしささえ覚  
 えませす。しかし、こ  
 れは為政者に任せる他  
 に術なく、我関せず焉  
 として成り行きを見守  
 しかありません。  
 末筆ながら「庄内の  
 昔を語る会」の今後の  
 ご発展と皆様方のご健  
 勝を祈念し、併せて宮  
 崎「庄内会」にご協力  
 を頂きました各位にお  
 礼を申し上げご挨拶と  
 します。

平成11年度 庄内会総会 記念写真 平成11年3月13日(土)「河庄」



最終列

3列目

2列目

前1列目

野村 正雄	萩原 忠子	帖佐 ミヤ	森山 悟	中島 善武	迫田 ミツ	釘村 四男	本野 テツ	長岡 ユミ	古屋 照雄	丸田 ミキ	堂蘭 守正	肥後 サワ	山下 次雄	河野 通治	坂元 徳郎	小山田節子	堂蘭 明	高橋 辰男	肥後 兼行	福永美智子	今堀 義美	牧ノ瀬正雄	福永 一夫	佐藤ヨシエ	島田賢太郎	坂元 健児	坂元 国良	寺前ヨシエ	上柳 忠行	安藤 美利	寺前 正夫	白杵 サチ	宮島 昭夫	吉村 文子	海老原 安	黒木 義子	天達 晋	立元 利幸	園木 順一	今村 タツ	浜田 利雄	塚野 道子	今村 和子	迫田 輝雄	中島 昭典	高木 昌子
-------	-------	-------	------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------

撮影終了後の出席者(日高慎一・笹岡サチ子・甲斐清子)



# 学校便り

## 庄内小学校

教頭 後藤 良雄

「きらめく庄内小学校は今年で創立一三〇周年」

庄内小学校は三島通庸（明治期の政治家）が明治二年仮館で授業を始めたのを学校創立にしています。とても伝統のあるすばらしい学校です。庄内の伝統を大切に思う子供たちであってほしいものです。平成十一年七月三日（土）は庄内小学校の開校記念日でした。昭和十年のころは三十六学級、児童数一、八〇〇人のマンモス校だったようです。

学校の周りは緑が美しく、霧島山も関之尾も青い空にマッチし、とてもきらきらしています。子供たちの心も明るく輝いています。学校では、「とびだせ」ということで、社会科や生活



熊襲踊

科の体験学習のために校外学習をしています。「こんにちは」の明るい声が町々に響いています。

今年、開校一三〇周年を記念して平成十二年二月六日の日曜日に庄内小まつりを計画しています。地域とのふれあい、バザー、模擬店等を行い思い出に残る記念行事にします。

「PTA 歓送迎会に百三十五名」

PTA 総会のあと毎年開催され、PTA 戸数が百九十四なのに百三十五名の保護者の参加があり、先生方との懇親が一層深まりました。庄内地区は、保護者はもちろんのこと地域の方々からの信頼と協力の厚いところです。現在、学校では「地域に親しみをもち、主体的に活動できる子供の育成」を研究しています。

家庭教育学級では「お父さん方がたくさん参加されて家庭教育の大切さがよくわかりました。」という意見もありました。講演会の中から印象に残ったことは

- ① 忍耐力が不足している。いやなこともさせるべきだ。
- ② 子供は言うことはまねないが、することはまねる。後ろ姿の教育が大切である。

③ 親も先生も子どもの話を真剣に聞いてあげる。

④命がけで産んだ子を命がけで育ててほしい。

⑤がまんを知らない子に問題児が多かったので注意しよう。

### 「一年生四十七名が元氣に入學」

元氣に通學し、生活科の學校探検、トイレの使い方、給食、今年度採用したセンスある体育服を着ての体育学習、國語・算数のお勉強など、一生懸命頑張っています。

### 「二年生三十四名が生活科でお店やさんなど見學」

地域のケーキ屋さん、スーパー、郵便局、公民館などを見學し、どんな店があって、どんな暮らしにどう役立っているかなどを勉強し、紙芝居やペープサートにまとめ、参観日には班ごとに発表しました。

### 「三年生 環境教育公開授業（清山先生）」

谷頭の内村マツミさんにぞうきん寄贈のお礼を書こうという授業で、心温まる授業にとても感心しました。これは、ケーブルテレビで放映されました。「ちょうど、ぞうきんがなくなるところでした。大事に使います。そうじが楽しみになりました。」とお礼を書いた児童もいました。

### 「四年生四十八名 白寿園訪問」

六月十七日（木）に訪問し、合唱・リコーダー合奏のあと、各部屋までおじいちゃんやおばあちゃんの車椅子を押して、プレゼントや出し物などを披露し楽しい一時を過ごしました。入所者は、感動して涙を流されていました。子供の感想では、  
①「二、三人泣いていました。歩けなくてかわいそうでした。いつもベッドで寝ているので大変でした。」

②「おじいちゃんは、孫のことをなつかしんで泣いていたのかなあ。」と思いました。



4年 白寿園訪問



5年 熊襲面製作見學

「五年生四十九名 熊襲面製作の竹下武利さんに学ぶ」  
熊襲面は、地区での伝承活動と学習発表会で使います。地区

の伝統的な技術を生かした熊襲面作りについての感想では、「お面の一つ一つに作った人の気持ちや願いがこもっていること、丸のみと平のみを使って迫力のある面と何だか悩んだ面ができていて、竹下さんはすごいんだなあ。」と思いました。

### 「六年生五十九名 鹿兒島修学旅行と校内キャンプ」

庄内小学校の最高学年としての自覚を促し、すべての場面でリーダー性を育てるようにしています。みんな明るくて男女の仲もよく、学校行事やスポーツ少年団等でも大活躍しています。

## 菓子野小学校

教頭 緒方 和幸

### 学校紹介

本校は明治十一年、三原叢吾先生（鹿兒島出身）が当地に庄内小学校の分教場として、寺小屋を開かれ、その後、庄内小学校の菓子野分校を経て、昭和二十六年、都城市立菓子野小学校として開校しました。今年で創立四十九年目を迎えます。

現在、学級数七、児童数一三四名、教職員数十四名の組織で教育目標に「豊かな心を持ち、元気よく意欲をもって、自ら学

ぶ子どもの育成」を掲げ、日々、子どもたちの教育に当たっています。

### 本校の特色ある教育活動

#### ○ 菓子野クリーン大作戦

本校では、環境教育の一環として「菓子野地区からゴミをなくそう」という目標のもとに、菓子野クリーン大作戦という教育活動を行っています。これは、土曜日の朝、カバンではなく、ゴミ袋や手袋をもって、各地区の公民館に登校します。そこで地区の人から、ゴミ収集の様子やリサイクル活動の状況や問題点について話してもらいます。その後、グループ毎に分かれ、学校までのいくつかのコースを空き缶やゴミを拾いながら、登校します。学校では、集めたゴミを自分たちの手で分別作業を行います。この分別作業では、

上級生が下級生に分別の仕方などを教える微笑ましい光景が見られます。分別作業後は体育館でビデオを見たり、市役所の人のお話を聞いたりして、地域の自然環境を守るために自分たちができることについて、全校児童



で話し合います。

今年もクリーン大作戦以外に児童会を中心にして、空き缶や牛乳パックのリサイクル活動に取り組んでいます。もっともつと盛んにして、ゴミひとつない菓子野地区にしていこうとはりまっています。

### ○ 菓子野フェスティバル

菓子野小では、秋の一日を参観日にして、午前中は子どもたちのふだんの学習の成果を発表する「きらめき発表会」や「持久走大会」を行い、午後には、地区内の高齢者の方から、昔ながらの遊びや、昔から伝わる『ガネ』作りなどを親子で習う「きらり人に挑戦」という教育活動をしています。



この日は、親と子と高齢者が一堂に会し、世代間の交流が図られるなど、ふだんの学校生活では体験できない貴重な一日となっています。

### ○ 留学生との交流

本校では、毎年三月に、日本に留学している大学生が「からいも交流財団」の会員として、近くの農家にホームステイをするので、その留学生を学校に招き、子どもたちと交流しています。昨年度は、カナダ、台湾、香港、フランス、アメリカの五ヶ国の留学生とゲームをしたり、給食を一緒に食べたり、お互いの国の紹介をしたりして、交流を深めました。ふだん、外国の方と接することのない菓子野っ子にとっては、貴重な時間であり、今から楽しみにしている行事です。



## 乙房小学校

教頭 大浦 文夫

本校は、明治六年に創立され今年で百一十七年目を数える古い歴史のある伝統校である。学校の沿革誌を繙いてみると創立当時は、民家を開いたようなわらぶきの家で小松ケ尾の地にあつたようである。その後、大正十年に郷土の生んだ先覚者宮田孝之助翁が寄贈された校舎一棟をはじめ数回に及ぶ校舎改築や新築を経て現在に至っている。

本校は古くからかなり優秀な学校であつたらしく、記念誌によると明治後半の頃に数学が非常に良かった時があるようである。「県のテストで数学が百点(平均)であつた。従つて県下各地から不思議に思つて先生方が調査に来られたが、それに背くことなく実力を有していた。もちろん実力養成のため夕方電灯がつくまで叩き込み主義で教えこんでおられた。」という記事があつた。また、昭和二十三年には軍政部よりチャーレス・エフ・バラット氏が本校教育の視察に来られ、次のような評を残されている。

「本県の各学校の視察をしたが、こんなに立派な教育のおこなわれているところは初めて見た。本県の学校教師は、この学校を模範とすべきである。高等学校の教師たちもこの学校を

参観すべきである。」

「世界のいずれの所においてもかつて見たことのない最も良い学校の一つである。どうか皆さんの立派なる仕事を続けられるように。」

保護者の方も教育には関心が高く、昭和四十七年には、かの高名な児童文学作家の椋鳩十氏を招き、参観日を利用して講演会を開いている。

次に、現在の乙房小学校の様子を述べてみたい。

### 【学校教育】

#### ○ 校内研究

本校では、平成九年度から豊かな表現をする児童の育成をめざして研究を進めてきた。本年度は三年目に当たる。

本主題を設定したきっかけは、自分の思いや考えを相手に分かるように、筋道立てて話すことがなかなかできないということから始まった。子どもたちに話す力を育てようということを取り組んできた。このテーマにせまるため二





つの視点で研究を進めてきた。一つは、まず学級の中な  
んでも話せるような雰囲気をつくるということで学級づく  
りに力点を置いて研究していこうということである。もう  
一つは、自分の思いや願いを素直に表現できるように表現  
力の育成という視点である。すなわち、表現力を育てるた  
めに国語科や教育活動の中で、発表する場を多く取り入れ  
たり、話し合い活動の工夫を行ったりした。表現集会や詩  
の朗読等に取り組む朝の活動、校内放送の利用など児童の  
主体的な活動の場を多く設定し、発表や表現活動を体験さ  
せてきた。研究を進めていくうち、成果も上がってきた。  
今後は、さらに、しっかりと自分の考えを述べたり、相手  
に伝えたりしていけるよう研究を重ねていきたい。

#### ○ 交流活動

本校は、社会福祉普及協力校として、昭和五十五年から  
都城養護学校と豊かな心の醸成を目的に毎年交流を続けて  
いる。

本年も、各学年ごとの交流活動を実施した。事前に両校  
の職員が集まって、交流の期日・時間・参加児童・活動内  
容・移動の仕方などについて話し合い、綿密な計画を立て  
た。六月の実践では、交流の事前に養護学校の各学年の自

己紹介のビデオを学級活動の時間に見せながら交流の心構  
えなどについて話し合った。初めて交流した一年生も、養  
護学校の友だちの名前を覚えて仲良く遊ぶことができた。  
また、子どもどうしの交流はもちろん、職員やPTA役員  
との交流を深めるために、養護学校とのミニバレーボール  
や懇親会などで親睦を深めている。

#### 【スポーツ少年団活動】

本校では、スポーツ少年団活動が盛んである。低学年を除  
けば、各学年、児童の少年団所属率は八割から九割である。  
しかも、どの少年団も成績優秀である。ちなみに今年の活躍  
ぶりを列記してみると

○ 野球……………都城市連盟春期大会優勝（五月）

○ 剣道……………すきむらんど薫風杯準優勝（四月）

○ ミニバスケットボール

……………県大会優勝、九州大会参加（六月）

○ バレーボール…都城市連盟春季大会三位（四月）

そのほかにも、少人数ではあるが、サッカー、水泳、空手  
などでもスポーツに励んでいる。

## 庄内小学校の戦前戦後の日誌発見

### 教育現場の復興つづる

宮崎日日新聞記事より（編集部）

都城市の庄内小（前田博仁校長、二百八十三人）で、戦前、戦後の学校日誌や宿直当直日誌が見つかり、当時の学校の様子をうかがい知ることができる貴重な資料として注目が集まっている。近く、都城市史編さん委員らが調査する。

同校は一八六九（明治二）年の創立で、今年で百三十周年。資料は、今年四月に県立図書館から異動した前田校長が、校長室の戸棚を整理中に発見した一九一九（大正八）年以降の百五冊。雨漏りやネズミにかじられているため、傷みのひどいものもあるが、内容はほぼ解読できる。

一九年九月に発生した火災のため、それ以前の資料は残っておらず、また太平洋戦争中の四五（昭和二十）年八月六日に受けた爆撃で、同年四月―八月の資料は焼失している。

興味深いのは、終戦直後の教育現場が復興していく様子。

「全児童学校集合。二学期始業式で学校長より教学の方針にし訓示あり」「戦争終了に対し賜った詔勅の精神を体得実践することが先決問題である軽率妄動慎むべし」（九月一日の学校日誌）など、学校や教職員の心中の動きなどを日ごとに追うこ

とができる。

また「どんぐり収集及び食糧化に関する件」（四五年十月九日）「教育指導に関する件」（同十一日）「学校内の戦時色除去に関する件」（同日）など、当時、県などから出された通達も残っている。

同校ではこれらの資料を整理し、百三十周年記念誌としてまとめることを検討。

前田校長は「ほかの学校でも残されている可能性がある。各校でも資料が見つければ、学制改革が学校現場でどのように行われていたか解明が進むだろう」と話していた。



戦前戦後の庄内小の学校日誌や宿直当直日誌と、発見した前田博仁校長

## 乙房保育園

主任保育士 刀坂純子

### 少子化と高齢化に合った町づくり

今、日本では少子化、高齢化の大きな問題を抱えています。

このことは、今は深刻な不況とはいえ、世界有数の経済大国であり、高い識字率と、高い進学率を誇り、国は豊かで教育程度が高く、寿命も長いのに、女性の能力が社会で十分生かされていないことに因があるのではないかと思います。たとえば子育てに夢ももてて、老後の明るい社会が築かれなければいけないのではないのでしょうか。女性は子育て、高齢化などに大きな役割をもっています。その為には、女性の置かれている立場をもっと回りの社会が理解し、改善していくことが、これらの問題を解決していく近道ではないでしょうか。つまり、女性の能力が社会で十分、生かされるような地域社会であることです。その為には女性は常に主張し、闘う態度が必要であると思います。なぜ少子化なのか、女性の立場から考えてみると、女性のライフスタイルと価値観の変化があります。結婚は「しなければならぬもの」ではなく、結婚には職業と家庭が両立すること、家事、育児に協力できる夫であること、などの付帯条件が必要になってきています。

子育てについては、二十一世紀の日本の人口は減少する一方

高齢化のスピードが上がっていきます。フランスの百年、スウェー

デンの八十二年、イギリスの四十二年に対し、日本の高齢者人

口の割合は二十五年に二倍となっています。このことからい

かに高齢化のスピードが速いかが判ります。このことは男性よ

りも平均寿命が七年間も長い女性にとって、介護に大きな役割

を占めてくると考えられます。また独り暮らしの女性も多くな

る中、経済的な面や子供との関係、寝たきりのことなど、少子

化の進んでいるこの現実が恐ろしくなってくるのです。一人で

はなかなか解決できなくなるのではないのでしょうか。国とか政

治に頼るのでなく、皆なで知恵を出し合って、このことについ

て議論し、実現に向かって努力していくことが、今、求められ

ているように思います。

子育てに夢をもって、老後を楽しく過ごせる為の町づくり、

人づくりが必要なのではないでしょうか。その為には、自分な

りの生活設計（人生設計）をもつことが必要です。そして、女

性が働きやすい社会、子育てや人生を楽しめる社会、安心して

老後を共にエンジョイできる社会でなければなりません。つま

り、生活、福祉、環境を大事にする社会、男性、女性が共に家

庭の責任を果たし合う、男女共生社会が望まれるのではないで

しょうか。

「私たちはもっと、もっと知恵を出し合って、未来のある、子育てと、希望のもてる、高齢化社会になれるように努力する役割があります。庄内、乙房でそういう素敵な町づくりができることを願っております。若い人達が希望のもてる社会を切に願っております。」

## 菓子野保育園

主任保育士 大田 範子

「お茶だーい好き」の子供たち

「先生ノ今日はお茶会があるんだよねノ」「そう。今日はお茶会の日だね。」と言うと「やったノ」と、とても嬉しそう。この茶道に九年前に取りくんだのも、子どもたちに自然体で楽しみながら、生活のあり方を学んだり身につけてほしいと願ったからです。ゆとりのない現代、ゆっくりとした時間と空間の中で見える事は多いと思ったからです。もともと茶道の技法を学んでもらおうという魂胆はなく、その茶道をひとつの道すじとして、多くを学び取る事ができると思ったからです。

お茶会の席につくと、子どもたちは背すじをのびし正座をし

て待っています。最初は「にがい？」と感じられたお茶も、お茶菓子とお茶をおいしく頂けるようになり、それがひとつの楽しみにもなっているようです。

「もう一服いかがですか」「お先にどうぞ」「お先にちょうだい致します」「お手前ちょうだい致します」「おさげします」お茶会の中

中で礼儀をもって交す言葉の中に、お互いを思いやり感謝したりする気持ちが感じとられ、何とも言えない雰囲気でいい時間をすごしています。これは普段の保育の中ではかもし出されないとでも和らいだ雰囲気の中で、柔らかな言葉や動作でお互いを思いやり、見つめ合うことで互いを認め合うことにもつながるように思います。

私が保育園の中に和室(畳の部屋)を簡略ながら床の間と書院をつけて造ったのも、失われがちな日本古来の伝統文化を子どもたちの心に残してあげたいと、思ったからです。着物を着ることの少ない子どもたちにも、地域の高令者の方々に着物を縫っていただき、ひな祭りや端午の節句、又お茶会等に利用さ



せてもらっています。着物を着るとしぐさや行動迄も変える子どもたちを見て、微笑ましく思います。又、お茶の先生が和服で見えますが、和服の大人の方に接する事の少ない子どもたちは「今日はモミジの着物だったね」「おび止めがピカピカしてたね」と興味をもちます。先生もとってもしとやかにゆっくりと言葉をていねいに交わされるので、子どもたちは「先生大好き！」「お茶会大好き！」などと喜んでいきます。お茶を習っていく中で、子どもたちはお茶室の出入りの仕方、床の間拝見、掛軸やお花の拝見、お菓子やお茶のいただき方、お茶のたて方出し方など、理にかなった自然の動きを素直な心で表現していきます。こんな子どもたちはすばらしいと思っています。

また、一年の暦や自然の移り変りを見たり聞いたりして、自然を感じたり子ども同志教え合ったり、いけない事は注意し、教え合ったりしています。自分でたてたお茶をみて「ふわふわしたわた菓子みたい」口のまわりにお茶がついて「緑のおひげがついた」「お茶会の日はラッキーだね。おやつが二回だから」掛軸をみて「何んて書いてあるの」「どんないみ」とよく聞く子ども、「おじいちゃんおばあちゃんにもませてあげようね。」「お母さんにもませてあげたら何て言うのかな」と子どもたちの間で、たわいもない会話がはずんでいます。子どもたちが

自然体でお茶を楽しみながら学び、注意力を養い、あきず、あきらめず、知らぬ間に人が守らなければならぬ道徳を身につけていってくれるのではないかと思ひ、そして少しでも毎日の行いにつながっていけばと思っています。

例年同様、今月（八月）末には「お月見お茶会」があります。

日中の活動は、子どもたちを縦割りにして全児参加のグループ活動で、十五夜祭りに飾る草花摘みグループ、お店屋さんに行くお買い物グループ、一、二歳児も小さな手でおだんごをまるめるおだんご作りグループと、



十五夜祭りを皆んなで楽しみます。それ等を園庭に飾りつけ、すずやかな夏の夜にお茶席をもうけて、子どもたちが野だてしたお茶をふる舞っております。又、同時に天体観測（天体観測機材を設置して）もして宇宙に夢を広げる子どもたちの姿や、音楽会等をして、家族の方や地域の方々との夏の夜の楽しいひと時をすごすこととなっています。

# 文芸編

## 短歌

芦屋市（西区出身）

北條ミワ  
（旧姓清水）

○夏山の賑い果てし高原の

芒の原はえび色なりき

○えび色の尾花の果てにひとすじの

煙たつなり桜島山

○高原の芒の原は寂として

たぎる出湯の音いと著き

○三人の子巢立ちしあとの本棚を

吾が趣味の本徐々に占めゆく

○合鍵に鈴つけくるるいたわりを

夫老いたりとその手見つむる

○今開く音をも捉えんフィルムに

腹這いかまうる睡蓮の池畔

○霧おおう稲村の道を通動の

車が屋根を浮かして通る

○御先祖の導き給う菩提寺に

うから集いて普山式祝う

○年少に父君逝かれし御住寺の

研修なりて晴の普山会

○みどり葉のかこむ御堂に老若の

僧誦す経の和音麗し

○梵鐘の余韻追いたる魂を

山は吸いこみ無我に誘なう

○光りつつゆらぎて何処くへ流るるや

車窓に遠く木津川暮れゆく

○楠公の功は既に伝説の

ゆかりの山に架かる鉄索

○楠氏との謂れはおぼろの若人ら

霧水の咲くと金剛山を知る

※金剛山：この山系に楠木正成公の千早城跡や赤坂城跡がある

※北條さんは西区出身で八十四歳、（清水省三氏の実姉）現在、

兵庫県芦屋市の息子さん宅で幸せに余生を送っておられるとのことです。

毎年「庄内誌」を楽しみに熟読、故郷を想い、心の支えとされてるそうです。

この程、自作の短歌を寄せられました。

（編集部）

※「普山式」とは禅宗で行われる新住職のお披露目の儀式のこと



# 俳句

東区 内野かね

落葉踏むふんわり温き足の裏

ほどほどと云ふ良き言葉夜の秋

亡き夫の履きし桐下駄年離れ

町区 山元 マス子

平田 和田盛行

茄子の花余生素直な誕生日

父の日の吾子もいつしか父となり

旅六日落着く我が家夏屋敷

八月や記念日重なる郵便夫  
降っても降り止まずなり大洪水

ふくらんで蛙の取り替え居候なり

祝吉町(東区出身) 宮田 安子

菓子野 長岡 昭光

秋風や詩集といふも十頁

蓮根の穴は九つのほぜ祭

風の子といふも人の子一茶の忌

七夕や叶わぬ願い託しおり  
一日終え妻の座におり新茶くむ

新涼や街の並木の枝切らる

西区 蒲生 とし子

平田 平田ミチ

春の宵チャイムはグリーンスリーブス

姉妹みな一人となりて盆祀る

サングラス奥にやさしき瞳あり

春を踏む夫唱婦隨の影法師

ねじれ草しどろもどろに咲きにけり

百匁柿夕日にこれでもかとおと熟るる

# 随筆

## 庄内の人(2)

鷹尾(東区出身) 得能 哲夫

(一)

日南市の大山さんから、長い手紙が来た。

手紙の中に、昔を語る会、発行の「庄内」は、「庄内の人」の、道しるべだと、思います」と、感想を書いておられた。

大山さんをお願いして、手紙の中の感想の一部をお借りすることにした。

………

前略――

庄内の昔を語る会、発行の「庄内」を、友だちが来ますと、出して、読んでいます。私は西諸県郡の、高原町出身ですが、

四十年の長い教師生活の、大部分は、北諸県郡、都城市の学校でした。

現在は老いて、娘のいる日南市で、生活をしています。

「庄内」を開きますと、お世話になりました庄内町の歴史、なつかしい地名(町区、東区、関之尾、乙房、千草……等)が、出て来ます。

また、原稿を寄せられた方々のお名前、文章に接しますと、遠く過ぎ去った日を、思い出し、心をあたためています。

「庄内」は素晴らしい、郷土史であると共に、庄内の方々の「心のアルバム」だと、思います。

「庄内」の発行を、企画、運営される会長さんを始め、役員の方、原稿を寄せられる会員の方々、大変だろうと思います。皆様の「心のアルバム」である「庄内」は、次の時代の「庄内の人」の、道しるべ」だと、思います。

どうか「庄内の人」のために、頑張ってください。

自分勝手なお願いですが、私は「庄内」の次号を、楽しみに待っています。

以下略

〇〇月〇〇日

乱筆にて

大山

得能様

.....

私は大山さんの、手紙を読みながら、昔を語る会、発行の「庄内」は「庄内の人」のために、大きな仕事をしているのだと、思った。

(二)

昭和三十年の頃である。

庄内町の、馬や牛の品評会（現在の畜産共進会）が、例年、庄内小学校の運動場で、開かれていた。

学校では、子供が怪我をしない様に、世話役を出すことになった。色々な考え方の意見が出たが、父母とのかかわりがあるので、庄内町出身の私に、その役がまわって来た。

私は、子供を見ながら、品評会に一日中、付き合うことになった。

品評会の日である。

朝の八時、品評会に出場する馬が、運動場に、ぞくぞくと集まった。

運動場の前の方に、テントがはられ、テントの中では、品評会の審査員らしい人が、茶を飲んでいた。

運動場では、馬主を始め、家族全員で出場する馬に、刷毛はけをあて、毛を整えたり、足を持ちあげ、爪をみがいたり、また、タオルで、首筋、背、腹を一生懸命に、拭いておられた。

九時三十分――。

テントの前に、馬主が、全員集められた。役員の方、審査員の方が、品評会についての説明や、注意をされた。審査員の中に、友人の塚野皓一さん（西区出身）がいた。長い説明と注意が、終わった。

第一次審である。

審査委員の方は、子供たちの画板の様な、小さな板を首にさげ、馬の所に行かれた。

一頭一頭、馬の毛なみを見たり、足の爪を見たり、口を開けて、歯を調べたり、背中をつまみ、肉のつき方等を、丁寧に調べては、調査用紙に、記入しておられた。

午後一時――。

第一次審査の、結果発表があった。

合格した馬は十五頭であった。運動場の真中に、A組、B組、C組、各組五頭ずつ並んだ。

第二次審査が始まった。

五名の審査員の方が、C組、B組、A組の順に審査された。

馬主たちはみんな十五頭を囲み、審査の様子を、黙って見ている。

馬は、多く人が囲んでいるので、驚き、前足を高くあげて、蹴ったり、首を上下に強く振ったり、中には、列を離れて歩きまわる馬もいた。馬主さんたちは、馬をなだめるのに、苦勞しておられた。

審査の様子を見ると、友人が来た。

友人は、馬を見ながら、話してくれた。

……………

A組の馬が、優勝候補の馬だよ。

B組の二番めにいる馬が、関之尾の佐土平栄蔵さん（平成十年八月死亡、八十八才）の馬だ。佐土平さんの馬は、佐土平さんの、言葉がわかるのだよ。

「後足を少し前に——。首をあげろ——。落ちつけ——。ゆっ

くりしろ——。等」

佐土平さんが、首筋を軽くたたきながら、言われると、馬は、その通りにするのだよ。不思議だろう。

みんなが、まねをしようとするが、出来ないのだよ。

佐土平さんの馬は、毎年A組になるのだよ。今年もなると思うよ。よく見ておれよ」

……………

と、言った。

友だちが言った通り、佐土平さんの馬は、動かないで、まっすぐ立っていた。

私は、この品評会で、関之尾の佐土平栄蔵さんを、知ったのである。

休憩になった。

審査員の方は、テントの中で、打ち合わせを始められた。

暫くして、打ち合わせが終わり、馬の入れ替えが始まった。

佐土平さんの馬は、B組の二番から、A組の三番に進んだ。

最終の、審査が始まった。

A組の五頭だけである。

審査員の方は、馬に触れながら、近くで見られておられたかと、

思うと、今度は馬から離れて、じっと見ておられる。

次は、審査員五人の方が一緒に、A組の五番、四番、三番の順に、審査を始められた。

馬たちは、朝からの審査なので、疲れが出たのか、動きまわり始めた。審査員の方が

「四番、ちょっと、歩いてみてください」

と、言われた。馬主が、歩かせ様とされるが、馬は歩かないで、ぐるぐるまわり出した。

「次、三番お願いします」

佐土平さんの馬である。

佐土平さんが、馬に何か言われて、手綱を軽く引かれた。馬は静かに歩き出した。審査員の方は、馬の後姿を、見ておられた。

「すみませんけれど、もう一度歩いてください」

審査員の言葉に、佐土平さんは、軽くうなずいて、手綱を高く持ち、ゆっくり馬の方向を変えられた。そうして、手綱を軽く引かれた。馬は前を向いて歩き出した。

審査員の眼は、歩く馬に集まった。

「よろしいです」

審査員の方は、テントの中で、打ち合わせを、始められた。

最終審査結果の、発表である。

馬の入れ替えが始まった。

佐土平さんの馬は、Aの三番から、Aの一番にかわった。つまり優賞である。

優賞——。準優賞——。二位、三位、とあったが、よく覚えていない。

友人が「佐土平さんは、すごい人だ。普通の人には、出来ないことだ」と、何回も言った。

表彰式が開かれた。

佐土平さんは、優賞の賞状とメダルを、貰われた。みんな拍手を送った。

表彰式が終わった。

机の片付けをしていると、塚野皓一さん（若くして亡くなられた。残念でならない）が来られた。

塚野皓一さんは、暫く小学校の教師を、しておられたが、専門の獣医の仕事をしようと、農業協同組合へ、勤められた方である。

友人が話してくれた「言葉のわかる、佐土平さんの馬」のことが、気になったので、塚野さんに聞いた。塚野さんは、私を見ておられたが

.....

佐土平さんは、すごい人だと思えますよ。馬には馬の基本体形があります。佐土平さんは、その基本体形に向って、毎日世話をして、育てられます。

ここまでは、みんな同じですが、ここからが、佐土平さんの、すごいところですよ。

審査の時、馬がまわりの人に驚いて、動きまわります。その時、佐土平さんが「落ちつけ——。後足を少し前に——。首を少し上げよ——。」と言って、馬の基本体形に、持って行かれるのですよ。

馬が、佐土平さんの言われる通りに、するから、不思議ですよ。

外の審査員も、びっくりしていましたよ。

.....

と、話してくださいました。

それから、会で佐土平さんと、一緒になった。今度は佐土平さんに、聞いた。

佐土平さんは、笑っておられたが、私が繰り返し聞くので、話してくださいました。

.....

馬も人間と同じだと、思えます。大事に世話をすれば、心

が通じますよ。

私は朝夕、馬と一緒に散歩をします（普通は、馬の運動をします。と言う）

「坂道だぞ、ゆっくり歩け——。自動車のライトだ。じっくりするな。落ちつくのだ」

と、話しながら、散歩をするのですよ。馬や牛は、賢い動物ですから、この人は、私（馬）を何時も、守ってくれる人である。と、思い、信じる様になりますよ。

馬は、私の、大事な友だちですよ。

.....

と、教えてくださいました。

馬を友だちとして、生活しておられた。佐土平栄蔵さんの話を、私は、今も、思い出しては、味わっている。

昔の庄内の町には、佐土平栄蔵さんの様に、馬を友として育てた名人、また、牛や草花、山の木を育てた、いろいろな名人の方が、各地区におられた。現在もおられると思う。

私は今になって、思うのであるが、亡き佐土平栄蔵さんや、塚野皓一さんたちから、名人の馬の育て方を、もっと聞いておけば、よかったと、思うのである。



# 関之尾と私

関之尾 入江 秀子

私たち夫婦が長年住み慣れた東京から関之尾に越して来たのは六年前、あの歴史的な大嵐に迎えられてのことでした。宮崎には全く係累も無く、何のつても無かったのですが東京の書店で手にとった「田舎暮らしの本」を唯一の手掛かりにして、日本全国、最も暮らし易い所はどこかといういろいろ考え、決めたのが宮崎県だったのでした。

「気候温暖で自然に恵まれており、物価も不動産の物件も全国一安い」のが宮崎県といわれ、それは夫が退職して年金ぐらしの私たちにとって何よりの条件でした。都会に住む人に地方の不動産物件を紹介する業者に案内されて、私たちは宮崎県内あちこちを見て回りました。島育ちの夫は、釣りが唯一の趣味なので、本当は海辺に家が欲しかったのですが、その時は日南や串間に手頃な物件がなく、都城も地図を見ただけでは、海からそう遠いとも思えなかったもので、次善の策として関之尾に見に来ました。六月、新緑の山々に囲まれて、青田が一面に広がる、一年中で一番美しい季節でした。

案内されて来た家は、田圃と杉山を一望できる素晴らしいロケーションでしたし、狭いけれど畑もあり、家は夫婦二人の暮らしには丁度良い広さで、価格も手頃だったので、私たちは一も二もなくこの家の購入を決めてしまいました。それが今住んでいる家です。ところが、七月越してきた途端に豪雨に見舞われ、八月九日、今度は台風七号が襲来しました。我が家でも瓦九枚と雨戸が飛ばされましたし、家の回りの田圃の稲は、穂が出始めたばかりなのに、すべてべったりと倒れ伏せてしまいました。生まれて初めて体験する凄まじい大嵐でした。

「気候温暖なんてとんでもない、大変な所へ来てしまったものだ」

とその時は本当に後悔しましたし、その後冬になって、庭に親指の太さ程もある霜柱を目にしたときも再び「こんな筈ではなかった」と思いました。暖かい所で暮らしたくて宮崎に来たのですから、東京でも見られなかった霜柱を目にすればショックを受けるのは当然です。しかしそれもこれも今ではほろ苦い笑い話となってしまいました。

毎年一度は子供達や私の両親が住んでいる東京へ、墓参もかねて出かけるのですが、三日も経つともう関之尾に帰りたくなってきました。都会の喧騒や汚れた空気をすでに私の体が受け付け

なくなってしまうのでしよう。つい先日、娘の結婚式で一週間程度東京に滞在したのですが、鹿児島空港に降り立ち、帰路霧島の温泉によって、のんびりと露天風呂に浸った時、しみじみと幸せな気分になり「ああ帰ってきたんだ」と思ったものでした。もう「立派な」関之尾の人になったのかも知れません。

田舎暮らしの情報誌を通じて移住してきた関係で、都会から田舎に移ってきた人の情報が折に触れて送られて来るのですが、田舎暮らしに失望したり、挫折したりして都会に戻って行った人も少なからず居ることも知っています。そのほとんどが農村の古いしきたりについて行けないとか、周囲の人間関係に嫌気が差した、と言う事が理由のようです。しかしこの六年、私は一度たりとも近所の人との間のトラブルを経験したことはありませんし人間関係で嫌な思いをしたこともありません。関之尾の人達は本当に気性がおおらかで、温厚なのでしよう、よそ者を排除したり偏見を持ったりすることはなく、こちらから声をかければ必ず笑顔で応じてくれます。移住者にとってこれほど有り難いことはありません。

しかしその裏返しとして、みんな余りにも無欲に過ぎると私には思えてなりません。関之尾には、天下に名だたる滝と甌穴がありますし、庄内川にはカヌーの練習場もあります。そして

五月の末から六月の初めにかけて、下川崎の杉山に沿った水路には、小林の出の山にも負けないほど圧倒的な蛍の大量が飛び交います。また夜になって都城の町から関之尾に帰って来たとき、夜空の星の美しさには思わず嘆声を上げてしまいます。これ程貴重な観光資源がありながら、それがさっぱり生かされていないように思えます。母智丘の桜、庄内の城山と城下町のたずまいの残っている町並み、それらと一体化して開発したら、きっと素晴らしい観光地になるのではないかと私は考えます。しかし長年この土地に住んでいる皆さんは、案外自分の故郷の良さに気が付かないのかも知れません。

「故郷は遠きにありて思うもの」と室生犀星はうたっていますが、遠くから来た新住民だからこそ分かる土地の良さもまだたくさんあるのではないかと思います。今私は、都会から田舎に移住したいという人のための情報誌に毎月宮崎の良さを「売り込む」エッセーを連載して関之尾の事も大いに宣伝しています。そして東京で長い間市議会議員をやっていた夫は、その経験と人脈を生かして、都会と田舎の掛け橋の役割を果たしたいと考え、情報誌のお手伝いをしています。まだこの仕事は始めたばかりですが、自分がここに越してきて良かった、と思うように、他の人にもそう思ってもらいたいと願い、ささやかながら「町起こし」の一助を担っていかれたらと考えております。

# 『風の記憶』

前庄内地区公民館主事 花 房 徹

一九九二年（平成五年）七月十日深夜、夢に見たモンゴルのウランバートル空港に立つ。

この夏、新しい体制になったばかりのモンゴルを旅するきっかけは、「からも交流」の縁で、山田町の知人宅にホームステイしたナラントヤさんの誘いによるものである。彼女の案内と通訳がなかったならば、この旅自体が成立しなかったし、モンゴルの人たちとの心の触れ合いもなかったと思う。

モンゴルは、この年の二月公布の新憲法のもと、新しい体制で動き出した。それまでは、約七十年間旧ソ連の影響下（社会主義体制）にあったわけで、生活（文化を含む）の随所にその影響が見られる。しかし、これまでの最大の援



風を切って大草原を駆ける（モンゴル）

助国の経済危機の影響をもちに受け、市場経済への移行は困難をきわめ、物不足とエネルギー危機は顕著である。といっても、人口二百四十万人のうち五十万人が住む首都ウランバートルの話であり、一方、草原に目を移すと、今までどおり「遊牧」という秀れた農法の世界が広がっている。大草原と家畜があれば暮らしていけるのだという、遊牧民の自信と誇りが垣間見える。草原といっても、想像していたものと違い、地肌がみえるくらいにまばらであるのには驚いた。ゲル生活をしながら、この草を食い尽くさないように、家畜を追っていくのも遊牧民の知恵である。

その後、知人の話から都城高専の人達の努力により、風力発電を通しての交流が始まり、都市との友好協会設立まで発展しているのはご承知のとおりである。一人の女性の熱意と行動を忘れずに、地道に交流を深めていってほしいものである。

ゆったりとした時間の流れ、そして、ハーブの香りを含んだ草原の風は、私の中で生き続け、何かあることに思い出される。

※からも交流

一九八二年（昭五十七）以来、大隅半島の農家を中心にアジアなどからの留学生をホームステイさせる活動が続いている。現在の活動拠点は、平成六年オープンした鹿児島県鹿屋市のアジア・太平洋農村研修村（カラモジア郷）。

「からも（サツマイモ）」と「アジア」から生まれた「カラモジア」交流。

# 私の中の方言

大宮市 馬籠 京子

(東区出身)

組関係で活躍された方である。

社会の初めての授業を突然、方言で進められたのである。私たちはいつもとちがう雰囲気には違和感をおぼえて授業についていけなかった。先生の一人しゃべりの授業になってしまった。

私たちのホームルームの先生にもなって下さっていたので、その日の掃除のあとのホームルームの時

「先生、方言での授業はやめて下さい。」と誰かが代表して言った。その時先生は、

「標準語だと、かたくなって、授業についてきてもらえないのではと思う、みんなに良かれと方言にしたのだ。」と言われた。

私たちは日頃、中学の先生方から

「学校では標準語を使うこと。中学を卒業して、都会に働きに行った人たちが、一番つらい思いをするのは、話し言葉の問題である。方言ではみんなと話せなくて消極的な言動になり、ホームシックにかかってしまうらしい。」と、聞かされていた。

だから中小路先生の方言での授業には戸惑ってしまったのである。それに方言での授業には緊張感がないと思ったし、方言を生かす場ではないとも思った。

中小路先生の意図もわかり、先生も私たちの言い分がわかって下さったので、それからの授業には活気があり、多くの先生

「どこん言葉をつこちよいか。庄内にもどったら庄内の言葉をしちゃべれ。」と突然、父に言われた。結婚して初めて田舎に帰った最初の夕食時の事である。おしゃべり好きの私は、無意識に日頃使っている言葉で調子よく話していたらしい。父の言葉で「ハッ」としてすぐ庄内弁に切りかえて昔と変わらない賑やかな食卓となった。

その場にふさわしい言葉、話し方があることをすっかり忘れていた。

私が庄内中学二年の時である。

宮崎大学から教生の先生方が庄内中にもえた。私が教わったのは、英語と音楽と社会である。その時の英語と音楽の先生については、何もおぼえていない。ところが社会科の中小路先生のこと、はっきりおぼえている。この先生は後に、県の日教

方の前で発表する研究授業は私たちのクラスで行われた。

その場に合った言葉、話し方が大切であることをこの時学びとったはずなのに、父の「庄内の言葉でしゃべれ。」に、ハッとして中学時代を思い出していた。

私は庄内の方言が大好きである。子どもの頃は、ただ無意識に使っていたけど、庄内を離れてみると、方言の持つ暖かさや奥の深さが、少しわかるような気がして、主人と話す時や気を許している友だちの前では、つい方言がとび出してしまうことがある。

元、中学校で国語を教えておられた七十七才の親友は、私の口から出る方言をすぐメモするのである。そうして

「これは漢字にあてはめると、どういう字だろう。」と考えてしまう人である。友だちの中にあれこれ心配して、くよくよしたり、ぐずぐず言ったりする人がいると

「そういつまでもほろめかないの。」とつい私は言ってしまう。それを聞いた親友は、

「ほろめくとは何とやわらかい表現でしょう。」と感激してメモをとる。私が庄内にいる頃、自分の奥さんのことをご主人達は「うちのおかたが…」と言っていたのを思い出して親友に話す

『何と美しい言葉でしょう。きつと「奥方」が「おかた」になったのよね。奥さんを大切にする思いやりの言葉ね。こんなすばらしい方言が今尚生きつづけている故郷をもつあなたは、何と幸せなことでしょう。私の故郷は群馬なのでいくつかの方言を思い出してみてもこのような細やかな味のあることばはありません。でも私にとっては大事な故郷であることには変わりはないのですがね。」と又、感激する。そうすると私も改めて関心を持つことになり、そして故郷のことばに誇らしささえ覚えるのである。

ところで、私には女の子が二人いる。その子が七才と五才の時の夏休みに、初めて姉妹二人だけで飛行機に乗せ、乙房と庄内に行かせた。

乙房の主人の実家に泊った時の話である。子どもたちが義姉さんと赤池商店に買物に行った時、お店の方とお客さんが二人を見て

「お姉ちゃんは、まこちみごち子じゃ。妹さんもむじ子じゃ。」とにこ／＼して言われたそうである。二人はほめてもらっているとは感じたらしい。でも、「みごち子」と「むじ子」のちがいが気になったらしく、こちらに帰ってきてから、妹の方が『お母さん。知らないおばさんがお姉ちゃんには「みごち子じゃ」

と言って、私には「むじ子じゃ」と言ったよ。どっちがうの。』と、ちゃんとおぼえてきて、聞いた。ていねいに説明したら、二人とも満足していた。この時も方言のもつ微妙な意味のちがいとやわらかさをしみじみと味わった。

乙房の義姉さんは明るくてユーモアのある方である。子どもたちに話しかけられた時、聞き馴れないイントネーションと、方言のまじった早口に、二人の子どもたちはすぐにはついていけなかったらしい。姉の方が帰ってきて私に報告するには、

「そうしたらね、おばあちゃんが『おばあちゃんは乙房の英語をしゃべってるのよ。えらいでしょう。』と言ったよ。そうしてゆっくりわかるように話して下さったよ。」との事であった。いい話、楽しい話だなあと心があたたまった。乙房では五才の妹の方は、「何言ってるのかわからない。」と言って、その場からすぐ離れていってしまったらしく、

「私がひとりでおばあちゃんとお話したのよ。大変だったんだから。」と姉が報告してくれた。

でも、この年の夏は方言に関心を持ったらしくて、夏休みの自由研究のテーマは、「おじいちゃんおばあちゃんのいる田舎のことば」であった。主人や私から聞いてまとめたものはほとんど単語であるが、

- |           |   |           |
|-----------|---|-----------|
| 1、びつきよ    | ↓ | かえる       |
| 2、べぶん子    | ↓ | 牛の子       |
| 3、おやつとさぁ  | ↓ | おつかれさま    |
| 4、はらかく    | ↓ | おこる       |
| 5、ずばーっ    | ↓ | たくさん      |
| 6、まこち     | ↓ | ほんとうに     |
| 7、よだきい    | ↓ | めくどくさい    |
| 8、みあげもそ   | ↓ | ごめん下さい    |
| 9、おいやっどかい | ↓ | いらっしゃいますか |
| 10、げちする   | ↓ | 命令する      |
| 11、ぎをいうな  | ↓ | 口ごたえするな   |
- 等であったと思う。

庄内の方言もいいし、庄内の訛りもいい。訛り、イントネーションは、庄内を離れて三十年以上もたつ私なのにまだ完全には直らない。

「あなたのアクセントはおかしいわよ。」といろんな友だちが、その都度注意してくれて親切になおして下さるけど、すぐ忘れてしまう。私は今でも恥ずかしがらずに堂々と、大切にしゃべっている。



昨年の秋、庄内中学校の教頭先生から庄内中新聞の原稿についてお電話をいただいた。受話器を耳にあてたとたんになつかしさが広がった。ふるさとの方とお話ししているのだという喜びを実感した。

私が今まで主人との会話の中で、つい使ってしまうことばに、  
ぐら・い・話・ね、とか、お・や・つ・と・さ・あ・で・し・た

今日は風呂に入るのよ・だ・き・い・な・あ、

せ・か・ら・し・か・ね、よ・か・も・ん・じ・ゃ、等がある。これからも故郷庄

内の方言を大いに使いたいし、友だちにも聞いてもらいたい。

そうして庄内に帰った時には、庄内弁でいっぱい話してみたいなあと楽しみにしている。

父はもういないけど、父から教わったことはいっぱいある。

方言のもつ暖かさや、貴さ、それを生かす場等もその一つである。

そして今の私にとって方言こそ故郷そのものである。

## 手伝い

川崎 前畑 文利

今の子供は前にくらべて可愛そうだ。学校から帰ると次は塾が待っている。家庭、学校、塾の繰返し連続である。

昔は違った。手伝いながら身体で覚えた。体験するこれが基本だった。どちらが良いかは判らないが、土に教えられ、物に習い、町で感じ、村で受けとめた時代には非行は少なかった。弱者苛めも少なかった。

餓鬼大将はいても弱者苛めどころが、弱者苛めをするものはいましめた。餓鬼大将から、悪い事も良い事も教わった。その内自分も、餓鬼大将を夢見、餓鬼大将になった。それがその頃のならわしだったように思う。親達も子供の手伝いを当てにし働く事からほとんどの事を覚えさせた。手伝いをする事により親と同じ仕事をするわけだから、親と子の繋がりが出来た。

子供達の動作によって、身体の調子や何を考えているかも大體見当がついた。又子供の方も親の動作を見て学ぶ、親と子が接する機会が多かった。

世の親達よ、もっと子供と接する機会をこしらえたらどうだろうか？

子供から親を見る目、親から子供を見る目もそこから生まれて来るのでは。私の考え方が古いと言われればそれまでだが、長いようで短い、短いようで長い人生、いつの時代でも親と子の繋がり、人と人、人と物との絆をより深いものにする事ができたら、どんなに素晴らしい事だろう。

### 姪の結婚にあてて

初めし日を老いて語れる仲なれや

喜び嬉し松の育てよ

※栗に柿 みかんになしの 日本晴れ



## 30年ぶりの再会

— 沖繩からの疎開者たちと —

千草 鎌 田 巖

会誌「庄内」10号に亡母ナミの手記「沖繩の疎開者たち」のことを書きましたが、その後のこの疎開者たちとの暖かいかわりについて母の手記を転記します。（現文を一部加除修正）

「一九七五年（昭和50年）八月、私は長崎の新日本婦人会発行の原爆文集「きのご雲」の編集を終えて11日に宮崎から帰って来ました。

留守の間に沖繩から電話があったそうです。

それは晴義（三男）の同級生だった沖繩の又吉真昌さんから、30年ぶりの電話で晴義に「海洋博」に是非来てくれ、出来るだけのこととするからとのことだったそうです。

電話は矢野ミスミ様（故人）に受けていただき、晴義は去年一月に亡くなったと伝へたところ、真昌さんは驚きのあまり声もふるえ、生前のことなど話しながら涙されたそうです。

招待のお礼を述べ、ちようど学（長男）夫妻が簡易保険の団

体旅行で海洋博見学に行く予定なのでよろしく頼むと手紙に書き、晴義の追悼文集「悲しみを越えて」と「きのこ雲」を同封しました。

折返して真昌様からの返信が届きました。

「……30年前、晴義君と一緒に毎日学校へ通った又吉真昌です。10月17日、お手紙と同封の追悼文集を読み妻も私も涙が止まりませんでした。

母ウシの話によると鎌田さんは当時婦人会長をしておられ、本当にお世話になったとのこと、「きのこ雲」を読んで認識を新たにしました。

鎌田さんが戦中、戦後現在に至るまで私たちの事に関心をよせ愛情をそそいでいたということ知り、なおいっそうお逢いしたくてなりません。心よりお待ちしております。」と結んでありました。

そこで長男学からも、せきたてられて12月沖繩行きを決心しました。

12月5日、定夫（次男）と二人、鹿児島を発ち、沖繩空港に着きました。

白い大きなさらしに、墨で大きく「歓迎、鎌田ナミ、定夫様」と書いたのぼりを持って出迎えて下さいました。

出口の所では又吉ウシさん（真忠さんの母）、比嘉ウサさん、又吉ウシさん（真昌さんの母）の三人と抱きあって30年振りの再開を涙を流して喜んだものです。

それから、真忠さん、真助さん兄弟、真昌さん、正吉さん、春徳さんほかたくさんの方たちと三台の愛用車に便乗して南部戦跡めぐり、姫百合の塔、玉泉洞見学……と皆様に手を引かれ、抱きかかえられるようにして廻りました。

その夜は真忠さん宅で歓迎会がありました。

30年前の皆様が一人も欠けず集まっていたいただき疎開当時の苦労話や思い出、沖繩へ帰ってからの話に花が咲きました。

疎開当時小さかった少年少女の立派な成長の姿、結婚、お孫さんの誕生、あの夏が嘘のように平和な楽しい夜でした。

翌六日は、海洋博見学、本家の真忠さん宅に皆集まり棚原（現在は安里姓）カマトさんも一緒に三台の車で出かけました。

途中、写真を撮ったりしながら会場に着くと、高い鉄橋を渡るのも皆様から手を引かれて団体客でござったかえす中をたくさん美しい噴水を見ながら入場しました。

会場では「お母さんはこちらへ」と手押車に乗せられ、働き盛りの皆さんが交替で押ししていただき説明を聞きながら見物して廻りました。

いつまでも変わらない皆さんのご愛情に私の心の中にはしきりに何かがかみ上げてくるのでした。

昼食は、朝早かったのでいつ用意されたかと思うほど色々なご馳走をいっぱい頂きました。

七日朝、真昌さん宅で記念写真を撮って出発、浦添、那覇地区の街並を通り、戦跡も一つ残らず訪れ、惨めな戦いに死んでいった霊を心からなぐさめました。

疎開地の千草から引揚げたときの沖縄は、すさまじい戦場のままで木は無残に吹き倒され、水の流れは変り、わが家はもろん灰になり屋敷あともさっぱりわからなかったそうですが、今ではすっかり復興している姿に安堵しました。

空港ではみなさんが揃って待っておられ「おかあさん、また来てね」とひとり一人握手しながら再会を約束しました。

小雨の中、二十人余りの方たちが子供さんやお孫さんともどもお見送り下さり、私達も涙を流しながら訣れのハンカチを振りました。

姿が見えなくなるにつれて自分にもどり「皆さん、本当にありがとうございました。いつまでもお元気で……」と合掌しました。



# 子や孫に語り伝える話

## 安永の坂道物語（一）

―歴史と民俗―

妻ヶ丘町 瀬戸山 計佐儀

ここで言う安永とは、昭和四十年四月一日に都城市に合併する以前の庄内町と西岳村である。庄内とは、太宰府の大監平だいげん季基すえもとが万寿三年（西暦一〇二六）に弟宗貞と来て、梅北を根拠に開墾し、従来の島津院の外に島津莊園を開発したが、その莊園内のことを莊内といい、後世それを庄内と書くようになり、明治二年に都城新地頭の三島通庸みらつねが安永を上庄内と名付けたの由来し、西岳は、都城盆地の西方の霧島山の麓地帯の意であって、東方の鰐塚山系を東岳と称するのに対する。

### 1、センカンヤマん坂

県道三股・庄内・財部線に沿う乙房町馬場の十字路を南へ二百米位行くと登り坂になるが、その登り口を左に折れて数百メートル程の山道が登り坂であり、その先の岡がセンカン山で、北方の下は乙房小学校である。

センカン山は昔は佛山とも隠れ山とも呼ばれ、沢山の古墓があつて幽霊の出る山林として子供達はもちろん、大人達ですら、昼なお薄暗い山道を登って行くのは薄気味が悪く嫌悪けんおしていたという。乙房に住む吉川藤信翁（平成十一年現在、八十八歳）の話によれば、大正年間の少年時代に乙房少年団があつて、子供は尋常科四年から高等科二年迄と県立都城の中学校と商業学校及び農学校の生徒を会員として、年長者らがリーダーとなつて鍛練が行なわれていた。

その拠点は乙房の夜学校で、これは後に公会堂と称し終戦後は公民館と改称されたが、少年団は主に夜間に集會して、五十人前後の団員は撃剣・読書等を行ない、肝試きもだめしもその一つであつた。それは前以て夜学校で、上級生が、センカン山で幽霊が出た話、その他の恐ろしい話を団員に話し聞かせて置き、一人あるいは二人でセンカン山の夜の坂道を登って墓地まで行って、そこに立ててある標識物を取って帰る行事などである。そしてリーダー達は途中の木陰や藪の中に隠れて、奇声を発した

り藪を揺ったりして威すのであった。

慶長四年（一五九九）、薩摩島津家の支族、伊集院忠棟（ただじゆん）家が篡奪（さんだつ）しようとして「都城の乱」（島津庄内の乱ともいう）を起こしたが、山田城や野々美谷城、安永城（庄内城）志和池城の攻防戦が最も激烈で、戦鬪は十ヶ月に亘って展開され、安永城と都城との中間に当る乙房（セカン山）辺りでも両軍が戦って戦没者が多く、屍は皆セカン山に埋葬されたという。

このセカン山を仏山とも呼ぶのは戦没者供養の観音堂でもこの山に建立されたからか。隠れ山とも呼ぶのは岡の麓に隠れ念仏洞でもあった時代があったからか。セカン山と呼ぶのは千手観音像（せんかんのあんざう）の安置された堂宇でもあったからか。セカン山の名称の由来を知る者はなく、文献も見当たらない。

## 2、ツツノハイの坂

乙房町の中心地馬場にある十字路を南（都城街地に至る）に二百メートル位行くと登り坂道が百五十メートル程続いていて「ツツノハイの坂」と呼ばれ、若者でも自転車で登るのは大変である。

この坂道を登り終わると広大な台地が開け、今でこそ人家や中小工場等が建っているが、終戦時までは一軒の住宅もなく、

ただ茶園畑や甘藷畑などがあり、月野原と呼ばれていて大きな樹木は全然見られなかった。「月野原」とは元来広々とした原野で、月影をかくす樹木もないと云う意味である。



月野原の坂。左はセカン山への入口

都城第十四代忠亮（ただすけ）の時代のこと乙房に或る郷士（半土半農）がいて、無類の酒好きで微薰（びくん）をいつも漂わせていたが、勤めも怠け勝となり耕作の仕事も全然しなくなったので、姉婿が説諭したところ、この郷士はそれを怨んで割木で叩き殺してしまった。酔いが覚めたその郷士は自分の犯した大罪に気付いて切腹し果てたが、その死骸は役人の手によって月野原の辻に張り付けになり、その家は断絶になったという。

月野原には当時、都城島津家の立野があって、屋根葺用の茅（かや）が仕立ててあり、多くの建物の屋根を年次計画的に葺き替えており、茅が余る年は領民に払い下げられていたという。



### 3、ウツバン坂

乙房町と金田町をつなぐ乙房橋から西へ約四百メートルは上り坂で、これを乙房ウツバン坂という。

現在、内場の東端、大淀川に直近の地には立野家が十軒あるが、最も川に近い立野宅の屋敷には、近世、薩摩藩禁制の一向宗徒の隠れ念佛洞があった。宮田宅とセンカン山の東側にもあったが、立野宅はゴンゲツカドといていたという。多分、神仏双方を祭祀する権現門かむの意であろう。門割は薩摩藩では納税完納と相互扶助の制度であった。

内場には宮田家が三軒あるが、ここにあった神社は明治政府の方針に従って、庄内のお諏訪様に合併されたという。宮田の宮は神社を意味し、御屋みや即ち高貴な方の意味だという。

立野至陸軍軍医少将は乙房町内場の出身で、昭和天皇の脈も取っていたが、昭和十二年の頃退官後は都城市の妻ヶ丘に病院を建て、都城市北諸県郡の医師会長を長く務め、息子は宮崎で医院を開いたという。

### 4、マツノハイの坂

今の庄内町の十字路を南（都城市街地）へ向って数百米行くと、庄内川に架かる橋があり、更に百五十メートル位先は信号

機のある十字路で、その先は次第に登り坂で少し右に湾曲して、登り詰めた所は広い台地が見渡せられて牧之原と呼ばれているが、ここは月野原の西に隣接して殆どが茶園であり、数社が経営する茶工場が栽培している。

都城島津家は正平七年（一三五二）、宗家四代忠宗の六男資忠ただが北朝方の足利尊氏に忠勤を励み、筑前金隈かなくまの戦いに軍功をたので、恩賞として島津荘内の北之郷三百町を与えられて同年十二月二十二日に家臣十六名と共に入部し、山田の古江に館を構えたのであったが、二代義久は都島に築城して都之城と称し、元和元年（一六一五）の一国一城の令によって下城し、今の明道小学校の地に居館を移したのであった。そして、この間、西岳の馬渡りや三股、中之郷の安久等に牧場を経営したが、版籍奉還前に牧場があった所が即ちこの牧之原であり、南半分は横市村、北半分は安永村であった。そして、その馬棚ませは昭和の初めまで残っていたという。

また陽春三、四月には毎年日を定めて、この牧場に遊行して筵を拡げ重箱をつつき、領主も領民もへだてなく、飲めや唄えやの無礼講を楽しんだが、どうしたことか飲み物は焼酎ではなく甘酒だったという。恐らく領主は甘党で酒が飲めなかったので、領民たちは遠慮して甘酒を持参して掬み交したのだろうと

いう。

センカン山も、月野原と牧之原の北半分とも殆ど乙房町であるが、乙房には中世紀にて乙丸房という修験者が住んでいたで、その名が地名化して乙房となったらしいという。現に乙丸房の子孫らしい人に乙丸家の人が幾軒か居住していて、永年町会議員や市会議員をしていて、叙勲の榮譽に浴した国彦氏がいた。

都城盆地内の大淀川筋には乙房の外に今房、太郎坊、穂(宝)満坊という地名があつて、何れも修験者に由来し、神仏混交の宗教者で、学識や民間療法の知識があつて祈祷も行い、地方のインテリとして指導者であつたという。

乙房町の中心地を馬場といい、東隣は内場、西隣は<sup>アザメ</sup>助といい、薊<sup>あざみ</sup>の多い土地柄であつた。アザメは方言であり、助は国字というよりも方字ともいふべき、当地独特の字で、講談社の漢字大辞典にも見当たらない。馬場の南隣りは<sup>いまだいら</sup>今平、次が<sup>げん</sup>源野であるが、地名の由来は未詳。乙房の西方は平田であるが、北の低地よりも、南の台地の縁に人家は多く、台地の下には隠れ念佛洞があつて市の文化財に指定され、近年その前は平地になつて公園化された。

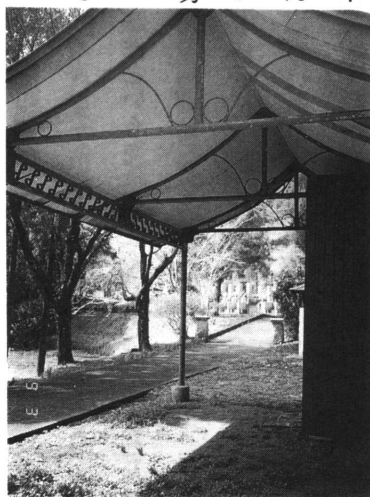
なお、馬場には定益(さだます。ぢょうますとも)という微

地名と姓の人がいるが、これは、もとサドマスで、サドガラ(虎杖)の多い所だったので、その名がついたという。

## 5、オミケンの坂

庄内町の山久院はオサンキンと俗称されているが、これは都城初代領主<sup>ほんごうすけただ</sup>北郷資忠の廟墓である。これより西へ百メートル位行くと登り坂が二百メートル程続き、これをオミケンの坂と土地の人は言っている。この坂道の左側は稍高く山林に覆われ、右側は稍低く、各家庭の納骨堂や個人墓が累々と百基ほど林立して中央には鉄骨の家が建っているが、もとは妙見堂であつたのに、明治の廃佛毀釈で<sup>はいえ</sup>敗壊され、只名のみ<sup>みけん</sup>妙見様として残つたようである。

坂の北(右)下を今もドンモト(堂の下)といっているが、昔は近くのフゾボとゆう所に坊さんが住んでいたという。恐らく宝蔵坊とゆう修験者だつたのであろう。そして堂は妙見堂だつ



お妙見の墓地

たに相違ない。

妙見は北極星を神格化した菩薩で、国土を守護し人の福寿を増すとされており、乙房の鉄道踏切の北隣りと志比田町徳益にも妙見堂があつてオミケン様と呼ばれていたが、同じく明治の初頭に破却され、鹿児島県牧園町の妙見温泉地にも大きな妙見堂があつたが、今は伊佐那岐神社に変貌してしまつている。これらの妙見堂の近傍に棲息する魚や蛇、蛙などの生物は凡て片目であつたという。妙見とは事物の本質を観極めるといふ意義から、片眼でも二眼よりも妙に<sup>たえ</sup>言ひようもないほどすぐれて良く、<sup>れいめう</sup>靈妙に見尽せるということから、ここに住む生物は皆片眼であると下世話で言うようになり、それが俗信化したのであらうか。

お妙見の坂を西へ登り詰めて道路を右折すると戦場原の台地で、慶長四年（一五九九）の庄内の乱の激戦地の跡であり、十六歳の少年戦士の供養に植えられた稚児桜があるが、四百年の風雪に耐えずに残骸を晒し、近くに二世の苗桜がすくすくと枝葉を拡げている。

お妙見坂を真直ぐ西に行くと山田町に達する。

## 6、ゲンサッチン坂

乙房町の上平田から南の台地<sup>||</sup>牧之原に登る坂はゲンサッチン坂という。

ずっと昔、麻生源作という逸物が住んでいた所の坂だというが、源作という人物の詳細は伝わっていない。

## 7、カイヤン坂

カイヤン坂は乙房町中平田から南の牧之原台地に登る坂道である。

ここは鹿児島から担任の地頭が来た時に宿泊する家<sup>||</sup>仮屋があつたので仮屋の坂をカイヤの坂と方言でいつているわけである。

又この坂を「ガッコン坂」ともいうのは、明治五年に明治政府が学制の令を發布した時、人民共立学校が各地に出来て、多くは寺院や既存建物を転用して開校したので、仮屋の建物が学校に転用された名残りらしいという。

次号につづく

# 町制施行三十周年記念祝賀会

西区 清水省 三

終戦後の混乱期からようやく抜けようとしていた昭和二十九年四月十日、庄内町町制施行三十周年の記念行事が、庄内小学校の校庭で行われました。

この祝賀式典には、歴代町長またはその遺族も招待されたので、私も母の代理として出席しました。

式には、時の県知事田中長茂氏も臨席され、厳肅に盛大に行われました。続く祝賀会は、お軍神側に設けられた舞台で、各区毎に伝承されている芸能が次々に披露され、町を挙げてのお祭りは、昭和十一年の旧町役場庁舎や、戦災で焼けた旧講堂、二階校舎などの落成式以来の賑わいでした。

次の写真は、西区の小林フジ子さんが提供されたもので、祝賀会に、西区から出演された人達の記念写真です。東清文氏（後に町長）宅の芝庭で撮影されたそうです。

他地区のように、立派な伝統芸能を持っていなかった西区では、各班（馬場中と言った）から一人ずつ出てもらって、手踊

り連を急造し、オハラ節や安久節、炭坑節などを踊ったということでした。

太鼓叩きは

早田純雄さん

に頼んだが、

三味線弾きは

誰だったのか、

西区の三味線

弾きと言えは、

神田川の中村ノブさん（写真の中村ノブさんとは同名別人）だったはずだが写っていないのはどうしてだろう？、また当時テレ

コなどなかったはずだから、唄い手が居た筈だが誰が唄ったのだろうか？、この写真の中の何人かの人が、首をかしげるだけでした。

当日の式典では、それまで町政に貢献した人達が表彰状と記念品を受けましたが、私の亡父清次もその一人でした。記念品



（敬称略）

- 瀬戸山マス（故人）
- 大神（故人）
- 清水敏子（一才）
- 中村ノブ（故人）
- 早田純雄
- 井手上ツキエ
- 小林フジ子（故人）
- 上ノ原ユキ（故人）
- 宮里ヤエ
- 七年礼ミキ（故人）
- 黒瀬田崎藤雄
- 丸山ミチヨ
- 区長和田豊一（故人）
- 黒木シズ
- 宝満マツ（故人）
- 町議日高眞夫
- 岩切アツキ
- 浦生スエ

は何であったか憶えていませんが、賞状は今も残っていて、町長、助役を二十一年間勤めたと書いてあります。昭和十三年に死去していますから、没後十六年目の栄えある受賞でした。以て冥すべきでしょう。

この日、知事秘書として随行して来られた神戸源一氏（県庁OB・宮崎市在住）は、旧制都城中学校で二年先輩であり、中学四、五年時代は小林家や帖佐家に寄寓して通学されて、庄内とは馴染みの深い人でしたから、開宴になると、知事を案内して宴席を廻ってこられ、私のことも知事に紹介して下さいたのですが、見上げるような偉丈夫の田中知事が微笑を浮かべて、鷹場にうなずいておられたのが印象に残っています。

宴の後、流れて、県議の田崎藤雄氏方での二次会も盛んでした。席上町議会議長の海江田栄治氏（故人）が、「田崎さんが居まいやったかい、知事が来てくれたっじゃっど」と繰返し力説しておられました。知事が町主催のイベントに出席してくれたことが、主催者の一人として、よっぽど嬉しいことであったにちがいません。

当時、県政界の論客として鳴らした田崎氏は、同じ自民党系（当時は何と呼んでいたか）でありながら、田中知事とは鋭く対立しておられたそうだから、海江田議長さんならずとも、考

えられることではありました。

小林フジ子さんから提供された二枚目の写真は、昭和三十一年五月以降昭和三十三年三月までの間に、西区の池田シヅさん方（末原歯科医院の西隣）で写されたものです。後方に戦災で焼けた講堂跡に建てられた講堂兼雨天体操場が写っていますが、この講堂は昭和三十一年五月十七日に落成式が行なわれています。（現在は解体されて空地になっています。）また、写真の中に、当時の庄内小校長の亀沢轍三氏夫人が居られますが、亀沢校長は昭和二十八年四月から三十三年三月末まで在職しておられたから、前述の撮影時期が推定できるわけです。

昭和三十年代になって、全国的に澎湃ほうはいとして興った生活改善運動に因ちなむ劇であったことは間違いありませんが、どの様な場で演じられたものかはつきりしません。写真中の七牟礼ミキさんの記憶では、当時の生活改良普及員の荒川イネ先生が大変熱心な人で、この劇の指導は勿論、亀沢温先生（元庄内中学校、元県教委社会教育課長）等を招いて、「民主化とは？」とか「婦人の意識高揚」とかについての講演会などが度々開かれたということですが、「共進会」のプラカードに農協行事との関連も考えられましたが、農協とは関係ない人も写っているのです、それはないことです。講堂の落成式の時に出演したのではなかつ

たかという人も居ましたが、判然としませぬ。

以上提供された二枚の写真と、町制施行三十周年記念祝典について、調べたことと思い出したことを書いてみました。

庄内町の町制施行と、都城市の市政施行は同じ大正十三年四月一日であったようで、都城市では、平成十一年四月十五日に市制施行七十五周年記念式典が行われ、私達の「庄内の昔を語る会」も、文化功労部門で表彰を受けました。



池田シヅ  
中村フサエ(故人)  
宮里シナ  
宮里ヤエ(故人)  
崎山ナミ(故人)  
桐原ヤエ(故人)  
今村アキイ  
七牟礼ミキ  
清水ハツミ  
平生アグリ(故人)  
井手上ツキエ  
小林フジ子  
池田タニ(故人)  
龜沢校長夫人  
桐原クニ  
中村ノブ(故人)  
守幸子

(敬称略)

## 庄内製綱工場

### (マオラン工場)のこと

町区 鎌田 学

#### 1、マオラン栽培とマオラン工場の創設

「マオラン工場」は、昭和十年春、宮崎県知事より、「宮崎県マオラン麻繊維採取工場」として運転許可がおりました。

工場の試運転は十年四月二十三日、私が、小学六年生のときでした。創立者鎌田巖(当時三十五歳)を中心に、坂

元英俊、清水清次町長、長倉幸吉氏(元長倉製糸工場社長)、その他村の名士、後

援者多数が参加しました。当時の写真が残っています。

宮崎県庁特産課の串間技師、庄内農協の中園技師、村井

福一郎、帖佐魏<sup>たかし</sup>、棕田新之

福一郎、帖佐魏、棕田新之



当時、力添えいただいた方々



丞（元陸軍少佐）、山田武司、西区の末原利夫、今屋の花村総一氏なども列席されました。

昭和四年末頃より始まった世界的大恐慌、年々深刻化する農村不況の中で、父鎌田巖（鎌田小石門の三男）は、農林振興の一策として、マオラン栽培を研究し、各地を視察したあと、みずから田畑の一部にマオランの苗を植え、また知人や村人にも推奨したのです。マオランは一・二メートルに成長したところを刈り取って、繊維業者に売却する換金用農作物です。

一反歩あたり二百五十貫とれ、水田一反の約二倍の収入になるはずでした。もちろん。米麦の代わりにマオランの苗を植えることになり、これらにはいろいろな苦情も出ました。しかし、元代議士の坂元英俊氏ら、村の有力者、名士ごぞつての応援で、共鳴者も多かったのです。いうまでもなく、荷馬車の力綱、井戸綱、牛馬手綱や荷造り用の細引きなど、ロープは農村でも都会でも日常の必需品でもありました。そして、マオランのロープは海外輸入のマニラ麻に代わって、国産のマオラン麻を材料とする逸品、ということでは好評だったのです。

こうして、マオラン栽培は、鹿児島、大分、熊本、福岡、都城盆地や小林、その他、宮崎県の各地に広がりました。しかし、それをマオランの繊維に加工する工場が近辺になく、どうして

も製品加工の機械と工場が必要となりました。そこで、鎌田巖は自分の田四反歩ほどを売却し、マオラン採取機械を購入しました。

当時は、マオランを繊維採取機にかけるとき、ウォーン、ウォーンと轟音が村中に響き、当初はサイレンの音と間違われ、何かと町民の噂の種になりました。資金繰りに困ったり、マオランの青葉刈りに追われたりして人手が足りなくなり、機械はよく止まりました。そこで、私は学業なかばで工場を手伝い、学校も休みがちでした。社長の父は、マオラン栽培の奨励や原料買い入れ、資金調達と毎日奔走し、各地をたび廻り、我が家に帰るのは月に十日ほどでした。

当時、福岡や熊本、長崎の五島（福江）、鹿児島県の開聞岳や種子島など九州一円がその活動領域でした。鹿児島県には二、三軒の同業者もあって、ほぼ県下のマオランをそれらで捌いていたため、父は一般の業者が行きにくい離島、僻地まで訪ねて



昭和15年 庄内製綱所マオラン採取のようす

行くことになりました。宮崎県下では、北は延岡周辺から西は小林方面、南は飢肥や油津など南那珂方面までくまなく駆け回っていました。

自家栽培のために畑二町歩を借り、六反歩（西小林的三本松）を買い入れました。長雨が続いて伐採したマオランの青葉を腐らせてしまったり、移植した苗が病気で立ち枯れたり、栽培者の方も苦労はたえなかったのです。

鎌田家では、家族をあげてマオラン栽培に力を尽くしました。そんな状態で、



マオラン栽培園の視察のようす 昭和10年2月

工場経営や管理の方も素人や子供に任せるわけにもいかず、高鍋町川南試験場などの協力を得て、宮崎市赤江町の吉田万吉氏や貴島美則氏を工場主任に招聘し、また西小林的のマオラン畑の方、庄内の工場より十名ほどの女工さん達を一週間ほど泊まり込みで作業に行ってもらったりしました。

## 2、鎌田家の受難、「無尽事件」のこと

あの頃、父・巖がマオラン栽培と工場経営にとりつかれる様になったのには、父の生涯と一家に運命を狂わせたある事件があったからです。

昭和三年頃、都城の或る方（父の乳飲み兄弟）が「無尽」から金を借りることにになり、父に連帯保証人になってくれと頼んだそうです。当然、父は引き受けることになったのです。ところが二、三年たって、乳飲み兄弟は借りた金を返せなくなり、都城の無尽会社は連帯保証人である父に返済を迫ってきたのです。もちろん、父は金を工面出来ないのです、執達吏は我が家の家財道具全部を差し押さえてしまい、競売にかけてしまったのです。当時のお金で「一七〇〇円」という大金で、米一升が十銭から十二銭、田圃一反歩が百円前後だったそうですから、今のお金だと大体一〇〇〇万円くらいになります。

当時、父は庄内町千草区の青年会長などをし、「巖どんの作る俵は天下一品だ。検査官が見なくても一等米で通る。」などと言われ、働き盛りの篤農家だったのです。それが、この無尽保証事件で一ぺんに一文無しに転落し、育ち盛りの子供たち五人を抱え一家は路頭にまよわねばならぬ運命に立ち至ったのです。

工場の方もその後、戦争で製品も弾薬箱の取手など（陸海軍用）に出荷納品させられました。

私は、昭和十八年八月佐世保海兵団に主計兵として入団し、昭和二十年八月に終戦を迎え、帰郷してみると工場は戦争に巻き込まれて満洲から移動してきた陸軍工兵隊たちが、工場を占領する形になり、マオラン工場は、軍需工場になっておりました。旋盤機械やボール盤機その他金属の工場となっていました。その後は、次号にて記載致します。

## 昭和初期の嫁入りとその生活

東区 黒木 ツミ

私が生まれたのは明治四十三年で、現在、満九十才になろうとするとところです。昭和六年、二十一才で志和池からこの庄内に嫁入りしてきました。今、いろいろなことを思い出してみると隔世の感があります。当時の若い娘たちは親の言いなりでしか動けなかった世の中でした。結婚もその通りで、親が決めて

いて、嫁入り当日に初めて相手を知るといことはざらに聞かれるものでした。

そこで、この庄内地方の昭和初期の嫁入りの様子や嫁の生活のことなど書きしるしておきたいと思います。

今でも六月燈などお祭りは賑わいますが、昔は今以上に賑わうものでした。それは、若い男女の唯一の出会いの場であったからです。特に器量よしの評判の娘さんの後には若い男の人がついて回るものでした。また、「嫁さがし」といって、年ごろの娘のいる家に、牛馬をみる風を装い、娘をみに行くということもありました。もう一つは、知人、親類の紹介です。私などこの部類だったように思います。

こうして、親どうしの話がまとまると、いやでも嫁に行かされるものでした。とに角、家と家との結びつきでしたので、女の意志など、どうでもよかったです。女性は人間として認められていなかったというわけです。よく、この頃のテレビで結婚式当日に自分の夫となる人を花嫁姿でそっと見上げる様子などみかけますが、全くその通りのがここ庄内でもあったのです。

さて、一たん結婚すれば、一家の労働力でもあり、舅、姑さんには絶対服従の毎日、嫁が自分勝手に仕事をしようものな

ら、世間では、「あそこの嫁は勝手もんじゃげな。」と噂が広がり、しまいには離縁ということにもなる場合があります。

また、こんな例もありました。嫁に行つて間もなく顔に大やけどをして醜くなった。そこで夫は、「お前はみにくい顔になつていやだ。里に帰れ。」と言つて、タンス諸共、送り返したというわけです。なんと非情なことをしたものでしょう。結局女は、男の道具か物としか扱われていませんでした。また、結婚しても子供ができないと入籍させず、女中扱いにされていたという例もあります。

女は一度嫁にいつて里帰りすると、二割者だといつて笑われるものでした。今の人にはなんということかと思われることが、当時はまかり通つていたのです。私もそんなものだと、ただ、忍従の日々を送っていました。

昭和二十年、太平洋戦争が終わり、新しい世の中になりました。女性にも選挙権が与えられ、私も三十八才の時、初めて投票に出かけました。「女<sup>おんな</sup>でん、知恵はあつたっどんな……。」と言つていた私たち女に投票権が与えられ感激とうれしさでいっぱいだったことを覚えています。なんとなく優越感みたいなものも感じたし、女も責任があるのだ、勉強しなくてはという自覚が生まれたようです。

大正時代のこと、私の友だちのお父さんが（直接選挙であつたのだろうか？昭和十一年頃までは間接選挙（町議の互選）であつた）村長に立候補された時、その家族四人のうち、二人が女で選挙権がなく、友だちは悔しい思いをしたと切実に話されたことを思い出したりもしました。

選挙権のなかつた時代に生きてきた者にとって、この婦人参政権は、確かに女性の地位の確立につながっていることを実感します。

その頃、庄内にも婦人の教養を高めるため、婦人会や、いろいろな民主団体が結成され、社会教育が盛んになりました。当然、これまで家に縛られていた女性が目覚め、社会に進出しました。特に庄内では、南崎さん、持永さん、徳永さんなどは先頭に立つて婦人の地位向上に貢献された方々です。家庭内でも姑の視野が広まり、これまでの嫁いじめなど少なくなつていったようです。

今、聞くところによると、近頃はなかなか若い方々が結婚しませんがらないということです。昔は女が選ばれる立場でしたが、今は、男の人が選ばれる世の中とか……。昭和初期からおよそ七十数年、世の中の変わりようにただ驚いているところです。

# 黒木ツミさんのこと

東区 帖佐 ミヤ

黒木ツミさんは、東区の諏訪原の方で、私の友人のお母さんでもあり、家も近くで何かにつけ教えていただく「暮らしの先生」なのです。これまでに、野菜の作り方、花壇の手入れ、こんにゃく作り等々、ちょっととした「生活の知恵」をさずけてくださいました。

長年、民生委員もされ、戦前、戦後の婦人会活動や農協婦人部の役員等をされるなど、多方面に活躍されてきました。

お年を召されても、習字を習い、編物を習い、九十才を迎えようとされるのに、びっくりするほどの作品をふるさと祭りに出品されておられます。考え方がなんでもプラス思考、それに時代に遅れないよう進取の気持ちで生きてこられた方だと思います。

「庄内」にも毎号執筆を頼み、昔のいろいろなことを提供して下っています。今回で、もう最後とおっしゃって、次のような短歌をおくって下さいました。黒木さんの生き方、考え方が

窺われるようです。どうぞ、いついつまでもお元気で過ごしくださることを祈念いたします。

還暦に 一九七〇年二月十日作 60才

苦勞しても論を慎志み氣もひたすらに

盡して遊かむみんなのために

喜寿に 一九八七年二月十日作 77才

苦あれども老いはたのしく生きぬかむ

諸人のため自らのため

米寿に 一九九八年二月十日作 88才

あの頃の人はみなゆきて我一人

デイサービスに行きよき友出来る

# 菓子野の里寺

菓子野 菓子野 清弘

人間界において、先人達が残してくれたすばらしい遺産、この遺産も時代の流れと共に置きざりにされ、又失われつつある今日、菓子野町今屋区の菓子野集落に受け継がれている里寺について申し述べます。

古代日本の宗教は神教を主に信仰していたものと思われませんが、外国より仏教を始め幾多の宗教が伝来し信仰が自由になった経緯があります。

仏教伝来後、仏教の信者が増大するにつれ市街地区に寺院が建立されましたが、当時は道路網未整備による交通不便等のため、郊外の信者集落に僧侶の方々が行き来するには相当の困難があったものと推測されます。そのため郊外の地区毎に里寺（仏壇）を安置し地域住民の仏教信仰に寄与していたものと思われま

す。明治初期仏教の弾圧である廃仏毀釈が断行されましたが、明治政府により宗教の自由が復権され仏教は一層信仰心が深まっ

たものと思慮されます。

しかし、時代の推移とともに交通事情も良くなり里寺の必要性も低下し、現在は大方の里寺は忘れ去られ又失われておりま

す。この現状のなか、菓子野集落には今なお長い里寺の歴史が伝承されております。里寺は、寺元として仏壇を役員宅に安置し、定期的に地区の僧侶代理を主に集落の祭事が行なわれ又、不幸（死人）時には、寺元の指示により寺下（小役員）が里寺を担いで死者宅に移動し、地区の祖先の霊を該宅に数日安置するのが習わしでしたが、ここ数年この風習は疎遠になりつつあります。

但し、毎年元日には菓子野公民館に里寺を安置し地区住民が一堂に集い、祖先の霊を敬いその年の豊作、交通安全と平和を祈願する慣習は今もなお続いております。このことは、諸々の障害にもめげず地区の先人達が残して呉れている素晴らしい遺産であると思えます。この遺産を維持してこられた多くの人々に感謝を申し上げると共にこの里寺が子々孫々まで伝承されることを祈念致します。

# 西南戦争のなかの

## 関之尾の戦い

関之尾 末原兼光

まえがき

明治十年の西南戦争のことはいろいろと書かれています、  
「関之尾の戦い」は殆どその記録がありません。戦いの記録は直  
接それに参加した人か又はその子孫で、その話を受継いでいる  
人でないと書けません。今回、私の近辺に語り継がれている  
「関之尾の戦い」を整理し、又確認の為に多少の調査もしながら、  
子や孫に語り伝える為に筆を執りました。

### 関之尾に於ける薩摩軍の陣地構築

明治十年六月上旬薩摩軍幹部数名が関之尾に来て現在の柳橋チ  
りさん宅で集落民と会合を持ち次の様な提案をしました。

一、関之尾の山が政府軍を迎え打つに最も条件がよいので陣地  
作りに協力願いたい。

二、此処を連絡場所とするので「薩摩軍最高指令官定宿」の看

板を出す。

なお、このとき薩摩軍が人吉で破れ、政府軍が国分と小林方面  
から攻めて来るとの説明がありました。また薩摩軍の指揮官は  
都城は村田新八、関之尾が別府晋助、末吉方面が辺見十郎太で  
あることも明らかにされました。話は一方的で有無をいわせな  
いものでした。

翌日から関之尾の人達は山道の案内や陣地作り、主として立  
木の伐採に動員されました。指揮官は陣地予定地を詳しく見て  
廻り細かい指示を出した後、都城、宮崎方面に出ていきました。  
関之尾隊長は毎日都城の本部と連絡を取りながら、人吉から敗  
走してくる薩摩軍の再配置や地元兵の配置に汗だくだったと云  
います。

そして構築された関之尾の陣地を視察した薩摩軍幹部は次の  
ように豪語したと伝えられています。

『政府軍が大倉田から攻めてくるなら道は狭く急傾斜も多いの  
で、一斉攻撃は不可能である。仮に撃ち合いになってもこちら  
は山の上から狙い打ちができる。場合によっては斬り込み隊も  
投入できるので負ける事はない、ここを逆転の決戦場にしたい』  
と。事実関之尾は天然の要害でした。陣ノ丘は四方八方見晴ら  
しがきき、西及び南側は急傾斜で陣地を構築するには最高の場



所でした。そこから少し下がって上ノ段、大迫、萩之尾までの七〇八〇米は平らな台地が続き、陣ノ丘から一望できたのです。台地は大部分が畑地で立木はすべて伐られました。

### 決戦前の両軍の動き

このような状況の中で、七月十七日破竹隊と地元隊は小林高原方面に進出してきた政府軍に奇襲攻撃をかけてこれを打ち破ったのです。関之尾に帰還した彼等は人吉の仇討ちができたと喜んでいました。

これに対して政府軍は、第三旅団が日奈久（熊本）に上陸して、大口で薩軍を破り国分から霧島を経て西岳の高野附近まで進出して来ました。第四旅団は福山、百引から末吉へ、またその別動隊は福山から大川原を経て財部に進出して来ました。そして人吉戦で勝利した第二旅団は小林高原で意外な敗北をしましたが、関之尾攻撃のため勢力の温存を計ったとも、庄内に放った密偵の報告を待っていたとも云われています。なお密偵は庄内出身者でしたので郡役所の人達とは顔馴染だった関係もあって、関之尾の状況や都城の状況を詳しく調査して、二日程で小林に帰りました。その結果だと思えますが、小林の第二旅団の本隊は野尻を経て宮崎へ向かい、その他は高原を経て都城へ進

撃する隊及び霧島を経て西岳の高野に出る別動隊とに分かれました。

### 関之尾の決戦

第二旅団の別動隊は第三旅団と綿密な打合せを行い作戦を決定しました。第三旅団幹部は関之尾の地図及び情報を見て「これで勝った」と叫んだと云います。しかし、関之尾攻略には大きな犠牲が伴うと考えていたようです。

七月二十四日早朝高野附近を出発した別動隊は午前八時には大倉田に到着しました。そして薩摩軍が見える位置まで進出し野砲及び小銃で派手に撃ってきました。この政府軍の盛んな攻撃に対し、薩摩軍は萩之尾に陣を構えて応戦したのです。この戦いの中で破竹隊は当然としても、上之段に配置した隊や予備隊の指揮系統が乱れて勝手に動いたのです。これが結果的に薩摩軍の命取りになりました。

第三旅団はこのときを待っていました。彼等は夜中に出発し大塚、溝ノ口を経て堤に到着、夜が明ける頃には陣之丘直下の山林に隠れていたのです。そして抜刀隊が編成されました。抜刀隊は旅団の中から選ばれた勇士で三十人程度だったようです。官軍は斥候を出して薩摩軍の動きを見ていましたが、手薄になっ

た時点で抜刀隊に合図し突入させました。抜刀隊に続いて歩兵四個大隊も突入しました。

薩摩軍本部には負傷兵及び荷駄隊のみが残っておりましたが、この人達も萩之尾の攻防戦に気を奪われて抜刀隊が襲撃するまで気付かなかつたと云います。戦いは八時三十分頃開始され十五分程で官軍の一方的勝利に終わり、薩摩軍は殺されるか或いは捕虜になるかして決着しました。(この事があってから湯谷を油断と言うようになったのかも知れません。) 薩摩軍本部を占拠した政府軍は直ちに散開し午前九時には上之段の南側まで進出しました。

薩摩軍は上之段の北側に防衛線を築いて撃ち合いました。この戦いのすさまじさは言語に絶するもので百雷が連続して落ちたような音がしたといえます。なにしろ三千人を越す人が二百米から三百米の間隔で撃ち合うのですからその迫力は想像もつかない程激しいものだったようです。また薩摩軍は切り込み隊を組織して度々切り込みましたが、政府軍は狙撃兵を活用したため犠牲者許りが多く、余り効果はなかったようです。戦いは一進一退でしたが、午後一時頃になってようやく終わりが見えってきました。薩摩軍は弾薬が底をつき、また萩之尾陣地も破られ大迫の陣が挟撃されるに至り、ついに大迫谷を東へ逃走しま

した。

#### その後の政府軍の動き

薩摩軍敗走に伴って政府軍の動きも理解できないことばかりでした。先ず敗走する薩摩軍を追撃しなかったのです。彼等は戦友の死体を埋め塚をつくりました。それが終わると主力は上之段から上関之尾へ下りてきました。そして集落近くの谷間で予想もしないことを起こしたのです。彼等は連れて下りた捕虜達を一人ずつ引張り出しては虐殺をはじめました。それは農民出身の兵隊に度胸をつけること、負け戦の末路を見せしめること、及び釈放すれば再び薩摩軍に戻るおそれがあったこと、そして又捕虜を連れて廻ると作戦の邪魔になること等から人吉戦以来の慣習に従ったと云います。殺される捕虜達の断末魔の叫び声は二時間近くも続いたと言います。断末魔の声を聞いた集落の人達は、その後当分の間飯ものを通らなかつたと言います。また虐殺が終わる時に夕立がきて死者の血は流れ百米位下のくぼ地に溜まった話はいまでも語り草になっています。

なお、政府軍の一部は負傷兵を抱えて城瀬に下りてきたと言います。また別動隊は萩之尾から下り、上之段を通って神田の方へ進出しています。政府軍が上関之尾で時間を費やしたのは

下関之尾に下りて構えた薩摩軍との白兵戦を避け斥候の帰りを待っていたためとも云われています。薩摩軍は神田に集結し都城の状況を聞いて志和池高城から宮崎方面へ敗走しました。なお地元兵の中にはその儘故郷へ帰った人も居たようです。

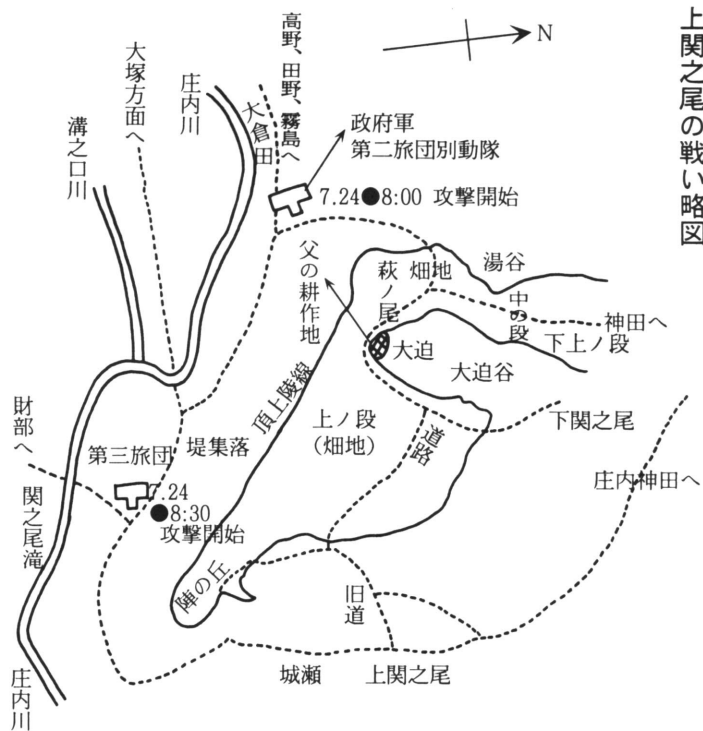
**戦いの後始末**

以上が関之尾の戦いですが、これで総てが終わったわけではありません。関之尾の人達はこれからが大変でした。薩摩軍と一緒に戦った者や途中から家に逃げ帰って隠れていた者、或いは山に隠れて夜になってから帰った者等いろいろでしたが、翌日は死体の処理をするために総出だったと云います。なお死体処理は翌二十六日までかかったと云います。

政府軍は戦死者の埋葬場所には塚を造っていました。しかし薩摩軍は死体はその儘にして敗走しました。それで散乱している死体を集めて一緒に埋める方法をとりました。山のくぼ地或いは畑の隅を地ならししては死体をならべて、上から土をかぶせると云う簡単な方法だったようです。それでも大迫の死体収容は大変でした。稜線に沿って相当数の死体が転がっていました。また谷には負傷して歩けない人達が自決したのだとは思われる死体もありました。それから刀削の死者は明らかに白兵戦

を物語っていました。

上関之尾の戦い略図



戦後、政府の薩摩軍協力者の追求は酷かったようです。関之尾の人達は陣地構築から死体収容まで協力したのですから判れば罰せられると恐れしました。降って湧いた災難でした。死体の始末も集落の人達がしなければ誰もしてくれなかったのですが、流言飛語もあり密告も奨励されたことから集落民は『言わず語

らず』を申し合わせ沈黙を守り通しました。集落の責任者が呼び出されましたが知らぬ存ぜぬで通したそうです。また取調べに当たった政府の担当者は好意的、形式的であったとも言われています。

それから百年以上経ちました。山中の塚は忘れ去られて藪となり、畑の隅の塚は開墾によって姿を消しました。特に萩之尾は戦いの痕跡さえなく、死体は湯谷の南側の何処かに埋めたと思われますが、今はシラス採取場となって探しようもありません。大迫谷には神様が祀ってあります。この神様について近くの山主さんの言葉です。『あんな山奥の谷底に神様を祀るなんて昔の人達の気が知れん、うっかり踏み込むものなら祟りがある。場所はわかり易くしてあるから、障らぬ神に祟りなしですから間違っても近寄らないで下さい。近くを通っただけでも頭を締めつけられる思いがします。』と。

## むすび

以上が関之尾に於ける西南戦争です。大迫詰の畑で父の耕作を手伝っていたとき、無数の小銃弾が出てきました。中には西郷どんの鉄砲の弾といった大きな弾も混じっていました。そんなことから父に聞いた話の大意が前記のとおりです。なお父

は『ここは薩摩軍が萩之尾から引返して防衛戦を敷いた再配置地点で幹部が居たので政府軍の集中砲火のため特に弾が多い』とも話していました。それから『世間ではいろいろ云っているが部落の申し合せもあり、影響も大きく縁起の良い話しでもないので黙っているように』と口止めも忘れませんでした。

それから六十年西南戦争から百二十年の月日が流れました。集落の中でも断片的な話は語り継がれていますが、全体として纏まった話は語る人が居なくなりました。何れにしても戦争とは今更私にここにいりまでもありませんが、表面の勇猛果敢な戦いとは逆に、残忍悲惨な内面も併せ持つということなのです。『関之尾の戦』はその両面をよくあらわしています。



# 十六歳で赤紙（召集令状）

平塚町 山 元 正三郎

（町区出身）

昭和十九年、高等科を卒業して家業を手伝っていた。

秋になって県からだろうか、町からだったろうか通知が来た。

「県民修練」という名目で日南の大堂津（当時細田町）の漁業

会の二階で一ヶ月間、寝泊り修練である。朝早くから大堂津の

海岸を細田川の川口まで毎日走らされた。

県下から五十名位、遠くは鞍岡・村所などからも来ていた。

昼は榎原神社近くの山々を歩いて薪を取ってかついで帰り風呂

や炊事用に使った。風呂は漁師が雑魚をゆでていた、二米四方

位の釜で週三回位沸かして入っていた。

庄内からも五、六名参加していたけれど覚えているのは東区

の斉藤さんだけである。

当時鞍岡・村所の人達はどうな交通機関を使って日南まで来

たのだろうと今になって思う。

そして年が変って昭和二十年五月、町役場の兵事係より青紙

（待命書）が届いて、翌月六月に今度は赤紙（召集令状）が舞いこんだ。十六才の時である。

高射砲隊に入隊という事で、都城のある学校に集められた。

（未だに何処の学校であったか思い出せない）竹槍の先に夏の

上布団を一枚、風呂敷につっこんだものをぶらさげて都城地方

より四十五名集合した。

大隊長は柳田大尉で班長には佐土平栄蔵さん（当時伍長）村

永さん（上等兵）他にも三名位おられたけれど地元の人でなかっ

たので覚えていない。

大隊長は訓辞で「今沖繩で苦戦している。沖繩の次はこの南

九州が決戦場になる。良く訓練してその時に備えるように」と

言われた。

この色とりどりの風呂敷包をぶらさげた奇妙な軍隊(?)は高城

の大楽座へと行軍した。

高城の大楽座は田んぼの中にぽつんと建っていて（戦後火災

のため焼失した）その広い板の間にゴザをしいて夏布団をかぶっ

て雑魚寝の生活に入った。

連日、高城の裏山を歩きまわり隣町への山道を通って敵地へ

侵入の訓練、夜は桜木神社に夜襲をかけ渡河訓練、ある時は高

城より志和池を通り、谷頭から古江を抜けて白谷を通り千足神

社まで歩いた。

その頃千足神社の境内に我が軍の戦車が常駐していた。それを敵の戦車に見たてての肉迫攻撃の訓練だった。ハコー爆雷（ランドセル位の爆薬）を背負って戦車の前に飛び込んで一人で敵の戦車を一輛爆破するのだと、何回も何回も飛び込んで訓練した。

ヒトツ爆雷は棒の先に爆薬を付けて戦車のキャタピラに突っ込んでキャタピラを切断するのだ。本当の爆薬は見た事は無かったが、敵が九州に上陸した時に備えて一生懸命に訓練した。つまり、ゲリラ隊だ。その名を特警隊（特別警察隊）と言った。

帰りは、郷ノ原から大倉田の上の山道を通り観音原に出てオミケンにあり、戦場原を抜けて夜おそく高城についた。

朝早く出て西岳まで歩き訓練をさせられ、かるめの弁当一つで腹は減るし、足は痛いしで、庄内の近くを通る時は半分泣きながら歩いた。『家はすぐそこだ、家に帰れば何か食べる物があるだろう』と思いつながら。

隊員には二年先輩の関之尾さんや福吉さん、同年では西区の赤木忠男君がいた。

風呂は渡河作戦の時に川での水浴びが風呂のかわりだった。二週間位訓練を受けて一時帰されたが間もなく終戦になり、

そのままになってしまった。県民修練で一緒だった鞍岡や村所の人たちは来ていなかったがどこか県北の方で訓練を受けていたのかもしれない。どこに行くにも歩いて、山道を登り下りしたおかげで、今になって登山が好きで山登りにもたえる足腰が出来たのかも知れない。

その後、電話で佐土平さんと当時の事を話して懐かしく思った。その頃は戦時中の教育で子供のうちから愛国心が芽ばえていた。

今は平和のありがたさがなによりの宝である。



# 終戦直後の庄内の電気事情

姫城町 湯 前 隆 一

今日は八月十五日、今から五十四年前のこの日、あの有名な玉音放送を聞いた日です。その日までは、電力はあっても、夜灯りを外に漏らしてはいけませんでした。そして、やっと明るい夜を過ごせることになったのです。しかし、この喜びもつかの間、日本の電気事情がそれを許しませんでした。私の家では、戦後しばらく、停電の時『小灯し』を使っていましたが、たま

たま、当時『川崎航空会社』（現在、国立病院のある所）の前に住んでいましたので、駐留軍によって爆破されることになった戦闘機の風防ガラスを叩き割って、それをロウソク代わりにしました。香りのいい明るい灯りでした。

父の転勤で私が、『庄内電業所』の家に転居したのは昭和二十一年の四月のこと、つまり終戦の翌年のことでした。あの頃は、ほんとに停電の多かった時代でした。おかげで、私のあだ名は「ストッ」でした。ストライキだけが、停電の理由ではなかったのですが、停電の代名詞に、なっていたのかもしれない

ん。「また電気が消えた。」の代わりに、「またストじゃが。」と。今なら、さしずめ、「いじめ」でしょうが、当時の子供は強かったですね。私もそれに言い返せたものです。「良かったがネ。宿題が出きんかった理由んなっせ。」と。

停電の本当の理由はストによる停電もあったでしょうが、大部分は故障でした。台風時に断線するのはいつものことなのですが、ちょっとした風にも断線、あるいはショートしたのです。今と違って電線は裸線、よく接触したものです。でも銅線はまだいい方で鉄線もあったのです。鉄線は、特に継ぎ目は雨に打たれて、錆びてボロボロになり細くなり熱を持ってヒートあるいは断線したのです。

電線を張り替えようにも、材料（電線）が無く大変な苦労があったようです。終戦直後の一時期は盗みまでして復旧に当たったそうです。どういうことかといいますと、ご存じの方も多いかと思いますが、当時、庄内の城山の洞穴（防空壕）の中には軍の「糧秣」の他に、都城にあった『川崎航空』の資材もあったそうで、それを失敬したこともあったと聞いています。とにかく、電気がつくことが優先で、住民の方々も協力（？）され失敬する電線運びには荷馬車を使ってはこんでくださった方もあったようです。夜の電柱の上での修理には、その周りの葉こ



積んに火をつけて灯りとして協力されたそうです。庄内の人は、ほんとうに、優しい方々で、食べ物に不自由していた私の家に、米や野菜など持ってきて下さいました。助かりました。

さらに、ちょっと専門的になりますが、本線（志和池変電所から、山田・谷頭を経て、千草・今屋・東区・町区を通っていた）の高圧線三本の外にもう一本引いてありました。（昼間は送電しない一般家庭向けの）この電線ははずして、修理や足りないところに回したということです。それでは一般家庭用の電気はどうなったかというと、高圧線から変圧器で百ボルトにおとして流すようにしたそうです。（この、やや専門的なところの話は間違いがあるといけないので九州電力に教えて貰いたいと尋ねたのですが、「九電の送・配電線の話は、安全性の面から部外には教えられない」ということで、また当時のそのへんの事情はいまはもう記録がない」ということでした。間違っていたらごめんなさい。）

とにかく、毎日毎日が、故障の連続でした。台風後の停電には、中学生の私も動員されました。停電すると、（私の父ともう一人の電業所員）二人は、外に出て、断線（故障）箇所を探すために各分岐点のスイッチを切っては、あるいはスイッチを入れては変電所に電話して送電して貰い、又次を探すという

ことをしていました。一人は九電専用の携帯電話を持っていたものですが、もう一人は郵便局の電話（いまのNTT西日本）を使って電業所へ私と交信し私はそれを変電所に取り次ぐのでした。そのときの緊張感は今でも夢に見ます。こんな大事な、いや、危険な仕事を子供に遣らせていたいい加減な時代でしたし、停電するのが当たり前のことでしたから、各家庭には、ローソクや『小灯し』が有って故障の連絡も「昨日からきえちよっ」とか「一昨日から（電気）きちよらん」とか、のんびりしたところもありました。電話で故障の連絡ができるところはいいのですが、近くに電話のない隣近所では誰かが、電業所に言いに行ったらろぐらいでした。これを読んでおられる方の中には、連絡には「誰いが行っか」を話し合われた経験がお有りのことと思います。また電柱を蹴って電気がついた経験をお持ちの方もおられると思います。ショックで電線が又くっつくような程度のものでした。

とにかく、電線が張ってあっても出力不足で送電を止めたり動力線のところ（精米所・製材所・キャンディ屋・鍛冶屋など）だけ送ったり、時には、ローソク送電と言って50Vしか送らなかったこともあったと聞いています。100Vの電球はまさにローソク以下でした。こんな時にも凶太く生きる人がいてチャント

50Vの電球を見つけてきて明るく照らしていた家もあったという事です。各家の電球が切れると、その電球を電業所に持って行って新しいのと交換（有料）する時代に、50Vの電球を手に入れようとする精神は天晴れですネ。

そうして、落ち着くのに数年かかりました。学校の運動会にも拡声器が使われるようになり、私の父たちはコードやスピーカーを、持って行って臨時に取り付けたりしました。庄内劇場で映画も上映され、また、学校で巡回映画があるなど、さらに、澱粉工場が増えるなど、臨時の配線、本格的な工事など、電氣需要の増加で忙しくなりました。そういえば、初めてみたカラー映画『石の花』の色鮮やかさは、ビックリものでした。テレビも、昭和二十六年には宮崎で実験放送が始まり、庄内中学校の子供銀行が作った『紙芝居』も放送されました。私個人のことでは、電氣炬燵を作って（ニクロム線を螺旋状に巻き、それをガイシを彫り込んだ台に埋め込み、このセットを焼き物の火鉢に入れ、火鉢の横に穴をあけてコードを通して作った簡単なもので、それを粗末なやぐらでおおったもの。50V位だったでしょうか。）足の冷たさをしのいだのも、このころでした。

昭和四十年代に入ると、電氣が灯いているのが当たり前前の時代に入り、私の電業所家族の時代とは代わり、このころの電業

所の娘たちは、停電すると「何んで灯かんとか」と電話で怒られ、泣いて「すみません」という時代を経験することになりました。

今では、一分停電することもほとんどなくなりました。材料が上等になり、故障も滅多になくなり、さらに台風後の復旧工事でも通電しながら修理する技術が進み、各家にもエアコンが付けられる時代になりました。

その代わり、隣近所の人とバンコに腰掛けて、夕涼みしながら、流れ星を見つけて願を掛ける楽しみも無くなりました。

この稿を書くに当たっては、蒲生義孝様には大変お世話になりました。ありがとうございました。



# 奉納、浦安の舞

西区 清水 たつ子

「紀元は二千六百年、あゝ一億の胸は鳴る」

「昭和十五年十一月十日に皇紀二千六百年の奉祝式典が行われることになって、庄内小学校でも奉納の舞を舞う人が私達六年生四名、五年生四名が選ばれました。

奉舞者は次の人達でした。 敬称略 旧姓

六年生 徳留タマ子 福留スズ子 長友ヒサエ 山元タツ子

五年生 安藤ハツ子 得能ハツ子 広畑サチ子 浜砂智子

国威の高揚をはかるためだったのでしようか、全国各地に八絃一字の塔も建てられました。(現在宮崎市にある平和の塔のこと)

奉祝式典は当時、町社諏訪神社の社殿や豊幡神社でも行われ、四人づつで舞う奉納の舞も、庄内小六年、五年、乙房小六年生と、交替で舞いました

その浦安の舞は、花房神官さんが宮崎で講習を受けて来られ指導されたもので、今迄踊っていた遊戯とは違い、雅楽に合わ

せての静かな  
手の動き、足  
さばきで、鼻  
すすり咳ばら  
い等、もって  
の他、息づか  
いにも気を使  
う厳しい練習  
でした。

花房神官さ

んをはじめ、

神官さんの笙

筆<sup>ひらりき</sup>、に合わ

せ、お琴の演奏は、渡司ツユさん(現姓阿久井・故保隆氏夫人) 天神馬場の渡司栄医師の娘さんでした。

歌は高等科二年生の立野ひさえさんの美しい声でした。この奉納舞はそれから毎年一回、終戦の前年迄続けられました。あの時から六十年の歳月が流れようとしています、古いアルバムから一枚の写真を見つけましたので、思い出すまを綴りました。



「浦安の舞」記念写真  
諏訪神社神殿前にて  
昭和15年11月10日

# 私の子供時代

都北町（東区出身） 長 峯 泰太郎

私が生まれ育った頃の思い出を順不同に列記し、感想を交えながら記載する。

五十年前前のことであるので、記憶違いや思い違いもあるかと思う。その点はお許しいただきたい。

私は昭和二十年四月、庄内小学校入学である。正門を入れてすぐ左側にあった立派な講堂で入学式が挙行された。担任は女先生であった。子供心に「大変美人だな」と感じていた。その当時は、まだ独身であられたのであろう。もんぺ姿が印象的であった。

ところで、同年八月六日、米軍の飛行機から焼夷弾が投下され校舎や講堂が焼けてしまった。つまり、庄内空襲の日である。この空襲で西区や町区の数十軒が焼失してしまった。

また、同年三月十八日から五十二人が死亡した八月六日の都城大空襲の日でもあった。同日、八時十五分、広島市には世界初の原子爆弾が投下されたのである。

「ピカドン」と南の空に閃光が走ったようだという大人達の話を書くにつれ、不安が増大していくのを覚えたものである。

講堂の焼け跡から鉛玉のように曲がった硝子の破片が出てきたり、玄米の焼けたのが赤色を帯びて出てきたのを記憶している。

あの当時、正門にあった狛犬は戦後も残っていたようであるが、現在はどうなっているのだろうか。あの日から、今年で五十四回目の夏を迎えてしまった。歳月の経過は実に早いものである。現在の日本は、平和国家として繁栄しそのありがたさに感謝している昨今である。勿論、先輩達の復興への努力の賜物である。

しかし、世界の情勢を見回すと宗教・民族間の対立、国益等からくる利害関係で紛争が多発している。多数の人が死亡したり、貧困に喘いだりしている。憂慮に耐えない昨今でもある。

さて、私は焼夷弾が投下される寸前まで、学校のプールで「ゲンゴロウ」を捕まえたりして夢中で遊んでいた。無気味な空襲警報のサイレンが耳に入り「敵機襲来」と子供心に直感し、一目散に家の粗末な防空壕に逃げ帰った。今にして思えば命拾いをした一日であった。

そのプールは、現在の地区体育館の所にあり三島通庸の記念

碑の近くから東の方に向かって延びていた、二十五メートルプールで当時としては大変立派なものであった。

八月十五日、遂に終戦を迎えることになった。この時、家の二階には兵隊が住んでいた。酒を呑んで日本刀を振り回し「日本は戦争に負けた」と喚きながら暴れていた光景が臉の裏に焼きついている。入学式から終戦までの四、五ヶ月間には空襲が激しくなり、敵機襲来に備え近くの山久院（豊幡神社）で学習したこともあった。この頃は地区ごとに分散しての学習であった。

机や椅子は、親に作ってもらったのを持ち込んでいたようである。敗戦色濃い時代であった。

終戦間際には、竹で造った模造飛行機がシートを被せて運動場に置いてあった。あたかも日本には、まだ飛行機があるかの如く見せかけていたのであろう。

テントも運動場の北側に張られていたが、そのテントの縫い目には蚤が行列を連ねていた。

入学式から暫くは、御真影を安置した奉安殿もあった。意味もよく理解できず一同黙礼した記憶もある。その奉安殿も何年生の頃だったか記憶も定かではないが取り壊され、築山として埋められてしまった。

この築山でもよく遊んだものである。六年生時の記念写真もここで撮影されている。現在は、また別の所に築山として残っている。

終戦後は本当の「青空教室」であった。その後、「バラック」という名の簡易教室ができ、そこで学習したことも今となっては懐かしい思い出となっている。

教室とはいえ、床はなく足置き場は土の上であった。雨が降れば「ヒラキ」の節穴から雨漏りがして傘をさしての学習であった。この時の担任は、男先生であった。子供心に相当の年齢であったと思っていた。実はそうではなかったのかもしれない。三年生の頃、新たに木造校舎が建ち、そこに入るようになった。この時、大事件が発生した。先生の腹の虫の居所がよほど悪かったのか体罰事件が発生した。

叩かれた子供の顔が腫れあがってしまった。それが原因かどうかは知る由もないが、とにかく子供達の前から姿が見えなくなってしまった。退職されたのか、転勤されたのかは不明であった。「民主主義」とは何ぞやとお互いに模索していた時代ではなかっただろうか。

この頃のこと忘れ得ぬことがある。当日も親友同士がある場所に集まり、冗談をしながら遊んでいた。ところがその中の

一人が木戸口から道路へいきなり飛び出した。飛び出した瞬間今でいう乗用車と衝突してしまったのである。みるみるうちに顔が腫れあがってしまった。この時は、心底から吃驚した。一応治療もされたが、その後の経過も芳しくなかったようである。夏休みに入り、水泳中に耳に水が入ったときのことの中耳炎になり、また治療を受けられた。その後、暫くして若い命を散らされたのであった。今になって思えば車との衝突による後遺症ではなかったかと思っている。残念でならなかった。

当時としては、車といえば荷馬車が道路を通る位だと思っていた。本当に珍しい程珍しい乗用車が偶然走行してきたのである。

運命とはこういうものだろうかと考え、痛恨の思いであった。ここに改めて哀悼の意を捧げたい。

四年生の頃であっただろうか。時々ではあったが給食も開始されたようである。給食といっても脱脂粉乳でただでさえ飲めたものではなかった。

しかし、敗戦後の日本の食糧事情の悪化で子供達の栄養面を心配して、米国が援助したものであった。これで、一応飢餓の状態は脱したようであった。

学習面では、尺貫法からメートル法になったとかで学習のや

り直しもあった。頭を切りかえるのが大変であった。この頃、通称おみけんの新田溝（用水路）に朝から夕方まで水泳に行っていた。明日から二学期の始業式という日に発熱してしまった。医者から疲労と栄養面からきた肋膜炎と診断され三ヶ月位学校を休むことになった。

担任の先生の指示があったのだろう。級友達が学校帰りに家に立ち寄り、脱脂粉乳を届けてくれるのである。この行為をありがたく思いながらも、あの何ともいえない臭気と味に吐き気を覚えたものであった。

学校帰りの元気のよい級友の姿を見たり、隣り近所で元気に遊ぶ同年代の子供達の声を寢床の中で聞きながら、自分の置かれている境遇が哀れであった。この時程、健康のありがたさを身にしみて感じたことはなかった。その後現在まで健康であり医者にも風邪でしか世話にならなかったことに感謝している。何年生の頃だったか判然としないが、関之尾方面の途中から通称おみけんの新田溝に通じる用水路（トンネル）を仲間と泳いできたことがある。

トンネルの途中にさしかかったところ、雨後の為増水していたのである。水量が増していて寝泳ぎでも鼻と口を目を少ししか出せない所があった。

この時は「あっ、もしかしたら」と不安が急に襲いかかった。そして、不吉な不安に戦慄しながらも無事トンネルを抜け出た瞬間、安堵感に浸ったことを覚えている。無謀な冒険は謹むべきだと悟った。

十五夜といえど地区の中学生を先頭に山に葛を取りに行ったものである。時にはターザンの真似などして悦にいったものであった。その葛を芯にして藁で綱引きの綱を親達が綯なってくれた。

戦後の一時期、兵隊が山に隠していた食糧（カンパン・牛缶・コンペイ糖）を取りに行ったこともある。途中で誰れかの「憲兵隊がきた」という声でそのまま逃げ帰ったこともあった。子供心にも憲兵隊は恐かった。

当時の親達は、子供の遊びに心配はしていたのであろうが、あまり小言を言わなかったような気がする。同じ地区内の小学生から中学生という縦割りの生活形体があった。結構楽しいものであった。

現在では、この縦割りの生活形体はなくなったようである。遊びの中で先輩達から生きていくうえでの知識や知恵を教わる場が少なくなったことを残念に思う昨今である。

## 庄内地区の婦人会活動

（昭和三十年代の簡素化運動）

町区 宇野 ユキエ

### 一 公民館における結婚式

庄内地区婦人連絡協議会に農協より花嫁衣裳を三枚買ってもらいました。そのときの役員が財部シズエさん、持永テルさん、山下アイさんたちでした。当時の教育長は福重重行先生でした。婦人連絡協議会では、簡素化運動の一環として、庄内の若い人達にその花嫁衣裳を利用してもらい、結婚式は公民館で挙げてもらおうと計画しました。

そのときの公民館は、現在庄内入り口にあるファミリーマートのところでした。結婚式の料理は「吸い物・刺し身・まめ・かしわの煮付け・肉のフライ」の五品ときまっていました。料理係は福重テルさんと松田ヤエ子さん、それに私（宇野ユキエ）の三人でした。式場は公民館の二階でした。式では福重教育長のお話がありました。

その頃いろんなものを買ってもらいました。ざぶとん、お膳、吸い物碗、皿など三十人前ありました。お金は町のほうから出



たのでしよう。その時のお椀、お膳などは今もどこかに残っているはずです。皿は公民館に置いてあったので、町区の公民館に全部ではないが残っています。だから町区の公民館台所をみんなでするとき、「ごう、あすこで使っちゃったじゃが」と言ったものです。

この公民館での結婚式の始まりは、昭和三十二年一月二十日で、式を挙げられたのは東幸哉さん、洋子さんでした。その後昭和三十八年四月まで十九組の方々が式を挙げられ、写真が残っています。

## 二 貸衣裳のこと

その後、結婚式に公民館を利用する人がなくなってきました。でも、入ってくるお金で衣裳を買っていたので、衣裳の貸し出しをするようになりました。その頃は、花嫁衣裳ではなくて付き添いの人の衣裳になっていました。それまで、福重テルさんが衣裳はずっと保管されやっていたのですが、福重先生が都城に家・屋敷を買われ、移られることになりました。

「後は宇野さんが引き受けてください。ほかの人には譲れません。あなたでなければ」

と、持永さんをはじめ山下さん、役員の方たちがみんなして座り込んでいて動かれません。

「あたしはそげな大事な仕事はしはならんかい」

と何回も断わったのですが、あんまりせめられれば、私の夫がまだ生きてるうちだったんですが、その夫が

「よかがね、おいも協力すいがね、こしこみんなが言いやつとに、したほうがゆあねか。」

と、そういうものですから引き受けることになりました。だから夫もよく協力をしてくれました。

貸衣裳は昭和三十九年から六十一年度まで二十二年間続けて来ました。三着の衣装で出発してから、貸衣裳だけになったころには二十着近くの衣裳になっていました。その後も貸付料が入ってくるので、経費を差し引いた残りで衣裳を少しずつ買入れていきました。

私が請け合った最初のころは、毎日のように結婚式があって、みんなが借りに来られるのでその日に返してもらわないと、明くる日の予約があるので、返しに来られない所には、主人が取りに行ってくれたりしました。とにかく初めのころは、おもしろいように借りに来られていました。私は家を空けることができませんでした。

後には借りる人が少なくなってくるし、古いのはだれも借りなくなってきました。そのうち、役員の人達が、「自分たちはいつまでも役員をしておれないから」また、私も主人が亡くな

りましたので、留守のときが困ると言うことで、「若い人を入れてよう」ということになりました。そこで、立野悦子さん、汾陽あや子さんに加わってもらいました。そして、私が留守のときは、立野悦子さんが出し入れをしてくれていました。

そうするうちに借り手は少なくなっただけという状態になっていました。それを汾陽あや子さんが「自分たちに分けてくださるといいのだが、相撲甚句の前掛けに利用するので」ということでした。わたしなんか年寄りには分からないが、若い人達よりはなかなか工面がよいと思えました。着物をただ眠らせておくのではなく、相撲甚句の前掛けなら着物の裾模様などが、生かされるでしょう。そして、相撲甚句踊りの仲間の人達で語り合って作られたようです。そのとき、十枚ぐらい二万円で売ったと記憶しています。だから花嫁衣裳がここでも役に立ちました。それからこっちは前掛けは古くなったということで、また作り直したということです。だから今のものはそのときのものではないと思います。

最後の年（昭和六十一年度）になるといよいよ借り手もなくなりしました。最初のころは年間四百枚も出ていたのですが、私もやめることになったので、みんなで話し合っただけでやめることにしました。そして、新しい着物はみんなで値段を決めて売るこ

とにしました。役員になっていた人を始め、何人かの人を買ってもらいました。お金は、役員の方々に手当を少しずつ出して、残ったお金の十万円ぐらいは町の方に寄付しました。

それまでも、婦人会の名目でやって来たので婦人会に年間五万円ずつの補助を出していました。そんなこともあって後に、婦人会で引き受けるということもありましたが、めんどろな仕事なので実際に仕事を引き受ける人がいなくて、そのまま私が続けて来ました。貸付料の収入の中から、クリーニング代やその他の経費のほかに、年間二着ずつの衣裳を買って来ました。衣裳は、初め「中村屋デパート」でしたが、すぐ後からは「大丸デパート」から購入していました。衣裳は山田や西岳からも借りにみえました。

### 三 その他の活動

この公民館での結婚式、花嫁衣裳の貸出という仕事は、やってよかったと思っています。庄内地区の人々のために役に立つたと思っています。今でこそボランティアといいますが、かつての婦人会の役員をはじめとして、私たちがやって来た婦人会活動もボランティアの精神であったと思います。いろんなことを自発的に考え、工夫をこらし活動をしていました。老人会の運動会になると、役員の方の家で自分たちで料理をし、来賓の

人達に弁当をだしていました。忠霊塔で慰霊祭があればおすしなど作ってもって行ったりしました。

昔は正月に門松をたてていましたが、これについても婦人会で取り上げて行きました。ことの始まりは、正月になるとどこの家でも門松を立てるので、個人所有の松山が切られてしまうので困るということでした。そこで婦人会で話し合い、門松廃止を決め、それに変わるものとして紙に印刷した門松を使うようになったのです。

また、庄内町の敬老会はこの町区が一番でした。昭和二十六年でした。朝倉先生に来てもらって、お年寄りの血圧を測ってもらったりしました。その頃は七十歳以上で三十七・八人だったでしょう。その後、国でやるようになってから六十五歳以上になったようです。この町区の敬老会は、持永テルさん、亡くなられた南崎喜美さんたちの発案によるものでした。

このように昭和二十年代、三十年代の婦人会活動は自分たちで考え、工夫して生き生きと活動していました。この時代の婦人会活動のことを知っている人は、もう少なくなってしまうでしょう。

【これをまとめるに当たって、福重晴夫氏からご両親のことについてご教示いただきました。(取材・山下謙二郎)】

## 農協での若き日の思い出

東区 山元 哲朗

私が敗戦の翌二十一年四月当時の農業会に何の予備知識もなく就職したのは年齢十七才の時でした。

事務所は窓こそガラス戸でしたが、木造平屋建、職員も三十名足らずで農業共済組合、土地改良も同居していました。

就職してすぐに購買部（現在の組織では営農経済課）に配置になりました。今ではとても考えられませんが、肥料も配給制で班長さん（責任者）に受取りに来てもらっていました。一度だけでしたが谷頭迄御苦労願ったことがあり谷頭のメイン通りに順番待ちの荷馬車の行列が出来たこともありました。

昭和二十三年に米駐留軍の命令で八月十五日をもって農業会から農業協同組合に名称変更となり、事務所正面玄関に木の板に横書の英語で農協事務所と掲示されたのを覚えております。

名称、仕組等の変更により職員も一応退職ということになり、退職金を二年ちょっとで百円札束で二万円貰いました。しかし、一時なりとも自分の物になった札束を手にしたのは初めてのこ

とでしたしこんなに貰ってよいものかと思つたものでした。

経営基盤が弱かつた農協が経営が苦しくなり再建整備組合となつた時期がありました。貯払資金も不足しがちになり当時の上司は資金繰りに苦勞されたものでした。当時私は乙房支所に勤務していましたが忘れられない出来事があります。

それは何気なく事務所から外を見ていますと高額貯金者の方が来られるではありませんか。金庫には金は無し貯払いだったら何と言訳して帰つてもらおうかと気もソゾロ。でもその人は入金をして下されたのです。「地獄に仏」とは正にこのこと、今でもその時の状況その人の名前のはっきり覚えています。

又再建組合となつて宮崎から派遣参事として大迫直太郎という方が来られましたが、着任されてどれ位経つてからでしたか「庄内ではないネ、庄と内の間にガがつくね、続けて言つてみると仕様が無いとなり庄内は仕様の無いところだね。」と言われたことを折にふれては思い出しましたが、この人も忘れられない人となっています。

澱粉工場の最盛期には澱粉歩溜りの良い甘藷が熊本にあるとの情報があり当時の上司の花吉兼義さん(平田在住)と当なしで買入れに行ったこと、事務所に地方紙の記者(?)が寄付をと言つて来たのを仕事の邪魔をしないでくれと噛みついたこと、

野球チームを作り三股、高崎、沖水と対戦したこと、高崎に行くのにトラックの荷台で当時流行つた「お富さん」をみんなで歌つたと、等思い出されます。

建物の移り変わりを簡単に記してみますと、森林組合事務所、同製材工場、町営質庫、等が無くなり、共済組合事務所が現在のAコープのある場所に二階建てで出来ました。(その前は食糧営団の建物がありその後には大きい梅檀の木があった)現在の農協の事務所は昭和四十八年に旧庄内町役場跡に建設され現在に至っている。なお、一市五町の農協広域合併後に現在の飼料倉庫、肥料倉庫、Aコープ等が建設され、乙房営業所も合併後の建設であります。

最後に時代の流れ、紆余曲折はありましたが現在の農協があるのも歴代組合長を始めとして先人先輩諸氏の奮闘努力の賜と思ひます。先代組合長名を順不同になりますが一列記致します。

横山新一(故人 川崎区) 今村清二(故人 宮島区)

松元和夫(当時東区在住) 西原 功(平田在住)





昭和20年代の農協付近略図

# 庄内ことば 雑感

町区 山元 昭平

はじめに

「お前とはちこや、庄内さね行こや庄内の茅には稲がなる。」  
 といって鹿児島方面から大勢移住して来た時期がございました。  
 庄内盆地（都城地方）は霧島山麓に囲まれた富裕な土地でもあり、昔から島津氏が守護されて以来七〇〇年以上も続き一度も藩主が改易されずに続いて来ました。又庄内と西岳には放牧場も設けられ、薩摩と密接な関係にあり、都城初代島津資忠も薩摩迫に入り、夫妻の墓も山久院に眠り、四代敏久と五代持久が城山に安永城を築きました。その名残が未だに残っています。  
 地形的に見ても、朝な夕な遥かに霧島連山を仰ぎ、一際高く聳ゆる高千穂の峯を見て暮らす庄内の人々にとって、庄内は貴重な心のやすらぎの場であり、誇りでもあります。

明治二年三島地頭が庄内に来られて、武士職人商人と多くの人々を移住させて開発された事は既存の事実ですが、それ故に日常の会話もそれらの階級の人々の生活環境にも今迄と異なっ

た習慣や祭礼などの行事にも変化をきたしたのではないかと思われます。その様な土地柄で暮らして来た都城地域周辺に於いては自然と言葉にも風土にも育てられて根を下ろして来たものと考えられます。

つまり「さつま方言」といわれる一種独特な言葉が形成されて来たものでしょう。又庄内、西岳、財部周辺と高城、山之口、高崎地域の方言は少々発音にも異なったアクセントの違いがあります。鹿児島との距離間隔の相違かも知れませんが、近年になって距離の間隔も無くなり、より交流が頻繁になるにつれて言語風習も自然に近代化されてきて次第に昔の面影は薄れて忘れ去られようとしています。それ故に明治・大正・昭和の人々の言葉を拾って昔とを繋ぎ留めて当時の風習や使われていた言葉などを書き留めて置くのも庄内の昔を語る会のつとめではなからうかと考える次第です。

それでは朝だちの会話から目覚めていききたいと思います。親父は目覚めが早い。ばあさんも一緒に起きたようです。

「よか朝がんだなー」又は「よか朝がしたなー」とばあさんが挨拶をすると「ほっでよか朝じゃっどねえ」と言葉がかえってくる。朝の会話の挨拶から一日が始まるようです。やがて息子

が起きてくると「オイコラお前や庭を掃えちよかんかよ」といわれると「オイがこっや、おら牛の草刈に行くから弟にさせなさいよ」とさっさと鎌を持って出ていってしもつ、あとかい弟は目をこすりこすり箒を持って掃やき始めます。まあこんな調子で大概な家庭の朝が始まるようです。近頃は何処の家庭でも、キッチンルームがあり、食器棚が設けられて居り、居間にはテレビがつけっ放しで賑やかなことです。朝からパン食牛乳、いちごジャムとチョコレートが並べられ、お好きなものをどうぞとそばにはウインナーやバター、マヨネーズが置いてあり至れり尽せり一〇〇%の栄養価です。

ところがお隣の隠居所はちよつと様子が違うようです。「こらばあさん早く飯を喰わせんかよ、腹が減ったがね」と催促すると「お前様は氏神様にお参りされましたか？それから今日は〇〇さんの命日ですからお仏壇に線香をあげておいて下さい」と、まあこの様にして朝飯の準備がなされるようです。

子供達は学校へ行きます。授業が始まる前に騒いでいると「先生がきやっど、静かにしとかなと叱られるよ」と急にシーンとなる、可愛いものです。

大人は野良仕事や山に行ったりした時、急に天気が悪くずれてくると、何もかも忘れてしまつて夕方迄働き、疲れ切った体で

家に帰りつき「本<sup>ま</sup>当<sup>ごち</sup>に今日<sup>けふ</sup>の仕<sup>し</sup>事<sup>じ</sup>はきつ<sup>きつ</sup>い仕<sup>し</sup>事<sup>じ</sup>だつた、すつ<sup>すつ</sup>か  
い<sup>い</sup>だ<sup>だ</sup>れ<sup>れ</sup>し<sup>し</sup>も<sup>も</sup>た<sup>た</sup>。本<sup>ま</sup>当<sup>ごち</sup>に<sup>み</sup>つ<sup>つ</sup>ら<sup>ら</sup>か<sup>か</sup>つ<sup>つ</sup>た。」と座敷<sup>ざしき</sup>にごろ<sup>ろ</sup>つ寝<sup>ね</sup>こ  
ろ<sup>ろ</sup>んでしま<sup>ま</sup>います。鹿<sup>か</sup>兒<sup>に</sup>島<sup>じま</sup>地方<sup>ちほう</sup>では、つ<sup>つ</sup>ら<sup>ら</sup>い<sup>い</sup>こ<sup>こ</sup>と<sup>と</sup>を<sup>を</sup>「て<sup>て</sup>せ<sup>せ</sup>」

「の<sup>の</sup>さん<sup>さん</sup>や<sup>や</sup>つ<sup>つ</sup>た<sup>た</sup>」とい<sup>い</sup>ま<sup>ま</sup>す。み<sup>み</sup>ご<sup>ご</sup>え<sup>え</sup>＝身<sup>み</sup>強<sup>こえ</sup>え、手<sup>て</sup>強<sup>こえ</sup>い<sup>い</sup>容<sup>よう</sup>易<sup>い</sup>で  
は<sup>は</sup>な<sup>な</sup>い<sup>い</sup>の<sup>の</sup>意<sup>い</sup>で<sup>で</sup>「み<sup>み</sup>」は接<sup>せつ</sup>頭<sup>とう</sup>語<sup>ご</sup>です。又<sup>また</sup>反<sup>はん</sup>対<sup>たい</sup>語<sup>ご</sup>は、み<sup>み</sup>や<sup>や</sup>え<sup>え</sup>か<sup>か</sup>つ<sup>つ</sup>た、  
思<sup>おも</sup>つ<sup>つ</sup>て<sup>て</sup>い<sup>い</sup>た<sup>た</sup>よ<sup>よ</sup>り<sup>り</sup>た<sup>た</sup>や<sup>や</sup>す<sup>す</sup>か<sup>か</sup>つ<sup>つ</sup>た、楽<sup>らく</sup>だ<sup>だ</sup>つ<sup>つ</sup>た<sup>た</sup>の<sup>の</sup>意<sup>い</sup>です。の<sup>の</sup>さん<sup>さん</sup>、き  
ち<sup>ち</sup>、き<sup>き</sup>し<sup>し</sup>か<sup>か</sup>、た<sup>た</sup>ま<sup>ま</sup>ら<sup>ら</sup>ん、同<sup>どう</sup>意<sup>い</sup>語<sup>ご</sup>です。例<sup>れい</sup>え<sup>え</sup>ば「そ<sup>そ</sup>げ<sup>げ</sup>ん<sup>ん</sup>働<sup>と</sup>れ<sup>れ</sup>つ<sup>つ</sup>の  
そ<sup>そ</sup>か<sup>か</sup>い<sup>い</sup>、ま<sup>ま</sup>れ<sup>れ</sup>け<sup>け</sup>ん<sup>ん</sup>な<sup>な</sup>よ<sup>よ</sup>く<sup>く</sup>え<sup>え</sup>よ（休<sup>やす</sup>め<sup>め</sup>よ）」

夕<sup>ゆ</sup>暮<sup>ぐ</sup>にな<sup>な</sup>ると子<sup>こ</sup>供<sup>ども</sup>達<sup>たち</sup>に「こ<sup>こ</sup>ら<sup>ら</sup>つ<sup>つ</sup>わ<sup>わ</sup>つ<sup>つ</sup>ど<sup>ど</sup>ま、ば<sup>ば</sup>ん<sup>ん</sup>も<sup>も</sup>と<sup>と</sup>せ<sup>せ</sup>ーは<sup>は</sup>い<sup>い</sup>つ  
づ<sup>づ</sup>つ<sup>つ</sup>ど<sup>ど</sup>ん<sup>ん</sup>遊<sup>あそ</sup>ば<sup>ば</sup>じ、ぐ<sup>ぐ</sup>づ<sup>づ</sup>／＼<sup>／＼</sup>せ<sup>せ</sup>じ<sup>じ</sup>は<sup>は</sup>よ<sup>よ</sup>戻<sup>も</sup>つ<sup>つ</sup>風<sup>かぜ</sup>呂<sup>ろ</sup>ん<sup>ん</sup>火<sup>か</sup>で<sup>で</sup>ん<sup>ん</sup>炊<sup>か</sup>か<sup>か</sup>ん<sup>ん</sup>か<sup>か</sup>」  
と嬢<sup>かみ</sup>ど<sup>ど</sup>ん<sup>ん</sup>達<sup>たち</sup>がよ<sup>よ</sup>く大<sup>う</sup>声<sup>こゑ</sup>で<sup>で</sup>お<sup>お</sup>ら<sup>ら</sup>つ<sup>つ</sup>も<sup>も</sup>ん<sup>ん</sup>じ<sup>じ</sup>や<sup>や</sup>し<sup>し</sup>た。（こ<sup>こ</sup>ら<sup>ら</sup>あ<sup>あ</sup>ん<sup>ん</sup>た<sup>た</sup>達<sup>たち</sup>  
は夕<sup>ゆ</sup>暮<sup>ぐ</sup>にな<sup>な</sup>れ<sup>れ</sup>ば<sup>ば</sup>い<sup>い</sup>つ<sup>つ</sup>ま<sup>ま</sup>で<sup>で</sup>も遊<sup>あそ</sup>ば<sup>ば</sup>ず<sup>ず</sup>に早<sup>はや</sup>く帰<sup>かえ</sup>つ<sup>つ</sup>て風<sup>かぜ</sup>呂<sup>ろ</sup>の<sup>の</sup>火<sup>か</sup>でも炊<sup>か</sup>  
い<sup>い</sup>てお<sup>お</sup>母<sup>はは</sup>さん<sup>さん</sup>のお<sup>お</sup>手<sup>て</sup>伝<sup>でん</sup>い<sup>い</sup>でもし<sup>し</sup>な<sup>な</sup>さい）そ<sup>そ</sup>して遊<sup>あそ</sup>び<sup>び</sup>足<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>ん顔<sup>かほ</sup>を  
し<sup>し</sup>て帰<sup>かえ</sup>る<sup>る</sup>も<sup>も</sup>ん<sup>ん</sup>じ<sup>じ</sup>や<sup>や</sup>し<sup>し</sup>た。

晩<sup>ばん</sup>め<sup>め</sup>し<sup>し</sup>な<sup>な</sup>ると囲<sup>い</sup>炉<sup>ろ</sup>裏<sup>うら</sup>を<sup>を</sup>囲<sup>かこ</sup>んで自<sup>す</sup>在<sup>ざい</sup>鉤<sup>かぎ</sup>の<sup>の</sup>下<sup>した</sup>ん<sup>ん</sup>坐<sup>ざ</sup>つ、味<sup>あじ</sup>噌<sup>そう</sup>汁<sup>じゅう</sup>と大<sup>だい</sup>  
根<sup>こん</sup>め<sup>め</sup>噛<sup>か</sup>い<sup>い</sup>乍<sup>は</sup>ら御<sup>ご</sup>飯<sup>はん</sup>を<sup>を</sup>食<sup>く</sup>う<sup>う</sup>も<sup>も</sup>ん<sup>ん</sup>じ<sup>じ</sup>や<sup>や</sup>し<sup>し</sup>た。時<sup>とき</sup>には乾<sup>かん</sup>燥<sup>そう</sup>魚<sup>ぎょ</sup>の大<sup>だい</sup>き<sup>き</sup>い<sup>い</sup>  
小<sup>こ</sup>さい<sup>さい</sup>の<sup>の</sup>こ<sup>こ</sup>と<sup>と</sup>で兄<sup>あに</sup>弟<sup>てい</sup>喧<sup>けん</sup>嘩<sup>か</sup>でもし<sup>し</sup>てい<sup>い</sup>ると、火<sup>ひ</sup>の頭<sup>あたま</sup>木<sup>き</sup>が飛<sup>と</sup>んで<sup>で</sup>く  
る<sup>る</sup>も<sup>も</sup>の<sup>の</sup>で<sup>で</sup>し<sup>し</sup>た。

晩<sup>ばん</sup>はテ<sup>て</sup>レ<sup>レ</sup>ビ<sup>び</sup>も無<sup>な</sup>い<sup>い</sup>時<sup>とき</sup>代<sup>だい</sup>で夕<sup>ゆ</sup>食<sup>しょく</sup>が終<sup>す</sup>むと、し<sup>し</sup>ば<sup>ら</sup>く<sup>く</sup>は一<sup>いち</sup>日<sup>にち</sup>の<sup>の</sup>出<sup>で</sup>  
来<sup>き</sup>事<sup>じ</sup>な<sup>な</sup>ど語<sup>ご</sup>つ<sup>つ</sup>た<sup>た</sup>り<sup>り</sup>し<sup>し</sup>て世<sup>よ</sup>間<sup>かん</sup>話<sup>わ</sup>な<sup>な</sup>ど聞<sup>き</sup>いた<sup>た</sup>り<sup>り</sup>し<sup>し</sup>て時<sup>とき</sup>間<sup>かん</sup>を<sup>を</sup>過<sup>す</sup>ご<sup>ご</sup>し<sup>し</sup>ま  
す<sup>す</sup>が、し<sup>し</sup>ば<sup>ら</sup>く<sup>く</sup>す<sup>す</sup>ると、「お<sup>お</sup>前<sup>まへ</sup>達<sup>たち</sup>は宿<sup>しゆく</sup>題<sup>だい</sup>は出<sup>で</sup>ち<sup>ち</sup>よ<sup>よ</sup>ら<sup>ら</sup>ん<sup>ん</sup>と<sup>と</sup>か、明<sup>あ</sup>

日<sup>たん</sup>の時<sup>じ</sup>間<sup>かん</sup>割<sup>わり</sup>は判<sup>わ</sup>つ<sup>つ</sup>ち<sup>ち</sup>よ<sup>よ</sup>つ<sup>つ</sup>と<sup>と</sup>か、少<sup>ち</sup>し<sup>し</sup>は勉<sup>ちん</sup>強<sup>きやう</sup>を<sup>を</sup>し<sup>し</sup>てご<sup>ご</sup>ろ<sup>ろ</sup>ご<sup>ご</sup>ろ<sup>ろ</sup>せ<sup>せ</sup>じ  
早<sup>はや</sup>よ寝<sup>ね</sup>れ<sup>れ</sup>よ。」と子<sup>こ</sup>供<sup>ども</sup>は夜<sup>よ</sup>仕<sup>し</sup>事<sup>じ</sup>邪<sup>じあ</sup>魔<sup>ま</sup>にな<sup>な</sup>つ<sup>つ</sup>と<sup>と</sup>でし<sup>し</sup>よ<sup>よ</sup>う<sup>う</sup>か。

次<sup>つぎ</sup>に当<sup>あた</sup>地<sup>ち</sup>域<sup>いき</sup>でよ<sup>よ</sup>く使<sup>つか</sup>わ<sup>わ</sup>れ<sup>れ</sup>てい<sup>い</sup>る言<sup>ごん</sup>葉<sup>は</sup>を<sup>を</sup>拾<sup>ひろ</sup>つ<sup>つ</sup>て<sup>て</sup>み<sup>み</sup>ま<sup>ま</sup>し<sup>し</sup>た。

「ど<sup>ど</sup>ん<sup>ん</sup>」につ<sup>つ</sup>いて

風<sup>かぜ</sup>邪<sup>じあ</sup>に<sup>に</sup>でも權<sup>けん</sup>か<sup>か</sup>ると、す<sup>す</sup>ぐ親<sup>おや</sup>が「お<sup>お</sup>前<sup>まへ</sup>は田<sup>た</sup>中<sup>ちゆう</sup>医<sup>い</sup>院<sup>えん</sup>か宮<sup>みや</sup>下<sup>した</sup>医<sup>い</sup>院<sup>えん</sup>  
に<sup>に</sup>行<sup>い</sup>つ<sup>つ</sup>て診<sup>しん</sup>察<sup>さつ</sup>し<sup>して</sup>貫<sup>くわん</sup>つ<sup>つ</sup>て注<sup>ちゆう</sup>射<sup>しゃ</sup>を<sup>を</sup>し<sup>して</sup>来<sup>き</sup>い<sup>い</sup>よ」とよ<sup>よ</sup>く言<sup>ごん</sup>わ<sup>わ</sup>れ<sup>れ</sup>ま<sup>ま</sup>す。  
語<sup>ご</sup>源<sup>げん</sup>は「殿<sup>てん</sup>」に該<sup>がい</sup>当<sup>たう</sup>す<sup>る</sup>尊<sup>そん</sup>称<sup>てい</sup>で上<sup>じやう</sup>司<sup>し</sup>役<sup>やく</sup>目<sup>もく</sup>上<sup>じやう</sup>の<sup>の</sup>人<sup>にん</sup>に<sup>に</sup>対<sup>たい</sup>す<sup>る</sup>言<sup>ごん</sup>葉<sup>は</sup>  
で<sup>で</sup>あ<sup>あ</sup>つ<sup>つ</sup>て、か<sup>か</sup>つ<sup>つ</sup>て我<sup>われ</sup>々<sup>々</sup>が昔<sup>むかし</sup>の<sup>の</sup>中<sup>ちゆう</sup>等<sup>とう</sup>学<sup>がく</sup>校<sup>こう</sup>の<sup>の</sup>頃<sup>ころ</sup>庄<sup>じやう</sup>内<sup>ない</sup>には<sup>は</sup>観<sup>くわん</sup>瀾<sup>らん</sup>舎<sup>しゃ</sup>とい  
う<sup>う</sup>処<sup>ところ</sup>が<sup>が</sup>あ<sup>あ</sup>つ<sup>つ</sup>て、中<sup>ちゆう</sup>等<sup>とう</sup>学<sup>がく</sup>校<sup>こう</sup>（今<sup>いま</sup>の<sup>の</sup>高<sup>こう</sup>校<sup>こう</sup>）に<sup>に</sup>入<sup>い</sup>学<sup>がく</sup>す<sup>る</sup>れ<sup>れば</sup>一<sup>いつ</sup>応<sup>おう</sup>庄<sup>じやう</sup>内<sup>ない</sup>西<sup>せい</sup>  
岳<sup>たけ</sup>在<sup>ざい</sup>住<sup>じゆう</sup>の<sup>の</sup>者<sup>もの</sup>は<sup>は</sup>観<sup>くわん</sup>瀾<sup>らん</sup>舎<sup>しゃ</sup>に<sup>に</sup>入<sup>い</sup>つ<sup>つ</sup>て知<sup>ち</sup>力<sup>りき</sup>体<sup>たい</sup>力<sup>りき</sup>胆<sup>たん</sup>力<sup>りき</sup>な<sup>な</sup>ど<sup>の</sup>の<sup>の</sup>修<sup>しゆう</sup>練<sup>れん</sup>の<sup>の</sup>場<sup>ばう</sup>と<sup>と</sup>し  
て鍛<sup>くわ</sup>え<sup>え</sup>ら<sup>ら</sup>れる<sup>る</sup>郷<sup>ごう</sup>中<sup>ちゆう</sup>教<sup>きやう</sup>育<sup>いく</sup>が<sup>が</sup>な<sup>な</sup>さ<sup>さ</sup>れた<sup>た</sup>も<sup>も</sup>の<sup>の</sup>で<sup>で</sup>し<sup>し</sup>た。こ<sup>こ</sup>こ<sup>こ</sup>で<sup>で</sup>は<sup>は</sup>上<sup>じやう</sup>級<sup>きゆう</sup>生<sup>せい</sup>  
も<sup>も</sup>下<sup>げ</sup>級<sup>きゆう</sup>生<sup>せい</sup>も<sup>も</sup>野<sup>の</sup>海<sup>かい</sup>ど<sup>ど</sup>ん<sup>ん</sup>清<sup>せい</sup>水<sup>すい</sup>ど<sup>ど</sup>ん<sup>ん</sup>の<sup>の</sup>呼<sup>こゝろ</sup>名<sup>めい</sup>で<sup>で</sup>対<sup>たい</sup>話<sup>わ</sup>し<sup>して</sup>い<sup>い</sup>て懐<sup>なつか</sup>か<sup>か</sup>しい<sup>い</sup>想<sup>さう</sup>  
い<sup>い</sup>出<sup>で</sup>とな<sup>な</sup>つ<sup>つ</sup>て心<sup>こゝろ</sup>に<sup>に</sup>残<sup>のこ</sup>つ<sup>つ</sup>てい<sup>い</sup>ま<sup>ま</sup>す。

その<sup>その</sup>反<sup>はん</sup>面<sup>めん</sup>「ち<sup>ち</sup>ゃ<sup>ゃ</sup>ん<sup>ん</sup>」が<sup>が</sup>あ<sup>あ</sup>り<sup>り</sup>ま<sup>ま</sup>す。普<sup>ふ</sup>通<sup>つう</sup>は<sup>は</sup>幼<sup>よう</sup>い<sup>い</sup>子<sup>こ</sup>供<sup>ども</sup>に<sup>に</sup>対<sup>たい</sup>して、  
「ち<sup>ち</sup>ゃ<sup>ゃ</sup>ん<sup>ん</sup>」と<sup>と</sup>呼<sup>よ</sup>んで<sup>で</sup>い<sup>い</sup>ま<sup>ま</sup>す<sup>が</sup>庄<sup>じやう</sup>内<sup>ない</sup>地<sup>ち</sup>方<sup>ほう</sup>では<sup>は</sup>相<sup>さう</sup>当<sup>たう</sup>な<sup>な</sup>年<sup>ねん</sup>輩<sup>ばい</sup>にな<sup>な</sup>つ<sup>つ</sup>て  
も<sup>も</sup>小<sup>こ</sup>さい<sup>さい</sup>時<sup>とき</sup>か<sup>か</sup>ら<sup>ら</sup>の<sup>の</sup>愛<sup>あい</sup>称<sup>てい</sup>が<sup>が</sup>通<sup>と</sup>つ<sup>つ</sup>てい<sup>い</sup>て「福<sup>ふく</sup>一<sup>いつ</sup>ち<sup>ち</sup>ゃ<sup>ゃ</sup>ん<sup>ん</sup>」と<sup>と</sup>か「義<sup>ぎ</sup>照<sup>てう</sup>  
ち<sup>ち</sup>ゃ<sup>ゃ</sup>ん<sup>ん</sup>」と<sup>と</sup>か昔<sup>むかし</sup>の<sup>の</sup>童<sup>どう</sup>顔<sup>がん</sup>が<sup>が</sup>浮<sup>う</sup>か<sup>か</sup>んで<sup>で</sup>く<sup>く</sup>る<sup>る</sup>よ<sup>よ</sup>う<sup>う</sup>です。

古<sup>こ</sup>来<sup>らい</sup>薩<sup>さつ</sup>摩<sup>ま</sup>の<sup>の</sup>影<sup>えい</sup>響<sup>きやう</sup>で<sup>で</sup>し<sup>し</sup>よ<sup>よ</sup>う<sup>う</sup>か、当<sup>あた</sup>地<sup>ち</sup>方<sup>ほう</sup>では<sup>は</sup>日<sup>にち</sup>常<sup>じやう</sup>の<sup>の</sup>風<sup>ふう</sup>習<sup>じゆう</sup>や<sup>や</sup>言<sup>ごん</sup>葉<sup>は</sup>遣<sup>せん</sup>  
い<sup>い</sup>に<sup>に</sup>も古<sup>こ</sup>語<sup>ご</sup>や<sup>や</sup>漢<sup>わん</sup>語<sup>ご</sup>が<sup>が</sup>多<sup>た</sup>く<sup>く</sup>残<sup>のこ</sup>さ<sup>さ</sup>れて<sup>て</sup>い<sup>い</sup>ま<sup>ま</sup>す。

例<sup>れい</sup>え<sup>え</sup>ば他<sup>た</sup>人<sup>にん</sup>の家<sup>いえ</sup>へ<sup>へ</sup>訪<sup>ほう</sup>問<sup>もん</sup>す<sup>る</sup>時<sup>とき</sup>と<sup>と</sup>か店<sup>てん</sup>に<sup>に</sup>買<sup>か</sup>い<sup>い</sup>物<sup>ぶつ</sup>に<sup>に</sup>行<sup>い</sup>く<sup>く</sup>時<sup>とき</sup>な<sup>な</sup>ど<sup>ど</sup>に  
は「み<sup>み</sup>や<sup>や</sup>げ<sup>げ</sup>ん<sup>ん</sup>そ<sup>そ</sup>ーお<sup>お</sup>じ<sup>じ</sup>や<sup>や</sup>い<sup>い</sup>も<sup>も</sup>す<sup>す</sup>か、又<sup>また</sup>は<sup>は</sup>お<sup>お</sup>じ<sup>じ</sup>や<sup>や</sup>す<sup>す</sup>かか？」と<sup>と</sup>在<sup>ざい</sup>宅<sup>たく</sup>

を確かめます。これは「御見上申候御座候か」又は参り上申候御座候かの意「め」が「み」に転訛したか短縮したりで対人関係で変化します。又おじやんせ、おさいじやんせは御婦人方の丁寧な言葉遣いです。ゆくさ、おじやいもしたな、おさいじやいもしたなとなると超丁寧言になる様です。いたつきもんで、いまつがした、あがいやつたもんせ、おけらんせ、おやつとさあ、ごぶれさあがした、あいがとさげもした、と多種多様に變化していきます。

食事などに呼ばれて、そして帰る時などには「ただきもそ」終れば「よかしようがしたそいじゃまたつがんそ」とペロツと舌つづみをうつ。子供達は手を振って「いんまね」といって再会を約する。又昭和の初め頃迄は「オカベ」買いに行く時には必ずオカベ籠を持って「みやげんそオカベを一丁くいやんせ」といって買ってくるもんでした。佃オカベは豆腐のこと、語源は昔の漢語で宮中の女官の上臈語の詞で豆腐が白かべのように白いのでそれに丁寧語の「お」をつけてオカベといったとあります。この様に方言は人の環境などによっていろいろと使い方が変化しますが、品のよい年輩の御婦人方の丁寧な言葉遣いで話されているのを聞いていますと、ほんのりとした心の和らぎを覚えて気持の和んでくるものを感じさせられます。

次に日常使われている対話の中より二、三拾ってみました。

先ず相手と逢った時初めに交す言葉は「おまよどきいたったけ」目下の人には「お前よどきいたったか」又「わらどこんいたったか」とか「わやどきいっとか。」と荒っぽいものだ。女性になると、「おはんなどきいたったな」「おまんさーはどきいっきやしたか」「おじやいもしたかー」と優しさが滲んできます。帰る時には「もう帰いやすか」「もうおけらすか」と男女年令によって自然に言葉の變化が環境によって違ってくるのも面白いですね。又同じ意味の言葉やそれに似た言葉も多い様です。

大きい事はかり言つて頓着かのし様は無いがね。  
ふてこつばかいいっ とんじやかのしさま ね

沢山唐芋が収穫されましたか。似た様な言葉ですが、我々には容易に理解されます。ふてこつ〓大言壮語不逞なこと、たくさん

四季の變化によって独特な言葉が飛び交つて参ります。

梅雨の季節に入ると「大雨が降つて来たどな」とか「洪水になつどなあ」「今夜は台風にならないと良いがな」など心配顔になり皆んなして不安な一夜を過ごします。

秋の取り入れが済んで祝い事があちこちで話題にのぼつて来ますと、「〇〇どんこは結婚式があいげなど、焼酎が相当要つじやるな」「彼の家は太酒呑が揃っているからな」と楽しい話に花が咲きます。

(次号につづく)



# 母の思い出

宮崎市 田川清一

(関之尾出身)

私のふるさと庄内は、年がうつりそこに住む人が変わっていきましても、折にふれ帰郷して思い出多い山河を眺めるとき、母の懐に抱かれたような心の安らぎを覚えるのは何故でしょうか。

その私の安らぎの本元でもありました母も、昨年九月九十六才で彼岸に逝き、やがて一周忌が参ります。

この機会に、母が明治・大正・昭和・平成と四世代に亘つてどのような人生を送ったのかなど、子や孫に書き記してみよう、そんな気持ちで筆を執りました。

私は八人兄弟姉妹の最年長として育ち、高校卒業後は直ぐ郷里を後にしましたので、後年に至りましても日常の両親の面倒は弟夫婦達任せであまり親孝行も出来ないまま、昨年お盆に病床に見舞ったのが今生の別れとなりました。

母テルは、明治三十六年八月二十九日旧北諸県郡庄内町西区

において丸田仙次郎・モリ夫婦の三女として生まれました。

父仙次郎は元海軍軍人で日清・日露の役に従軍したと聞いております。母モリは、西区の山下家(山下医院)から嫁いで来ていたとのことであり、そのような関係もあって母の姉、故北郷ナミ(主人・故北郷資徳・庄内小教諭)は産婆(助産婦)の道歩んだのではと考えます。現在庄内在住の方でも三十代以降の方で産湯に取り上げてもらった方は多いのではないかと思います。

それはともかく、母は地元の学校を出た後、大正十二年二十代の時に、当時朝鮮総督府の養蚕教師として渡鮮していました関之尾の父田川正江と縁組みし、現在の「北朝鮮」の方に渡ったそうです。当時厳冬の雪の中を馬に乗り、寒さに震えながら父の任地に就いた話や、まだ馬賊が出没する頃で、父の当直の夜などは猟銃を胸に抱いて寝たこともあったとの話を聞かされたものです。

その後、父親の仕事の関係で全羅南道の霊岩、木浦と各地に転居、一時ふるさと庄内に帰り、再度渡鮮し、光州で生活しているとき終戦になり、内地へ引き揚げることになりました。その間、五男三女に恵まれ皆元気に育てて貰いましたが、全然知らない土地での生活、度重なる転居の中での子育ては並大抵の

苦勞では無かったであろうと思われます。

そのような中にあっても、母は在鮮時代の若い頃は、琴を嗜み俳句や詩吟などにも通じ、子供の私共は「山川草木…」などと教え込まれたものでした。

また、親鸞聖人の九才の時の作と云われる「明日ありと思ふ心の仇桜、夜半に嵐の吹かぬものは」の和歌は幾度も教え込まれ、物事は明日とは云わず今日の中にやりなさいと諭されたものでした。

「蛙の親不幸のお迦嘶」も良く聞かされました。その内容は「蛙は雨が降り出すと何故鳴き出すのだろうか。それは昔々川辺に蛙の親子が住んでいました。子蛙は何時も親蛙に反抗ばかりしてましたので、親蛙が死に際に当り、自分の亡骸を山に埋めてくれと頼めば川端に、川にと云えば山に埋めるであろうから、安全な山に埋めて貰うために「川端に埋めてくれ」と頼んだんだそうなの。

すると子蛙は、親蛙が亡くなって初めて自分の親不孝の非を悟り親蛙の遺言どおり川端にお墓を作り叩いたんだそうなの。だから、雨が降り出すと親蛙のお墓が流されはしないかと心配になりガアガアと鳴くんだったそうなの。」

親の在る中に孝養を尽くせとの諭しでしょう。

終戦により、私達日本人は全員、騒然とした朝鮮独立運動の

嵐の吹きすさぶ混乱の中で内地に引揚げる事になりました。仕事で残留の父を残して、母は私共七人の小さい子供を引き連れ、リュック一つを背負って麗水港から小さい帆船で帰国の途につきました。途中対馬の沖では戦後最大の台風に遭遇し九死に一生を得て、台風通過後は無風状態の玄海灘を漂流するなど、一週間かけてやっとの思いで博多港に辿り着き、祖国の土を踏みしめたものでした。

さらにそれから、貨物列車に詰め込まれようやくふるさと庄内に辿り着きましたが、大勢の子供を引き連れての母親の心労は計り知れないものがあつたことでしょう。

その後も、戦後の混沌とした世情の中、後日帰郷した父と共に、現在ゴルフ場となっておりますが当時町有林であった丸山を借り受け、開墾の毎日が続くことになりました。母親も手慣れない仕事を子供達のために歯を喰ひ縛って頑張ったと思いますが、愚痴一つこぼしたのを聞いたことはありませんでした。

その中、社会情勢も徐々に好転し、私達子供も夫々成人して生活も落ち着いて参りました。母も永住の地庄内で良き周囲の環境にも恵まれて、父が平成三年六月九十七才で先立ったことを除けば、後半生は手習い事などしながら心安らぐ幸せな日々を送ったのではないかと思います。

最後に、母に教わった昔の「おまじない」を三つ書いて置き

ます。

1、シャッキリ止めのおまじない

鶉の鳥が 橋の下に昼寝して とげの流るる夢を見た

〜口上を述べて

アブランケンソワカ（三回唱える）

〜茶碗に水を入れその上に箸を十文字に乗せ四角から水を飲む）

2、蝮よけのおまじない

身が行く先に 錦まだらの虫おらば 奥山乙姫に云い聞かせん  
〜蝮の出そうな処で口上を述べて

アブランケンソワカ（三回唱える）

3、たむし治療のおまじない

東山 浅間が岳のつたかずら 元を離せば裏は枯れゆく  
〜口上を述べて

アブランケンソワカ（三回唱える）

〜唱えながらたむしの周囲を刃物の先で輪を描いて囲み、

中心部に向けて撫でていき、その刃をちり紙で拭き取

り人の見ていない処に埋める

註 ソワカは佛教用語「僧莎訶」で「めでたし」の意

大変効き目があるようです。

## 草創期の庄内中学校 野球部のこと

宮島 坂元 庸

あの忌まわしい大東亜戦争は、広島・長崎の原爆投下のもとに終焉を迎えました。国民は敗戦の混乱の中で、身も心も疲弊し、「住むに家なし、食うに食なし。」の暗い世相の時代にありながら、「リングの唄」を口ずさみ、プロ野球の実況放送に耳を傾けながら、明日への気力と希望を持ち続けてきたのでした。

戦後のプロ野球は、終戦の翌年に復活し、青バットの天下、赤バットの川上等の活躍などにより、異常なほどの人気で、国民を熱狂させました。中でも巨人・阪神戦のラヂオ実況放送は、志村アナウンサーの名調子にのり、ファンならずとも忘れることはできないほど興奮したものでした。

又、甲子園の中等学校野球大会では、福島投手を擁した小倉中学が優勝を果たし、深紅の優勝旗が初めて関門海峡を渡ったことで野球ブームに一層の拍車をかけることになりました。

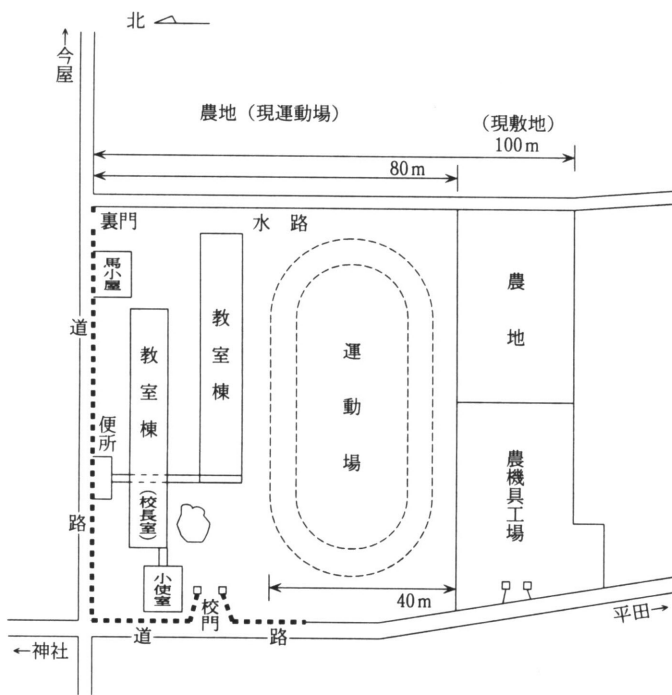
こうした野球ブームの中で、私たち遊び盛りの小学生も、遊

びの中心が自然に野球に移っていったのでした。小学校の校庭では、休み時間、そして放課後と野球遊びに明け暮れる毎日でしたが、敗戦から間もない頃、まともな用具があるうはずはなく、すべて手製によるものでした。ボールは里芋の茎を乾燥させたものを丸めて紐で結わえたもの、グローブは厚手の布切れをミット状に縫って作ったもの、バットは杉の木をすり粉木状に丸く削ったものなどを使いながら習い憶えのルールによって、暗くなるまで遊びに熱中したものでした。時には、グループごとの対抗試合も行われたと記憶しています。

昭和二十二年五月、教育改革によって新制中学校が開校しました。庄内中学校は、戦前から在った青年学校跡をそのまま引き継いだのですが、少ない教室、狭い運動場の敷地で、五百七十七名（一年生三百十六名、二年生百四十八名、三年生五十二名）の生徒がひしめき合いながら授業を受けることになりました。新しいカリキュラムによって、民主主義の教育が始まることになったのですが、各家庭とも毎日の生活が大変な時で、休む生徒も多く、又、学校の施設も整わず、落ち着いて勉強できるような状況ではありませんでした。

開校時の体育の担任は飛松輝夫先生でしたが、運動場は狭い上に、荒れ放題の状態で、体育の時間は、まずグラウンドの整地

と、雑草の抜き取り、石ころ拾いなどに費やされました。その頃野球は益々盛んとなり、学校も野球用具一式を買い揃え、体育の時間に利用するようになりました。



開校時の庄内中学校平面図

庄内中学校に野球部が創部されたのも丁度その頃でした。部員をどのように募ったのか、選ばれたのか、私の記憶に残っていません。投手赤木亨（三年）、捕手坂元庸（一年）、一塁手隈部次男（二年）、二塁手平田尚孝（一年）、三塁手羽田勉（一年）、

遊撃手海老原昭（一年）、  
左翼手柳田久男（二年）、  
中堅手満永利美（二年）、  
右翼手松清喜佐男（二年）  
というメンバーでした。

一年生が四名もいるのが  
注目されます。この頃、

都城の併設中学や高校に  
通学していた学生達で作

る庄内学生会に、野球同  
好会なるものがあり、よ

く練習や試合をしていま

したが、私も一緒に中に入って練習したり、兄たちとしょっちゅう庭先や道路でキャッチボールをしていたことを憶えており、

その故あってか、他の生徒よりいくらかうまかったのだろうと  
思っています。

野球部結成後は、前述の同好会の人達や、当時外地から縁あつて庄内に引き揚げてこられた人達があり、その中に野球のうまい人達が何人かおられ、指導をうけたことを憶えています。特に、農機具工場に勤めておられた坂元正孝さんはすごい人で、



早大野球部出身で元ノンプロの選手であったということでした。私達に強い刺激を与えてくれましたが、一年位で庄内を去っていかれました。

このように、いろいろの先輩方に指導を受け、又、一緒に練習に汗を流しましたが、いつも食う物は少なく、腹ペコの状態  
で、服装もランニングにズボンといった格好、スパイクとて一足もなく、裸足でグラウンドを走り回っていたものでした。

この年の秋に、第一回の市郡対校試合が行われ、私達も出場  
しましたが、勝敗の結果は私の記憶にはありません。おそらく  
大敗したものと思っています。（当時野球部がある学校は少な  
かったと思います。）

二年目を迎えた野球部は新しく部員も増え、三年生六名、二  
年生四名、一年生五名の計十五名となり、部長にも、飛松先生  
の後をうけて、野球経験のある土方輝彦先生に代わり、内容の  
充実をはかることができました。又、学校近くの裁縫屋さんに  
頼み、左胸にSのマークを入れた最初のユニホームができあが  
りました。スパイクも布製ではありませんが、少しずつ穿く人  
もでてきました。対外試合なども活発に行われるようになり、  
いずれも良い成績を上げるようになり、秋の郡大会では、優勝  
こそは逃したものの、庄内中の名を知らしめることができました

た。

その後も弛まぬ練習により、都城北諸の強豪チームとしての伝統ある基盤を築くことができたものと誇りに思っているところです。

昭和二十七年には、新しいグラウンドができ、落ち着いた環境の中で十分な練習ができるようになりました。いろいろな大会で優勝するまでに

なり、そのことを大変うれしく思いながら、創部時の状況を懐かしく思い浮かべ、感慨一入といったところであります。



## 小学校の思い出

鷹尾 吉牟礼 フヂ

(東区出身、旧姓園田)

ある日の事セピア色した写真が出て参りました。年月日も記してないですが私の小学五年生の運動会の一コマです。叔父が撮ってくれたものです。とても懐かしく昔の運動会の事を思い出しました。昭和十四年の運動会の遊戯の所です。遊戯の題目は

「愛国行進曲」

見よ東海の空あけて 旭日高くかがやけば 天地の正気は  
つらつと 希望は踊る大八州 おお晴朗の朝雲に そびゆる  
富士の姿こそ金欧無欠ゆるぎなき わが日本の誇りなれ  
又「紀元二千六百年」「歓喜あふるるこの土を」どっちも何  
回も稽古をしました。その頃の運動会は自宅から運動着を着て  
裸足で行きました。この写真を見ると運動場の東がわに藁葺き  
屋根が写っていて私が通学していた頃の世界に引き込まれてし  
まいました。運動会には沢山の御馳走が食べられる嬉しさがあ

りました。巻き寿司とか卵のこが焼を母は上手に作ってました。運動会の時だけ作ってました。普段はお目にかかりませんでした。重箱の中身はいつもは食べられない上等の品が色々入ってました。それが一つの楽しみでした。私の小学生の頃には祖父も健在でした。鶏を飼っていたので明日の運動会



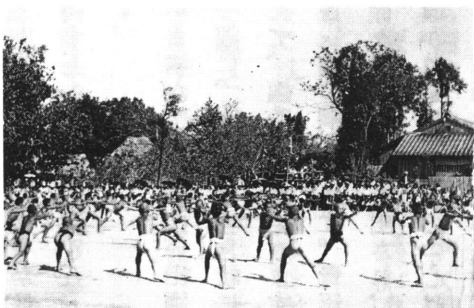
私たちの遊戯

の走り方が早くなるからと卵を生で飲めと妹と一個づつもらったものです。そして当日の走り方で横一列に並んでヨーイとの掛声の時胸がドキンドキンと大きく高鳴った事を昨日の事のように思い起こしております。誰でも記憶にある事と思います。

私の家は農家で今の様な農業機械もない時代ですから両親は何時も忙しく働いていました。蚕も沢山育てていました。蚕は生まれては少しの場所で良いのですが段々日が経つと大きく育ち分けていって全部の部屋を養蚕室に取られてしまします。母も起きたらすぐ朝露のあるうちに桑摘みに出かけていました。そして長女の私にご飯を炊く様に言いつけて出かけて行きますので仕方なしに炊いていました。初夏の頃だったと思いますが

母が桑摘みから帰ってくると桑の葉に包んだ物を土産に持って帰りました。何だろうと開いて見ると黄色のつぶつぶの丸っこい苺が入っているのです。それを美味しく食べた事を覚えております。自分は食べないで子供に持って帰る気持ちのそれは親鳥が雛鳥を育てる時の姿と同じだなあと今は亡き母に感謝しています。子供の時の思い出ですけどその事だけは鮮明に覚えております。その事を二才と少し離れた妹に話をすると思いは同じでその当時の事を又色々と言った昔の事など話して語りあいます。五才も年が離れていると子供の頃の思い出は違うみたいで兄弟姉妹集まった時に子供時代の話をして通じ合わない事もあります。五才離れていれば小学六年の時一年生だから違いがあるのでしょうか。

昭和十六年の三月に小学校を卒業しました。その年の十二月に大東亜戦争が始まり、段々と日本国中が戦争一色に変えられて行ったのです。それで私の小学校の思い出は、大切な大切な私の宝物なのであります。



男子生徒の相撲体操

# 昔の十五夜まつり

西区 和田 義秋

十五夜お月様 はよ出やれ

子供が喜ぶ 綱を引く

えいさっさ えいさっさ

旧暦八月十五日仲秋明月の夜は、今年の農作、五穀豊穰を祈り、地区の大通りで満月の下、区民総出で大綱を引き、相撲大会など大事な行事として賑やかに行われたものです。のちに相撲大会は南州神社に設けられた相撲場で、秋祭りに行われるようになりました。

十五夜が近づくとも地区の青年が中心になって藁集めをおこないます。高等科の人達、五・六年生も後をついていきました。地区の大きな催し、豊年に感謝する行事ですから、殆どの農家の人達は藁を一束、二束と気前よく寄進してくれるし、農業をしていない家でもお金を寄付してくれました。

前日になると大綱作りが始まります。組台は普通大きな立木の枝を利用しますが、高い頑丈な三脚も使われました。山から採ってきた藤かずらを綱の芯にして、枝にぶら下げながら藁を

つき足しつき足しし、三方から左方向巻きに、掛け声をかけ合  
い、くるくる回って綱を練り、直径十五〜二十糎、長さ五・六  
十米前後の太い綱ができあがりです。

今は「前田」は住宅地になっていますが、当時は広い田圃で  
蛙の鳴き声が賑やかでした。その一隅に、円くうず巻き状に重  
ね上げた上に餅など飾り、線香をたて、塩をまいて祀ります。

翌十五夜は、月の出を待って区民総出の綱引きです。青年団  
長の合図で、うず巻状の上段から徐々に大綱は引き出され、新  
道（本通）まで運び東西に長々と置かれます。大綱の中心は、  
西区消防団詰所の前です。本通りから川崎へ行く道の東角、富  
田さんの屋敷の所に高い火の見櫓が建てられ、二階建の詰所が  
設けてありました。

東西引き手の組分けはさだかではありませんが、二組に分れ、  
ラッパを合図に引き合いが始まります。月明かりのもと、男も  
女も、大人も子供も、掛け声勇ましく時を忘れ熱中したもので  
す。勝負の終りは法螺貝の合図で大綱引きをしめくりました。  
十五夜さんには、各家庭でも、一升瓶に稲穂やすすき、萩な  
ど挿し、初物のからいもや里いもなどの果物もそえ、箕（せつ  
なもん）に入れてお供えし、豊作を祝い、自然の恵みに感謝し  
たものです。



# 夏休みの思い出

東区 東 幸哉

歌にもある様に、人それぞれ思い出を胸に抱いていると思います。

その思い出を、ふとしたことで思い出し、何かに憑かれた様に、思いに耽ることがあります。又旧友にばったり会って、昔のことを語り合い、ああだった、こうだったと忘れかけていたことを思い出し、話に花を咲かせ、旧交を温めることもあります。そこで、昔のことを思い浮かべて、書いてみることにしたものの、書きあぐねて、ぼんやりと外を見ると、今日も又雨、梅雨というものの、この天気には、うんざりです。梅雨が明けると、暑い夏が待っています。そう、夏といえば私達には夏休みと云う楽しい思い出がありました。そのひと駒を書いて見ることにしました。

私達子供の頃は、夏休み程嬉しいものではありませんでした。当時は自家用車があるわけではなく、自転車があればいいほうで一寸乗るにも、兄貴に三拝九拝して、借りるといった時代

で、旅行などは、程遠いもので、六年生になっての修学旅行しか考えておりませんでした。何時も野や山が、私達の遊び場で、あちこちと遊び回ったものです。

今になって思うと友達と一緒に遊んだ印象が強く、それに遊びは平々凡々ではありましたが、楽しく、情緒あふれるものでした。

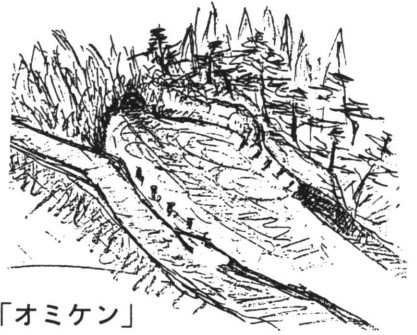
夏休みが来ると、我が天下が来た様に、毎日毎日遊び回り、よく叱られたものでした。しかし、叱られても、一夜明けると、けろりとして、友達と誘い合ってタオルを首に引掛けて、毎日の様に泳ぎに出かけたものです。時には畠から、もぎ取った胡瓜をかじりながら、時には庭先の桃を二つ三つちぎり、半ズボンのポケットに押し込み食べながら帰っていました。行く時に食べる泳ぐ時水を飲み込むので、腹をこわすと強く云われていたからです。

泳ぎ場所は当時プールがあるわけではなく、川に格好の泳ぎ場所が三ヶ所ありました。その三ヶ所とは通称「オミケン」「神田ごら」「いでごら」と誰もがそう呼んでおりました。しかし、今は昔の面影は全くありません。

そこで、三ヶ所の泳ぎ場の模様を書き述べて見ます。

「オミケン」は東区の山手を流れている前田水路の一部で

す。丁度城山の地下を通っておる  
隧道の出口です。勢いよく隧道か  
ら流れ出る水で、川床、それに両  
岸が長い年月で、洗い流され、中  
央は深く、流れも早く、両岸は広  
がり水はよどみ、山手の高土手に  
は足場が出来て飛び込み台になっ  
ていて、自然そのもののプールで  
した。



「オミケン」

「神田ごら」は西区から川崎に行く途中庄内川に架かってお  
る橋（木橋）の下付近で、広々としたよどみがあり、よどみの  
脇は、急流で足もとどかないくらいの深さがあったと思います。  
橋柱の桁から飛び込めるし、「オミケン」とは又違った良さが  
ありました。

「いでごら」は今屋から平田に通ずる道路の途中、庄内川に  
架って居る橋の上流の二つの堰のことです。上流の堰は杭を打  
込み、粗朶を編み込み川を堰き止めたもので、遊べる処ではあ  
りませんでした。下流の堰（下いで）は石畳で傾斜はゆるやか  
で、高さが二、三米ぐらいあり、それにノリがはっておるので、  
滑るのには、格好の場所で、それに、上までよじ登るのが又ス

リルがあり、面白く、夢中になって遊びました。二、三人で行  
くのは危ないからと親に止められており、友達が多い時だけし  
か、行けませんでした。この三ヶ所が、何時も行っていた私達の  
泳ぎ場所でした。今は変貌し、説明しても、想像も出来ません。  
私達は目的の場所につくなり、パンツ一枚になり、両人差し  
指に、つばを付け、両耳につっ込み、川にどぼんと飛び込み、  
皆の仲間入りして、時のたつのも忘れて、泳ぎまくり、体が冷  
えきって寒くなると、慌てて川から上がりました。唇は紫色に  
なり、体は震え乍ら、我家へ急いで帰り、時計を見ては、ホッ  
としたものでした。

帰って暫くは、おりこうさんにしておりませんが、時がたって  
来ると、のこのこと魚取りか、友達の家遊びに行くのが、私  
達の夏休みの日課でした。

当時は、テレビは勿論ラジオもなく、当然遊びも素朴なもの  
でしたが、それはそれは毎日が楽しいものでした。

このように私達の子供の頃は自然が遊び相手でしたが今は機  
械が遊び相手のように思えます。余りにも世の中が変り過ぎた  
ように思え、余計、私にとって昔が懐かしく思えるのです。

でも、流れには逆らえず、孫の遊びを私も習っておる次第で、  
私達の思い出というのは夢みたいです。

# 想い出（その四）

都原町 花村 節

（今屋出身）

何と云っても一番楽しいのは夏休みであった。ところが休み中は遊びが忙しくておさらい帳（宿題）が気になりながらも、一向に勉強しない。夏休みが終る頃になって、あわてておさらい帳を整理するものだった。

## ◎修学旅行

小学校六年生は鹿兒島、一泊二日の旅行で、始めて家から離れて泊る旅なので数日前から持参するものを揃えたりするのが楽しみなものだった。鹿兒島は西郷隆盛の墓や自決の場所などを見学してから照国神社に参拝した。旅館は照国神社近くの旅館だった。

夜は友達と話しがはずんでなかなか眠れずに先生が廻って来られたことなど憶えている。土産は鹿兒島名産の文旦漬とボンタンアメを買って帰った。

## ◎登山

小学校三年生の頃だったろうか、遠足のとき始めて草履せうりを買って貰った。竹の皮の「ぞうり」で花緒の所が硬いと足の股のところに「マメ」が出来るからといって父が「ぞうり」の前方を金槌でたたいて軟らかくして履かしてくれた。遠足の小遣金は当時三銭から五銭位だった。下駄菓子か、煎餅位を前もって買って来て持って行ったと思う。

## ◎夏休みの想い出

翌日は朝早く出発して西岳経由で歩いて帰った。西岳あた

りまで来た頃には足は痛いし、馴れない靴を履いての遠足で靴ズレをしたりしてやっと帰り着いた。

高等二年のときは「からくに岳」登山だった。

その当時は全行程歩いて行くので、大変だった。往きは山田町経由、高原から登山道に入り、登って行った。頂上までは相当遠かったことを思い出す。時期は確か十一月中旬頃ではなかったかと思う。途中は汗をかいて登って行ったが、頂上に上って昼食をするときは寒くてたまらなかった。下山は林田温泉の方に降りて、きりしま温泉泊だった。帰りはやはり歩いて、西岳経由で大変な道程で、夕方になってやっと帰り着いた。足には「マメ」が沢山出来ていた。

#### ◎裸足の登校

学校に行くのに素足であった。真冬でも殆ど素足で行った。雨上がりの翌日などは特に霜柱が強く、その上をパン・パン飛びして行くものだった。学校に着いたら教室の入口に足洗い場あり、冷たい水が溜まっているので足の裏のドロだけを落して教室に入るので、教室には足あとがついて、乾いたら真白に汚れが目立っていた。また、真夏日には道路が日やけして「はだし」では足の裏が痛いので道路脇の草の生えている所を歩いて帰るものだった。

#### ◎男女共学

小学校一年生のときは、男女別々であったが、二年生のときは男女共学であった。当時は「男女七才にして席を同じうせず」と云う封建制の強い時代であった。二年生のとき二人机に女と一緒にになったのが関之尾の末原イネ子さんだった。彼女とは「けんか」をした覚えがないから確か仲は良かったのだろう…。三年生以降は男女別々だった。

#### ◎担任の先生のこと

一年生の時は、福留先生でとても良く面倒を見て下さる先生だった。ひとつひとついねいに教えて下さっていた。

二年生のときは、森重先生で女の先生だった。山田町出身の先生で非常にきびしい先生だった。しかし勉強のときは良く細かい心づかいがあったように覚えている。

三年生のときは、山田先生だった。東区の公民館の近くに家を借りて居られた。小柄な先生でいねいに良く教えて下さった。

四年生のときは、八木厚先生で東区諏訪原に住んで居られた。体育の先生で体操の時間は走り方の指導など特に念入りに指導されていた。学校対抗の陸上競技大会で庄内は何回も優勝し優勝旗を持ち帰った。八木先生は良く詩吟しぎんを吟ぎんずる人で、放課後

等に詩吟の練習をするものだった。

五年生、六年生は新蘭先生だった。特に勉強熱心な先生で良く宿題も出され一生懸命だった。中学校、商業学校への進学組にはきびしく指導されていた。自分は進学組でなかったから授業が終わったらすぐ帰っていた。高等科一年二年は児玉実朝先生だった。特に熱心な先生できびしい先生だった。しかし、一番印象に残っている。

#### ◎校長先生のこと

一年生のときは、瀬尾義雄先生、二年生のときは、小堀嘉一先生だった。三年生、四年生のときは、岡蘭助左エ門先生で、特に印象に残っている事は、体格の良い大きい先生で元気な先生だった。朝礼の時もいろんなお話をして下さった。今でも一番役に立つ言葉が、「人は何でも、やれば出来る、やって出来ないことはない」という標語を職員室の前の屋外掲示板に書かれたのを記憶している。

五年生、六年生のときは富永忍先生だったと思う。お腹なかの出た、太った先生じゃなかったかと思っている。

高等科のときの校長先生は、愛甲進先生だった。背丈の高い、少しやせがたの先生だったように覚えている。校長先生の言葉で「世の中に皆さんが出て大事なことは使われる身、使う身に

なって仕事をしなさい」と云う言葉は今も役に立ち、忘れられない言葉である。

#### ◎卒業式

昭和十年三月二十七日に、修業式と卒業式が行われ、父は毎回来てくれていた。今回は本当に自分の卒業式だ。一番南側校舎、東の棟の教室の間仕切りがはずされて大部屋になる。ほぼ中央に演台えんたいが置かれ、その前に卒業生が座り、その両側に分かれて一年生から五年生へと順番に座って行く。式がはじまると先ず、君が代斉唱があつて、式が進行する。卒業生の名前が読み上げられて、最後に卒業生の総代が代表して証書を受け取る。総代で出られなかったのが悔しかった。

その次に修業生はそれぞれ学年毎に修業の証が授与される。そうして最後に校長先生の式辞がある。卒業生への激励の言葉、それぞれ無事修業する生徒達へのはげましの言葉があつて、感慨無量なるものがあつた。うれしさ、さびしさが胸にこみ上げらななかで、校長先生のお話を聴いたものだった。

#### ◎当時の小学校校歌

一、朝日たださす 霧島の

南ふもとに地を占めて

大淀川の川上に

模範の郷と仰がるる

我が庄内の ゆかしさよ

二、維新の当初 三島氏が

心つくして 後のため

たてし、いさおのあとおいて

日ごといそしむ 民あれば

郷は年毎 栄ゆく

三、いざや 吾等も 大君の

みことかしこみ 智をみがき

徳をおさめて 関之尾の

滝の響と もろともに

我が 学びやの 名をあげん

そして式はいよいよ、クライマックスに達し感慨無量。そし

て恩師に贈る唄の時になると、皆その感を更に強くし、涙をそ

そった。

### ◎卒業生の歌

一、仰げば尊し 我が師の恩

教えの庭にも 早幾年とせ

思えばいととし この年月

今こそ別れめ いざさらば いざさらば

二、朝夕なれにし 学びの窓

別るる後にも 八代やよ忘るな

身を立て名をあげ 八代やよ励めよ

今こそ別れめ いざさらば いざさらば

歌う途中に、さすがに泣けて来た。満足に歌えなかったことを思い出す…。

そしてまた、最後に在校生がみんなで歌ってくれる。やはりまだ子供ではあったが別れは、つらいもの。「別れは、逢ふことの初めである。」という校長先生の言葉に心ひかれ、涙したものである。

### ◎在校生の歌

一、蛍の光 窓の雪

文読む 月日、重ねつつ

いつしか 年の すぎの戸を

残り惜しくも 別れゆく

二、別れて 後も 朝な夕に

受けし 教えのこの庭に

今日は東に 西北に

空けてぞ 今朝は別れゆく

### ◎しめくくり雑感

私のつたない、幼少の頃の想い出を綴らしてもらったが、考  
えると時代はこの僅か五十年〜六十年の間に目まぐるしく変わっ  
た。これから先はまだ早いピッチで変わるであろう。世の中が、  
どう変わろうと、せめて長生きして、我々の子、孫の時代も、そ  
して永久に、安全で平和な世でありたいものと思う。

## 私が子供の頃、聞いた話

宮崎市 長友壮 一

(千草出身)

私の伯父長友才二郎(和則さんの祖父)は、子供の頃から  
歴史好きな人で、生前私たちに面白い、ためになる昔話を聞か  
せてくれました。

今回は幕末(西暦一八五〇年頃)の頃の庄内郷士の武勇談?  
を綴ります。

一、幕末の頃、都城島津の領主久寛ひさひろの館やかたは今の市役所の所に  
あり、その周囲を銃砲術の練武所、銃剣道の稽古所や明道館

(学問所)が取りまいていたそうです。

その中でも槍やり、剣道の師範(指南役)には渡邊甲介、龍岡某  
が君臨しており、庄内郷士は農閑期には手厳しく稽古をつけら  
れていました。

槍は短槍(一般兵が使う)で、吊ってある栗の実を衝く練習  
で空を切っては師範に怒られていました。

長友蔵之助(長友純憲さん宅付近に屋敷があった)の失敗談  
は、島津家の何かの祝い事で行われた武道披露会での事です。

元氣坊で、そっかし蔵之助は、大太鼓の音と同時に他の郷  
士の先頭に飛び出し、エイ、ヤッと突いてつきまくり、見物人  
の拍手かっさいを受けたそうです。

調子に乗った蔵之助は、体勢がくずれてよろめいた時突いた  
ところが大きなせんだんの木でしたので、槍が抜けなくなり大  
笑いになったとのことです。

一、同じく庄内郷士佐藤甚五郎(敏弘さんの祖父)は、私が  
子供の頃八十歳を越していたと思いますが背は六尺(一八〇厘)  
はあったでしょう、鼻筋の通った眼光のするどい古武士を見る  
ような風貌を憶えています。

この甚五郎が十四、五歳の若い頃、都城島津の柔道稽古所に  
入門を志して行った時の話です。

当時の柔道師範某は、この若者を頭のとっぺんから足先まで二、三回じっと眺めていましたが、「よし、あそこん先のせんだんの木を廻ってきやい」といつけました。

これが試練だと思った甚五郎は、全速力で二百米くらいを走り抜けて、フーフーいって帰って来ました。

じっと顔を見ていた師範は「お前や 何かあった時や走って逃げやい」といってさっさと去って行ったという話です。

註 文中の剣道師範渡邊甲介は、都城市八幡町にあった恒武館の創始者である。

## 子は親の背を見て育つ

### (その2)

小倉市 山口 武郎

(町区出身)

父は根っからの商業人であって農業とは全然無関係の人であったが、西瓜造りには一種の名人芸を持っていたようである。毎

年、夏の六月灯の頃になると店の前に縞の西瓜が大小様々に所狭しと並べられていた。父の造る西瓜は造り方にコツがあって他の人の西瓜よりも甘くて美味しいという事で近隣の評判であった。値段は特大で三十銭位、大中で二十銭位と値段がつけられていたが、値引きする事も多かった。

私も小学校二年生になった。その頃の父は、長年のアルコールの飲み過ぎで体調をくずしていた。医師の診断では慢性胃潰瘍との診断であった。五月頃、新茶造りの時期には、母の実家でもある済陽家では新茶造りで一番忙しい季節を迎える。その時期には父も母も手伝いに行くのである。父は手揉み茶の名人でもあった。若い頃に静岡のお茶の産地で手揉みの部で何回も優勝した事があるらしいと治助伯父の話であった。その時期になると母も父も済陽家に居るので私達兄弟も学校帰り道には遠回りして済陽家に寄って帰った。お茶を揉むフィードの下にはいつも木炭が一杯くべられていたので父はよく芋を焼いてくれた。

私は小学校三年に進級した。その頃から父が除々にではあるが体調が思わしくなくなっていた。あんなにアルコール好きの父がアルコールを口にする事も少なくなってきた。

今にして思えば、すでに胃潰瘍の診断があった時に、胃癌の



徴候が出ていたのではないかと推察されるのである。当時は胃癌であるならば絶対助からないといわれていた。東京で就職していた二男勝利兄も心配して、当時はまだ珍しかった養命酒や高価な漢方薬など送ってくれたが父の病状は一進一退の危篤状態が続いていた。

そして運命の日、昭和六年六月六日、私達兄弟にとって生涯忘れようとして忘れられない、一大事件が勃発したのである。

正午前の十一時三十分頃、庄内町天神馬場通りで発生した大火事。火は忽ちにして、隣接の長倉製糸工場へ燃え広がっていった。当時、どこの農家も養蚕が盛んで、六月の暑い日でも、囲炉裏いろりに木炭をたいて蚕に暖をとっていたのである。誰か留守番でも居れば早いうちに消火も出来、通報も出来たであろうに、如何せん無人であった為に、養蚕のための紙が風にあおられて、忽ちにして火の海になったのである。子供は危ないからと母に言われて、弟を連れて、家の前の渡司医院の奥の山元隠居所の畠の所へ避難をした。父は、当時重症の危篤状態であったので、三男光雄が背負って迎町の母の叔父に当たる宇野才次郎方へ避難した。家の方は幸にして類焼は免れたが、母はやれやれと安堵の胸をなで下ろすどころか寧ろ、父の病気の方が心配である。後で聞いた話であるが、製糸工場には女工さんが七、八十人位

は居たであろうか。当時は、大正年間より、輸出用の生糸の生産が盛んであった。その生糸工場に燃え移ったのである。学校の講堂位の大きな建物であるので、その火勢の凄さは当時の消防力の装備ではとても手をつけられるものではなかったと聞いた。隣は花盛木工所であった。この家も又大きな家であった。その時、天佑というか、風向きが西へと変わった。今度は風下に当たる北郷馬場一帯へ飛び火して十二・三軒位が全焼するという大火になったのである。

父はその時のショックがあつてか、家に連れて帰った翌七日に家族の見護る中で午前十時頃息をひき取ったのである。人々は、「あの火事で山口どんのお父さんが死んだ」といろいろ噂があり、同情しきりであったが、人の噂も七十五日ですぐ立ち消えてしまった。私はこれも天命であったと思う。偶然に庄内の大火と父の死が重なっただけの事で少しは死期が早まったかも知れないと今でも思うことである。享年数え年五十四才であった。

大黒柱の父を亡くした後の世帯のやり繰りは大変であったようだ。高等科一年の兄六二も秀才の部類であったようだが家計が苦しく、到底進学は不可能な状況であった。それに昭和六、七年頃は不景気のどん底の時代でもあった。我が家も例外では

なく家計の苦しい連続であった。兄六二は、小林の叔父宅へ代書の見習いとして奉公に出された。しかし、叔父宅も子沢山で好きな勉強を思うようにさせてもらえなかったといって、母に黙って帰ってきてしまった。不況のどん底時代であるので働くにも仕事がなく、本当に日本国中が貧乏のどん底時代であったのであろう。役場でも失業対策の一環として西区の方で農林道路工事を施行する事になって、兄と母は日稼ぎに行くようになった。当時の米の値段が一升十八銭で、その時代に大人の日当が四十銭、女子供は三十銭という決まりであった。当時、兄、良美は福岡へ出稼ぎに出て、家は三男光雄が守っていた。兄、光雄は青年学校の軍事教練の助手として週二回程度雇用されていた。そのような教育が私達の家庭にも浸透してか、厳しく躰られて来た。そのようなお陰であったかどうか判らないが私達兄弟には人に後指を指されるような人間は一人もいないと、それだけは誇りに思っている。

ある日、学校の帰り道、一人で母の仕事場を尋ねてみた。母達は二人一組になってモッコを担いで土を運ぶ仕事であった。母は私が一人で尋ねて行ったのでびっくりして、何か起こったのかと心配していた様子であった。「何も無い、只、お母さんの働く仕事場を見て置きたかっただけ。」と告げると、すぐひ

き返した。帰り道々、母が可哀相で涙が流れて仕方がなかった。そのような事があって、私の人生観というか僅か小学五年生の子供の考え方以上に私の経済観は変っていった。

私も早くも小学校六年生になった。この頃になると、ぼつぼつ上級学校への進学の話があり、進学組は組替えがあった。私も進学組へはいりたい気持ちは山々であったが家の経済状況等考えれば到底願える話ではなかった。親に話を切り出す糸口さえつかめず、やむなく断念せざるを得なかった。

六年生も半ばを過ぎ夏休みが終わると、秋の運動会と修学旅行のことが話題に上るようになった。修学旅行は例年通り鹿児島旅行と決まっていた。修学旅行へ行く者は五円也を納めるようにという通知書もらったが、この通知書さえ差出す勇氣もなかった。締切り日が迫り、とうとう兄、光雄に通知書を差出すと、「家には、今、余分な金は一銭もない。」とにべなく断わられた。私は、「町の殆どの人が行くのに、私も行きたい。」と再度頼むと、「お前達のような若い人達はこれから先、鹿児島といわず東京でも大阪でもどこへでも行けるよ。」というのである。翌日母が、福岡の良美兄に手紙を出して、修学旅行費五円を送ってくれるように書かないかという。私は早速、手紙を書いて頼んでみた。兄から折り返し、金五円が送ってきた。私

は小踊りして喜んだ。そして、旅行間近になると、親類のおば様たちから小遣銭といつて、思いがけなく七拾銭を頂いた。出発の朝になって母は、無け無しの虎の子壺円札一枚を財布から取り出し、「余り無駄遣いはするなよ。」といつてくれた。私は不断の貧しさなど忘れて、勇躍修学旅行に参加することが出来た。

やがて秋の運動会の時期になった。母は、「どの子もリレーの選手だったが、お前も宗平もリレーの選手に出してもらえないので楽しみがない。」というのである。私はリレーの選手ではないが陸上部の選手でまんざらではないと思つていた。私は走り高跳び、三段跳、走り幅跳等跳躍ものが得意中の得意だった。当時、ベルリンオリンピックが開催され、三段跳で南部忠平選手が優勝し、金メダルに輝いたのである。その影響を受け、私も跳躍に熱中したのである。ある体育時間、小学生では考えられない記録が出たと担任の先生から賞められ、益々、跳躍に夢中になっていったようである。

(つづく)

## あの頃(1)

—終戦直後新任地西岳—

妻ヶ丘町 古川 益雄

(元庄内中教諭)

終戦直後の台風で都城盆地は荒廃を極め、慘憺たる状況の中で、二十年十月一日付の西岳国民学校勤務の辞令を持って馬車で赴任したのだが途中で庄内町千草あたりで倒木に道をふさがれ、引き返して別路で西岳高野集落に夕暮れ時やっと着いた。唯一人での赴任。僅かばかりの生活道具を置く場所もなく学校へ行ったら校長の前田武平次先生が大変喜んで迎えて下さった。そして高野の友睦寮の世話人として二部屋用意されて寮に住みつく事になり、やっと落ちついた。

静かなコの字型の十一部屋続きの寮の朝は驚く事ばかりでした。少しばかりの畑は荒れ果て、軍が棄てた薬品等雑物が投棄されていて数名の小学生がヒョロ、ヒョロ起き出て来た。どこからどう手をつけていくのか検討もつかない。

何はともあれ初出勤で校長室に着任挨拶。五年一組男子組担

任との事、職員への挨拶、続いて全校朝会で紹介、体育主任に命ぜられ中旬挙行の運動会の企画運営を任された。終戦直後の何もない中で私の仕事が早朝から夕暮れまで続いた。

運動会直後に進駐軍二人が学校に来た。突然の事で校長は若い何も知らない私に対応を命じた。敵国であった米兵に英語で話ししなければならぬ羽目になった。旧制中学で五年間教習を受け英単語の八百位は記憶に残っていて、「よく来ましたネ、ウエルカム」を連発、私の手巻きの煙草を差し出した。険悪の状況だったが、うまく雰囲気を変える事が出来た。そして先ず校内一巡、何事もなく引き揚げる事になったが通路の横の貧弱な物置小屋に気づき開けると言う。私は早速小使いさんと呼んで開けてもらい検分が始まった。大変な事になってしまった。檜の木の銃剣術練習用の木銃が数十丁、鍬、スコップの柄など相当多量発見された。早速「小さく切って処分せよ」との事、運が悪いというのかその時ゴボー剣が数丁出てきたので米兵は物凄く怒りである。立合の皆は心配である。私はすぐ剣を一本取って、大きな玉石に叩きつけたり、コンクリートと大石との間に入れてこじる等したが鋼鉄製の剣はどうにもならない。私は「ブレイクファスト、オーケー」と言って対応はすんだ。そこで校長に「どこん馬の骨か知らんどん、やっけなどんだど

んが来もしたなあ」と大笑いした。この笑いに誘われて例の米兵二人も大笑いした。考えてみるとまこちぼっけな事を言っただもんだと思う。

それから奉安殿取り壊し作業を命ぜられた。立派すぎる位の日本式庭園に御影石造りの社殿破壊に取りかかった。どこでどうして手に入れたか記憶は定かではないが二十発位のダイナマイトを使った。夕方から取かかって一夜徹夜でやれば明朝子どもが登校して来る頃はすべて終了するだろうと頑張った訳だが夜が白む頃にはやっと三分の一位こわれた程度で無惨な姿を子どもに見せつける結果になった。この作業に先輩上司共々に三日間の昼夜を費やしてしまった。その後先輩達の指示で学校裏の川に残りのダイナマイトを投げこんだ。そしてすぐ下流の砂浜に待ちうけて鯉、ふな、あゆの大魚をバケツ七、八杯取るこゝが出来た。この様子を下流の高い県道から伊知地村長（故人）に見られてしまった。早速謝りに、小使いさんにバケツ一杯の魚を持って行って貰った。其の後夜おそく全職員の机の引き出しに大きいのを数匹ずつ入れてから数人の仲間教師とドンチャン騒ぎ、くさい黄色い闇焼酎の酒宴をやった。主領は故谷口勝郎先輩先生で四十才台前半の方で惜しくも早逝された。

この事があって数日後、勤務終了で帰宅途中見返りの坂（み

げいの坂)を登りつめる頃、一台の米軍トラックが数十名の米兵を乗せ私をユックリ追い越そうとした時に、車上の二人の兵が私の頭、胸めがけてピストルを突きつけた。私は一瞬驚愕息が止まった。引き金を引いたら一発必中の場面で命拾いした。九死に一生であり、この時を含めて終戦直前まで何回か命拾いした私であったからこれからは子どもを大切にしようという固い信念が生まれたものと思う。

毎日夕方寮に帰ると小人数で迎えに出る筈の子どもが一人もいない。残っていた小二年の女の子が「みんな後の山の穴に居る」と教えてくれた。すぐ軍の物資保管兼防空壕には入ってみると、その奥に数名タムロしている。二い聞かせ納得させて連れ帰る日が続いた。この友睦寮は高崎営林署霧島官行(御池)事業所の従業員の子達で当初は七、八人が居たが少しずつ増えて十三人位になっていた。もう戦争は終わったので学校はなくなったとの事で皆、御池の山の親元に帰ってしまった。それから私は毎週の土曜の午後と日曜日は徒歩で高野から御池まで荒川内経由で登り、寮に帰って学校に行くように説得を続けたのである。よく知りもしない歌をうたい、したこともない踊りもして説得した甲斐あって十一月末までには二十八人の該当児童全員が寮生活をするようになった。それでも不登

校或いは防空壕にかくれている子も居てこの時期は悲惨で苦難の毎日だった。

こんな時、学校の北西側の小高い丘に当時の青年学校があったが、そこに勤務していた二つ年下の小柄なとても賢そうな可愛い女性が居た。学校の帰り道に偶然出合っこれが奇縁と言うのか、宿命だったのだろうか彼女は翌年三月末で職を辞め私の所に来てくれた事になる。私の二十二歳後の人生が始まった。翌年三月には長男誕生となり、後年庄内中時代に長女祥子。高崎中時代に次女孝子の誕生と子どもに恵まれ教師として生涯の基礎を作り得たのである。

(次号へ続く)



# 111 一年間の歩み

庄内の昔を語る会事務局

平成十年四月十八日 鮫島 亨氏を議長に会員約三十名参集の第十二回総会も和やかに終了しました。引き続き行われた恒例の講演会は外交官として長年の海外勤務を終えられ退職された東区の坂元勲氏にお願いしました。各国を歴任された氏の外国生活体験談はすばらしく、しばしの間私達を異国の地にいたさないました。会員からアンコールの希望もありますので再度お願いする機会をもちたいと思います。

平成十年十一月の庄内ふるさと祭りに本会からは、庄内の各地域に伝承されている十二の芸能写真を大きく引き伸ばして展示しました。皆さん写真の中の知人を見つけては大騒ぎでした。会員待望の史跡探訪は平成十年九月四日北薩方面と平成十一年志布志方面の二回実施しました。探訪記は次に掲載しました。

平成十一年四月二十五日、琴吹寿司において十一年度の総会と都城市の文化貢献賞受賞記念祝賀会を兼ねて開催しました。

市長（代理）、宮崎庄内会から肥後さんと福永さん、本会顧問の瀬戸山先生も駆けつけて下さいました。大盛会でした。市文化課から本会が受託している稚児ざくらの清掃作業は会員の高齢化等もあり現在東区壮年会の応援を求めて継続中です。（徳郎）

## 「庄内の昔を語る会」が 「文化貢献賞」を受賞

都城市は大正十三年四月一日市制が施行されてから今年で七十五年目を迎えました。市ではこれを記念して平成十一年四月十五日盛大な記念式典を挙行しましたがその席上私たちの「庄内の昔を語る会」は市の文化発展に貢献したと云うことで文化部門において表彰されました。

これは私たちの「庄内の昔を語る会」が創立以来十三年間に亘って続けて来た地道な文化活動の実績が市当局に認められ高く評価された結果であります。

会員を始め本会を応援してくださる多くの皆さんと共にこの喜びを分かち合いたいと思います。

私たちはこの受賞を機に、皆さんに少しでも喜んでもらえる活動を続けて行きたいと意を新たにしていますので益々ご協力ご声援をお願い致します。

ついで本会が今回受賞されるに至った今日までの歩みを概記します。

### 今日までのあゆみ

設立年月日 昭和六十二年五月三十日

会員数 五十四名（平成十一年四月現在）

### 活動目的

庄内地区およびその周辺地域の歴史、民族、地史の研究と顕彰

### 活動内容

- 1、郷土誌「庄内」の刊行
- 2、史跡、文化財等の探訪顕彰及び保存
- 3、会員の研究発表及び会員相互の親睦会の開催
- 4、講演会や史料展示会等の開催

### 活動の実績

- 1、平成元年から郷土誌「庄内」を毎年一回刊行、
- 2、会員による郷土史の研究発表

### 3、重要史跡の保存顕彰事業の実施

平成四年度―山久院、稚児ざくら、釣こう院の案内石

#### 柱建立

平成五年度―釣こう院墓地復旧整備事業の実施

平成六年度―坂元源兵衛翁顕彰碑を関之尾公園の一角

#### に建立

平成七年度―稚児ざくら史跡顕彰碑を建立

平成七年度―「庄内空襲の碑」建立に当たり主導的役

割を果たす。

### 4、平成七年度から史跡稚児ざくらの草刈り清掃を実施。

現在続行中。

事務局（徳郎）

# 史跡探訪―北薩路をたずねて

東区 帖 佐 ミ ヤ

平成十年度の語る会恒例の史跡探訪は、元氣ぱりぱりの壮年部の方々の計らいで北薩摩地方を巡ることになりました。

九月四日総勢二十五名の参加で、マイクロボスを運転してくださるのが大川原さん、道案内を江口さんで、午前八時三十分庄内地区公民館を出発しました。

途中、高原インターより高速道路に乗り、栗野インターで降り、先ず、大口市の曾木の瀧を見学しました。

ここ曾木の瀧は、川内川にかかる幅二百メートル高さ十メートルで東洋のナイヤガラとも呼ばれる規模の大きい瀧です。バスから下車し、よく整備された小路をしばらく行くと、ぱあーと一望の下に瀧の全容が開けてきました。一面に広がる大きな岩の上をすごい速さで流れ落ち、白いしぶきをあげ、奇岩の間をくぐりぬけてはまた合流し、瀧を作っていく様はまさに圧巻でした。ここをバックに全員で記念写真を撮りました。

瀧といえは、すぐ私たちの誇る「関之尾の瀧」と比べたくな

ります。瀧そのものは、それぞれの特徴を持ち、見どころはあると思いますが、自然がつく

てくれた観光資源をうまく利用して、瀧周辺

を整備し、人を呼び入れる工夫がなされてい

る姿を見ると、庄内「関之尾の瀧」ももっ

となんとかならないものかと思うことでした。

瀧の見学のあと、それぞれに神社参りや洞窟きのご園等見て回り、次に出水市へと向

かいました。出水市は、きれいな出水が湧き出る地であったことからつけられた地名らしいです。この言い伝え通り、丁度、出水市へ向

かう山越えの途中、山地奥地から湧き出した清水が竹樋をつたって流れ出ていました。しばし車を止め、乾いたのを潤し、空っぽ

になった水筒に水を汲み、再び車に乗り込みました。

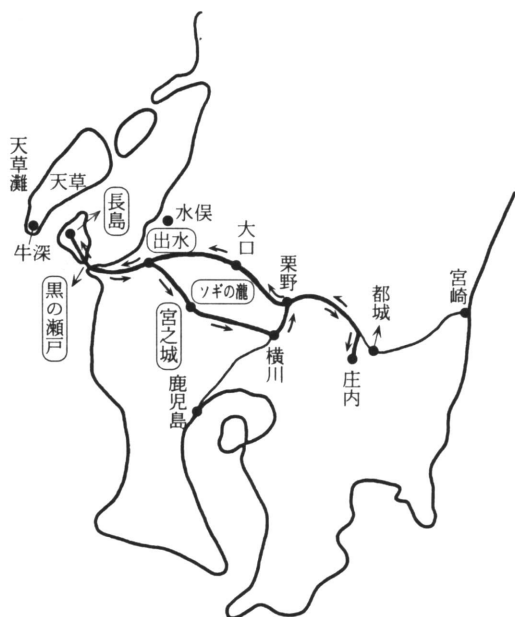




右に左にきれいな緑の山々を眺め、また、わが町の歴史家坂元さんの大口市に伝わる邪答院家の話、出水市の歴史等々に耳を傾けているうちに出水市の武家屋敷跡へと入っていきました。

出水市は、薩摩藩の北辺を衛る重要な地で最強の武士団を配置したということです。その名残りをとどめ、かなりの広さを持つ武家屋敷跡が見られました。知覧の武家屋敷跡は庄内から近いこともあるので多くの方々がすで見学されていることでしょうが、広さからいえば、遥かにこちらの方が広かったのだらうと想像されます。

屋敷跡入り口には、大きな案内板が立てられていました。昔



の家そのものはあまり残されていませんが、屋敷回りの小石を積み上げて築かれた垣根は見事なものです。いかにも古めかしいお武家さまの屋敷跡といった感じがするのです。特に、出水小学校の正門に当たるところでしょうか、仮屋屋敷跡という表札が掛けられ、当時を偲ぶのに十分な貫禄ある門壁、くぐり戸（武家屋敷門）などみられました。また、門から敵が簡単に攻め入らぬような曲がり曲がった屋敷造りもあちこちに見られ、お侍さんの行き交う姿など想像しながらここを後にしました。おなかもそろそろ減ってきて、いよいよよ楽しみにしていた昼食の場所「長島・黒の瀬戸」へと車は走ります。

車窓からは、鶴の渡来地らしくあちこちに鶴のオブジェや鶴の絵の描かれた看板が目につきます。出水市を出て、高尾野町―野田町を通る頃は少々みんな疲れが出てきたのかなんだか静かになってきました。

と、その時、前の方から「ほら、うん（海）が見えたぞ。」と案内係の大きな声。

「ひっちょうては せんじ だいじょっ じゃひど。（落ちはしないから大丈夫ですよ。）」と運転手の大川原さん。

その通り、とても急な下り坂の小道を車は曲がり曲がって下りていきます。

着いた所が「黒の瀬戸」。一同ほっとして下車しました。

ここ黒の瀬戸は、一に玄海、二に千々石、三に薩摩の黒の瀬戸といわれる急流の名所だそうです。まさにその通りで海水は黒の瀬戸を通って八代海の方へ流れて入っているようすがはっきりわかります。

恐る恐る崖下の海を覗きこんで見ると、なんと底まできれいに透きとおって見えるのです。思わず「わあー。きれい！」と歓声をあげてしまいました。

今いま、すぐ前の海から釣り上げてきたような生きのいい鯛、たこ、いかなどのお刺身に冷えたビールで乾杯。「よくぞ参加した！」といわんばかりの笑顔で全員舌つづみをうち、盃を交わし、いろいろな海の幸を腹一杯いただきました。

二時半、黒の瀬戸を出発し、昭和四十九年に架けられたという瀬戸大橋を渡り、長島を半周、途中、道の駅に寄って買物です。左に天草灘、そして遠く近く天草の島々がうっすらと見えます。ずっと向こうは東支那海というところでしょうか。なんだか天然のパノラマを見ているような気がします。海にばかり気をとられていましたが、車窓から見上げるほどの段々畑もまた見ものです。規則正しくそれはきれいに段がついているのです。この長島の段々畑は、天までとどくと言われている

ということ、ほんとにそうだなあと、またまた身を乗り出して見上げることでした。この辺りは唐芋の産地だそうで段々畑には唐芋が植え付けられているのでしよう。道の駅の建物にも「ポテトハウス」という名前がつけられていました。

これからは、いよいよ帰途につきまます。おみやげもたんまり買い込み、景色は最高、酒もおいしく、気分上々、これで車中は盛り上がりがないわけがありません。後ろの座席から昔懐かしい数々の歌とんちのいい話に大笑いし、前の方からはその返歌、みんなの拍手で大賑わいでした。

途中、宮之城の湯田八幡神社に参拝し、小休憩。また、しばらく宮之城の歴史を坂元さんからお聞きました。

ここ宮之城と都城とは深い縁があり、今でも交流が続いているということ。都城十代領主北郷時久は秀吉の命でこの宮之城に移封され館を建てたそうです。時久は人望もあり、りっぱな武将であつたらしく、このような殿様がよその土地に移封されたというのですから都城としては永代にわたって宮之城との縁を大事にしていることはわかる気がします。二、三年前、都城市民劇団の方がこの話を劇にして上演されたことを思い出すことでした。

また、ここは孟宗竹の産地であり、竹工芸品で村おこしがな

されているということで、街路樹に竹が植えられているのが印象的でした。

車は宮之城を通り過ぎ、横川へ出て高速に乗り、一路庄内へと急ぎました。

最後に、会長さんのお礼と感謝の言葉が述べられ、史跡巡りの楽しい旅が終わりました。

北薩摩地方は、都城からは、かなりの遠距離でもあり不便なところ。都城とゆかりのあるこの地方を是非、一度は尋ねて見たいと思っていたところに、史跡めぐりだけでなく、観光とびちびちの魚食いをかねて、本当にいい計画をしてくださいました。案内の江口さん、運転手の大川原さん、会計の奥田さん、鮫島さん、お世話になりました。ありがとうございました。また、来年を楽しみにしています。

## 志布志の史跡探訪の記

町区 山下 謙二郎

「庄内地区ライフセミナー」の一環として志布志の史跡探訪が行われた。

平成十年十二月七日（月）はっきりしない天気である。二十数名の参加となった。午前九時、マイクロバスはいっぱいの人を乗せて庄内地区公民館を出発した。最初は郡元の清掃工場である。高い煙突が見えて来たところで、クイズが出された。

「あの煙突の高さは何メートルだろう」と言う問題である。バスの中で皆口ぐちに自分の考えた高さを言う。正解者には景品があるというので真剣だ。三十メートルから百メートル台まで出ていたようだ。（正解は七十メートル）

研修室で説明を受ける。その後、中央制御室に入り炉内焼却状況を見せてもらった。清掃工場での説明を聞き、焼却の実際を見て、ごみはよく分別して出す、ビニールなど有毒ガスの出るものは出さない、出す量をできるだけ少なくすることなど、ごみ問題を自分のこととして考えさせられた。

志布志最初の史跡は山宮神社である。まず目に入ってくるのが境内の入り口、神社に向かって右側の大クスである。推定樹齢が一千二百年〜八百年と言われている。樹の周囲、目通り十七メートル、樹高約二十四メートルという巨木である。その大きさ、樹形のよいことに皆感嘆の声である。

この山宮神社は社伝によると和銅二年(七〇九)の創建となっている。祭神は天智天皇、大友皇子、持統天皇、倭姫、玉依姫、乙姫の六座である。ここには国指定文化財の「唐草鴛鴦文様銅鏡一面」がある。平安時代後期(一一〇〇年藤原時代)の和鏡である。それを模したものが入り口左側にあった。

次に大慈寺へと向かう。大慈寺は志布志の町中にあり、寺門の左右に仁王像が立っている。左側は口を開いた呵形(あぎょう)の「密迹金剛」、右側は口を結んだ吡形(うんぎょう)の「那羅延金剛」である。ともに仏法や伽藍を守る守護神である。二体とも一六八〇年代のものである。

大慈寺の創建は興国元年(一三四〇)で開基は志布志城主・楡井頼仲、開山は玉山玄提和尚である。この寺は「三国名勝図絵」によればかなりの広さを持ち(寺域八町四方という)、盛況を呈していたようである。しかし明治二年の廃仏毀釈により大小の殿堂を全壊して、一時は廃寺となった。明治十二年柏州

和尚(勤王僧として著名)の努力によって寺号を復し再興された。本堂の西側に楡井頼仲、柏州和尚の墓がある。

それにしても明治元年に出された神仏分離令に始まる廃仏毀釈の動きにはすさまじさを感じる。仏像や経巻や全ての仏具は藩吏の監視の下に焼かれ、石の仏像はたたき壊して河川の水よけなどに用いたと言う。特に薩摩藩では明治二年(一八六九)

十一月に「領内寺院廃止令」が出され、以後数年間、

全国にもめざらしく一寺院・一僧侶の影も見ない状況が続いたという。

こんなにも激しい廃仏毀釈(文化財の打ち壊し)がどうして行われたのだろうか。この廃仏毀釈は、維新政府が神道国教政策



をとることによって、幕藩支配と結合した仏教に打撃を与え、天皇の政治的地位を神道に結びつけて確立しようとしたものであるといわれる。

楽しみの昼食は夏井の「大黒」である。広間のガラス窓を通してみる志布志湾の広がりには壮大である。海に浮かぶ枇榔島、右手にはググリ岬が見え、その突端は「幻の前方後円墳」といわれる古墳である。昭和三十八年頃、国民宿舍建設によって全壊したものである。五世紀中葉のものとされている。このころ既に大和政権の勢力が浸透していたのである。海上から見る前方後円墳の威容は外敵への威圧となったことであろう。

ひとしきり、海の幸に舌鼓をうちながら、ビール・焼酎を酌み交わし話はずむ。

昼食が終わり再び志布志の町に引き返す、天神原（てんじんばい）を下り、志布志の町に入ってすぐ右におれて行くと宝満寺跡がある。これも明治二年の廃仏毀釈により廃寺となったところである。宝満寺は奈良時代、聖武天皇が皇国鎮護のために各地に建てられた勅願寺の一つで「律宗密教院宝満寺」の跡である。その後、正和五年（一三二六）に後花園天皇の院宣により、再興されたと言う。

入口に仁王像一対が立っている。これも廃仏毀釈により壊さ

れたらしく、体のあちこちに補修が施されている。入って右手の岩山に洞窟がある。かなり深いものであるようだ。

境内の奥の方に観音堂があり、お産の神様として今も子宝に恵まれない人や、安産を願う人々の参詣がある。毎年旧暦四月八日（現在は五月五日）は花祭りで町を挙げてのにぎわいを見せる。川をはさんで北側に志布志小学校が見える。その後方の丘が志布志城である。

宝満寺から平山氏庭園へと向かう。道不案内のためたずねたずね行く。やっとたずね当てる。石垣の門を入ると背後に樹林を背負った住家と庭がある。この庭は、江戸初期の造園で石峰寺跡と言われる。「自然の傾斜地を利用して、裾のほうに露出した大岩盤の崖を主景としている。その上に青々とした山の景観を表現」したものとされる。後方の山に登ってみると寺跡の名残るか石塔の残欠が散在していた。

最後は志布志港の見学である。この志布志港は一九六九年（昭和四十四）に「重要港湾」の国指定を受け、一九七一年から町は県とともに大型新港建設をめざして埋め立てを進めてきた。かつての渚や海が、今は大型船の埠頭となり、大きな建物が立っていて、その間をきれいに整備された舗装道路が縦横に走っている。大型建物のほとんどが飼料工場である。農協系列

の全農サイロ、南日本くみあい飼料と商社系、外資系のものである。この飼料工場からは、鹿児島県をはじめ都城、北諸地方の畜産農家へも送られていく。この飼料工場の近くで強い風の中、参加者全員の写真撮影をした。

志布志港は志布志湾のほぼ中央に位置し、古代から大和政権の重要な拠点として存在し、江戸時代には、南西諸島や京阪地方との貿易による廻船でにぎわいを見せていた。藩政末期には密貿易の基地として栄え、「志布志は千軒の町」といわれるほどの町並みであったという。志布志に古くからの文化財が残されているのはこのような歴史の厚みがあるからであろう。

十六時すぎ史跡探訪を終え地区公民館へ帰って来た。車中は坂元徳郎氏の司会、説明で楽しく有益な研修であった。この研修を企画・運営していただいた方々へ感謝の気持ち一杯である。

## 編集後記

今回は編集部に創刊以来初めてと言う試練が訪れました。続々と寄せられる原稿の山を見て編集会議はただならぬ空気に包まれました。どうしたものか！

お願いして折角書いてもらった玉稿を次号回しにする失礼は許されません。城山の崖から飛び降りるつもりで、常連の連載稿を思い切ってカットしました。そしてなお玉稿の重複文章部分等も文意を損なうことの無いように注意しながら削除させて頂き切り抜けることと致しました。失礼の段お許しください。

今後ともご寄稿賜りますよう宜しくお願い致します。(徳郎)  
平成十一年十月吉日

### 編集委員

木幡敏正	坂元徳郎
臼杵徳光	山元昭平
清水省三	帖佐ミヤ
山下謙二郎	和田盛行
坂元庸	

# 平成十一年度会員名簿

庄内の昔を語る会

地区	氏名	☎
西区	伊地知 義夫	三七二〇九九
〃	菓子野 美和子	三七一八九一
〃	清水 省三	三七一八一四
〃	野海 正治	三七一四八四
〃	藤村 正久	三七〇三〇八
〃	山口 耕二	三七〇三四九
〃	池田 シヅ	三七二二三二
〃	津曲 弘美	三七一四八六
〃	奥田 正明	三七〇三七三
〃	久保 勝吉	三七一三九五
〃	宮之原 重忠	三七〇三六八
〃	堀 弘子	三七〇〇七一
〃	長峯 良文	三七一三九九
町区	山元 昭平	三七〇六七〇
〃	鎌田 学	三七〇〇八六
〃	山元 一光	三七二二二六

町区	氏名	☎
〃	大河内 隆之	三七〇五六七
〃	井上 将	三七一九〇二
〃	大田 美智子	三七〇八四三
〃	鮫島 亨	三七〇一二七
〃	山元 一信	三七二八八三
〃	坂元 清景	三七二二二七
〃	山下 謙二郎	三七〇八三一
〃	山元 マス子	三七二二二六
〃	水谷 文江	三七一四七六
東区	片ノ坂 登	三七二九七二
〃	木幡 敏正	三七一六五〇
〃	坂元 徳郎	三七〇三五〇
〃	椋田 泉	三七〇七七六
〃	新穂 照子	三七〇一〇九
〃	帖佐 ミヤ	三七〇〇二一
〃	萩原 忠子	三七〇一二二
〃	黒木 ツミ	三七二二八二
〃	江口 高見	三七〇一六一
〃	大川原 紀美生	三七二二二〇
〃	満木 敏公	三七〇三二八

東区	奥田 正幸	三七一三七三
〃	黒島 昭典	三七〇二〇五
今屋	鶴島 善市	三七二二六八
〃	田村 誠	三七二二七八
川崎	前畑 文利	三七二〇四六
〃	福村 修	三七三〇四七
〃	田中 義輝	三七二〇二八
千草	臼杵 京子	三七一七〇九
〃	長友 久二	三七二二三三
〃	臼杵 徳光	三七一八五六
宮島	今村 勇	三七二九三六
〃	坂元 庸	三七一七六二
平田	野村 君雄	三七〇八九二
〃	和田 盛行	三七二四四六
南鷹尾	岩佐 フヂ	二五一三五三九
鷹尾	福村 静徳	二四二四四〇

内科・胃腸科・小児科・循環器科

医療法人田中会（理事長 田中昭彦）

# 庄内田中醫院

TEL **37-0507** 院長 田中彰人

胃カメラ・大腸カメラエコーによる精密検査実施中

都城市庄内町12531

内科・小児科・循環器科・消化器科

医療法人田中会（理事長 田中昭彦）

# 久保原田中醫院

TEL **22-7700** 院長 田中穰三

CT：胃カメラ・大腸カメラエコーによる精密検査実施中

都城市久保原町13-1

医療法人社団田中会

訪問看護ステーション

# くぼはら

自宅での心温まる看護を致します。

ご利用の際は 庄内田中醫院 久保原田中醫院 へご相談下さい。

所長 田中久子

TEL **21-8077** FAX **21-8078**



いつも皆様と共に

# 宮崎銀行庄内支店

支店長 若松 廣久

TEL 37-0555

# ありしま歯科

院長 有島 正浩

都城市菓子野町10273

TEL 37-3023

**受付時間**

午前 8 : 3 0 ~ 1 2 : 0 0

午後 2 : 3 0 ~ 7 : 0 0 (土曜日は、5時まで)

\* 日曜・祝日は休診

(但し急患はこの限りでは有りません。)

# 川 畑 整 骨 院

宮崎県都城市菓子野町10272-7

☎ (0986) 37-0152

**毎度ありがとうございます!!**

## 有限 会社 徳石石油庄内店

☎ 37-0121

FAX 37-3174

西岳店 ☎ 33-1516

FAX 33-1518

スポーツ用品全般

# 宇野スポーツ

代表 宇野 行 則

宮崎県都城市庄内町12450

TEL (0986) **37-1255**

特 定 建 設 業

土木・建築設計施工／一級建築士事務所

郷土の明日を拓く



## 丸宮建設株式会社

代表取締役 宮竹 繁美

常務取締役 河野 一治

本 社 都城市庄内町8031番地2

TEL (0986) 37-0382 FAX (0986) 37-0371

宮崎営業所 宮崎市恒久2丁目18-11

TEL (0985) 59-5920 FAX (0985) 59-5920

21世紀を開発する

神社・寺院・銅板屋根工事  
屋根診断コンサルタント

〈設計・施工〉

# 江口板金工業株式会社

代表取締役 江口 高見

〒885-0114 都城市庄内町12340-ロ  
TEL (0986) 37-0161  
FAX (0986) 37-1904

高級和洋菓子

婚礼、仏事菓子、バースデーケーキ、クレープ、その他

# お菓子のやまもと

店主 山元 寿一

南鷹尾町38街区12 (鷹尾店) ☎21-0011

町天神通り (庄内店) ☎37-0670

# 庄内 第十一号

平成十一年十月二十日 印刷

平成十一年十月二十二日 刊行

刊行  
編集  
庄内の昔を語る会

都城市庄内町庄内地区公民館

電話（〇九八六）三七―〇八八番

印刷  
株式会社 文昌堂

都城市東町十八街区一号

電話（〇九八六）二二―一二二番

